

# 日本写真家協会会報

NO.181  
(2024. Mar.)

- 焦点「令和6年能登半島地震」の現場から
- 第17回 JPS フォトフォーラム「旅を撮る」
- 第18回「名取洋之助写真賞」受賞者決まる

JPS



Photo Noda Masaya

# YOU ARE A COPYRIGHT OWNER

撮影した瞬間に

著作権は生まれます。

—— 著作権は無方式主義

クレジットを入れ忘れてしまったから

データをすべて渡してしまったから

そんなことで著作権が失われたと思っていませんか？

著作権は何の登録もなく、撮影した瞬間に生まれ

譲渡する契約がなければ

いつでもあなたに保持されています。

そして、写真は時を経て、価値が上がる珍しい分野です。

写真家として一生をおくる時

著作権はあなたの強い味方になるでしょう。

写真著作権を大切に。



一般社団法人

日本写真著作権協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

<https://jpca.gr.jp>

【会員団体】 公益社団法人日本写真家協会  
公益社団法人日本広告写真家協会  
一般社団法人日本写真文化協会  
日本肖像写真家協会  
一般社団法人日本写真作家協会  
全日本写真連盟  
一般社団法人日本スポーツプレス協会  
一般社団法人日本自然科学写真協会  
日本風景写真協会  
公益社団法人日本写真協会  
一般社団法人日本スポーツ写真協会

# TAMRON

Focus on the Future

35-150mm F/2-2.8 Di III VXD (Model A058)

ソニー Eマウント用/ニコン Z マウント用

世界初\*  
大口径F2スタート、  
ポートレートズーム、  
誕生。



# 35-150<sub>mm</sub> F2-2.8

for Sony full-frame mirrorless  
for Nikon full-frame mirrorless

NEW

(Model A058) ソニー Eマウント用/ニコン Z マウント用 Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

\*フルサイズミラーレス用ニコン Z マウントズームレンズにおいて。(2023年7月現在。タムロン調べ)

[www.tamron.com/jp/](http://www.tamron.com/jp/)

製品の詳細情報はこちらから▶



■ Gallery	JPS ギャラリー 下瀬信雄、小笠原敏孝、高橋 渉、虫上 智 ..... 5 上吉川祐一、佐藤昭一
■ First Message	環境変化に合わせた改革を！ ..... 熊切大輔 11
■ Focus	「令和6年能登半島地震」の現場から ..... 石井真弓 12
■ Telescope	写真救済活動を続ける「三陸アーカイブ減災センター」 ..... 柴田 誠 14
■ Zooming	写真の散歩道(連載8) ..... 鳥原 学 16 フィルムカメラの復活を支える若者たち
■ Workshop	著作権研究(連載56) ..... 棚井文雄 18 著作者を殺すのは誰か！—「著作者人格権」軽視の重い影—
■ Convention	第49回「日本写真家協会賞」贈呈式・第18回「名取洋之助写真賞」授賞式 第6回「笹本恒子写真賞」授賞式・2023年度会員相互祝賀会..... 20
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告(40) ..... 寺師太郎 24
■ Topics	賛助会員トピックス ..... 26
■ Award	2023年第18回「名取洋之助写真賞」報告 ..... 28
■ Forum	第17回 JPS フォトフォーラム ..... 32 「旅を撮る」講演・パネルディスカッション=小澤太一、竹沢うるま、 山口勝廣(パネリスト)、飯田裕子(司会進行)
■ Exhibition	第6回「笹本恒子写真賞」受賞記念展 ..... 38 第18回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展
■ Education	第5回「おやこ写真教室」開催 ..... 教育推進委員会 40
■ Adieu	篠山紀信さんを回想して ..... 勝又ひろし 41
■ Report	2023年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告 ..... 小松由佳、竹田武史 42
■ Report	セミナー研究会レポート ..... 44
■ Books	JPS ブックレビュー／第49回 2024年 JPS 展開催予定 ..... 46
■ Report	「鉄道博物館ナイトミュージアム撮影会&鉄道撮影マナー講座」 ..... 柴田 誠 50
■ Information	2024年第19回「名取洋之助写真賞」作品募集／第49回 2024 JPS 展 関連イベント .. 51 【News】JUCC2023年度「著作権貢献賞」山口勝廣、吉田大輔の両氏が受賞 声明「生成 AI 画像についてその考え方の提言」、「性的姿態撮影罪」の呼称についてのお願 い追悼 = 名誉会員・富岡畦草、正会員・中川邦昭、林喜代種、坂田 薫 川西正幸、大橋俊夫、金瀬 胖／表紙、表4 写真解説／経過報告／編集後記
■ Congratulations	おめでとうございます 第8回「澄和賞」受賞者 大石芳野さん ..... 59
■ Message	Message Board ..... 60
■ Gallery	X ギャラリー 今浦友喜、柴田 誠、小河俊哉 ..... 64 表紙・野田雅也、表4・KAO'RU

広告  
案内

- (一社)日本写真著作権協会(JPCA)
- (株)タムロン
- OM SYSTEM GALLERY
- リコーイメージング(株)
- (株)シグマ
- (株)堀内カラー
- キヤノンマーケティングジャパン(株)
- (株)ヨドバシカメラ
- 富士フイルム(株)



# OM SYSTEM GALLERY



## OM SYSTEM GALLERYのご案内

オリンパスギャラリー東京は2022年2月3日より  
OM SYSTEM GALLERYへと名称変更いたしました。

\*所在地・営業時間などの変更はございません。写真展のご応募お待ちしております。



新宿三井ビル  
新宿センタービル  
都庁方面  
京王フラザホテル  
中央通り(地下通路)  
工学院大学  
西口  
JR新宿駅  
OM SYSTEM GALLERY  
エステック情報ビルB1





## 出立ちの花嫁 ————— 下瀬信雄

「指月」(しがつ・しげつ)は楞嚴經(りょうごんきょう)に出てくる教えで、このシリーズのタイトルとなった。そしてこの度『萩の日々』(1998・講談社)以来26年ぶりに故郷萩を中心に撮影した写真集『つきをゆびさす』をリリース。写真はその中の「産土の章」の冒頭を飾る写真で、花嫁の「出立ち」の一枚である。自宅で衣装を整え、行列を組んでのお嫁入りはめっきり少なくなってきた。それでも通過儀礼の形態は少しずつ形を変えながら、私たちの生活の中に息づいている。

写真集『つきをゆびさす』  
写真展『つきをゆびさすⅢ 産土の章』





「憩」 - Ikoi - \_\_\_\_\_ 小笠原敏孝

自身の商業的撮影からのフィードバックのひとつとして、和花の写真をスタジオ等にて撮影しています。この写真はユリ科のノカンゾウという一日花を、休日の微睡む日差しに憩う姿をイメージ。撮影の段階から越前和紙へのプリントを前提として制作していますが、私の手を離れ印刷された「花の貌」が皆さんにどのように感じていただけるのが楽しみです。  
写真展「花の貌（かたち）」





## 箱根海賊船——高橋 渉

箱根・芦ノ湖で運航されている箱根海賊船。2019年11月、気嵐の中をやってくる海賊船の幻想的な光景に出会い、乗り物としての魅力だけではなく、雄大な自然現象への興味が深くなった。これをきっかけに撮り続け、写真展や写真集にまで結び付いた。ひとつの被写体にこだわることは、テーマやコンセプトに独自性と深みを持たせることにつながる。ほかにも独自性のある表現ができる被写体が、身近なところにもあると思う。

写真集『箱根海賊船 (Hakone Pirate Ship) 』







## 「刻景」—— 虫上 智

時は必ず過ぎてゆく。私たちは時として過去のことを思い出し、懐かしい楽しい記憶を思い出したりする。逆に、悲しく、残酷な思い出を背負い、思い出し、終始感傷に耽る。天国にゆくとか土に還るとか私たち人間は解釈している時もあるが単に消えて無くなるだけなのかもしれない。この作品の中でも、もうすでに消え去ったモノもあるが一つ確かなことは、それはそこにあってそれをとりまく様々な物語があったということだ。

写真集・写真展「刻景」







## 皮から革へ ————— 上吉川祐一

生活の中に当たり前のようにある財布、かばん、ランドセルなどの牛革製品は、牛を食肉用加工後に出る皮を利用して作られている。牛が成長する畜産場から命を落とす屠殺場、皮から革へ変わるタンナー(製革工場)、革から財布などを製作する革工房、捨てられるはずの皮がたくさんの人の手や工程を経て、皮革製品へと生まれ変わっていく。人間は生き物たちに生かされている。食べたり着たりすることは当たり前ではない。

写真展「いのち -牛革製品ができるまで-」





### 「写真交響詩・橋」～世紀を繋ぐ四谷見附橋～ — 佐藤昭一

八王子市東部の長池公園に架かる「長池見附橋」は、もとJR四ツ谷駅にあった「四谷見附橋」（1913年 大正2年建設）の移設陸橋です。1991年、同駅前道路の拡幅により二代目が新設されました。移設された初代橋は1993年から「長池見附橋」に改称され30年を経過しています。大正から令和までの時代を経て110年、まるで自然豊かな環境で第二の人生を謳歌している人を思わせます。

写真集・写真展「写真交響詩・橋 ～世紀を繋ぐ四谷見附橋～」





# 環境変化に合わせた改革を！

会長 熊切 大輔

新年早々、元日の能登半島 M7.6 の大地震、翌日に羽田空港での航空事故と立て続けに起こった不幸な出来事は、2024 年の始まりを重く辛く悲しいものへと変えてしまいました。加えて世界的に見ても各地で不安定な状況が継続し、緊張が解けない日々が続いています。令和 6 年能登半島地震においては、未だ復興のめどが立ちあらず、困難はしばらく続いてしまうのではないのでしょうか。被災された会員の方、そしてそのご家族や関係者の皆様に改めてお見舞いを申し上げますとともに、協会として今後できることを考えていきたいと思っています。

様々な災害や紛争が起こるたびに「写真のあり方」について考えさせられます。日々の何気ない街角や風景、人々の生き生きとした表情を写し記録する。そんな、当たり前のような撮影も、平和な日々を過ごしているとおろそかになってしまうことがあります。様々な光景を失ってしまったときに、改めてその重要性を実感します。記録としての写真の価値、必然性を今一度考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

一方で、社会の動きは活発になってきています。日々増える海外からの観光客は、街の景色、空気感を大きく変えています。様々な祭りなどイベントも復活し、写真家はもちろんアマチュア写真家も撮影機会が増えているのではないのでしょうか。そうした流れは JPS 展に如実に反映されています。5 年連続で 10% ずつ減少していた応募総数が、本年は 15% の増加に転じました。社会状況の改善も大きな要因ですが、写真展事業委員会をはじめとする皆さんの地道な広報活動が実を結んだのではないのでしょうか。

変化やチャレンジを恐れずに長い目で改革していくことで、その成果が確実に反映されます。名取洋之助写真賞においては、異例の 3 名の受賞となりました。厳しい選考はもちろん必要です。しかし若い写真家の可能性を見いだすことが目的の本賞の性質を踏まえて、良いものは慣例にとらわれず評価するという決断ができたことは、選考委員の皆様のご理解とご決断とともに、企画委

員会のサポートがあって実現できたといえるでしょう。

JPS と様々な団体との交流もいよいよ活発化してきました。JPS として初めての後援となる国立近代美術館の中平卓馬氏の回顧展。注目度の高い本展は写真の芸術的価値を世に知らしめる重要な展示となるはずですが、ここに後援という形で JPS が関わることは非常に重要な一歩だと考えています。会員の皆さんもぜひご覧いただき、本展を盛り上げていただければと思います。

「2024CP+」も、JPS として積極的に関わりを持つ形となりました。会長である私自身も含めて多くの会員の皆さんや委員会が様々な形で本イベントに参加することによって、一般の方はもちろん、カメラ業界や写真家の皆さんに JPS そのものの認知度を大きく上げることにつながったと感じています。

JPS として内部的活動も順調に進行しています。会長、副会長による全国行脚は、関西地区を皮切りに東海地区そして中国地区につながっていきます。この企画は、皆さんと顔を合わせて直接話すことが肝だと考えます。Zoom など物理的な距離が解消される便利な世の中になりましたが、やはり直接目を見て話すことで本音で話せる、ということはこの企画を実行して改めて実感しています。引き続き全国をお訪ねしますのでご協力をよろしくお願いいたします。

「JPS 変わったね」。集まりに行くとき多くの方にその声をかけられます。改革はまだ始まったばかりですが、その効果は早速ジワジワと浸透、発揮していると感じています。さらにその力をパワーアップするには会員の皆さんの協力が必要となります。JPS の価値を上げること。それが会員の皆さんの、入会した意義になると考えています。それは同時にまだ会員になられていない多くの写真家の皆さんの、入会したい、一緒に活動したいという動機になると思います。多くの写真家や業界関係者の皆さんと一丸となって写真界を盛り上げることが JPS の発展につながると考えています。本年も引き続き当会の活動にご協力いただけますようお願いいたします。

# 「令和6年能登半島地震」の現場から

～能登半島の西岸地域と輪島市へ～

文・撮影／石井真弓(JPS 会員)

2024年が明けた1月1日の午後、石川県の能登半島でM7.6の大地震が起きた。輪島市に住む知り合いが心配になり、安否を確認しようとしていた頃、イギリスのテレビ局から能登半島取材のサポート依頼が来て、急ぎ現地に行くことになった。私は写真家の仕事の合間に、時々頼まれて海外テレビ局のコーディネーター兼通訳もしていて、今回はその一環だ。

1月2日にテレビ局のイギリス人レポーターとビデオグラファーが来日し、私たちは能登半島に向かった。金沢市に夕方に到着し、市内で家が崩れたという報道のあった場所に行くと、新興住宅地の高台が崩れ数軒の家屋が下に崩落していた。近くにいた人によると、居住者は不在で無事だったという。レポーターがその場でニュースビデオを一つ撮影し、地震被害の最初の映像をイギリスに送った。

翌朝、金沢市の中心部は地震などなかったかのような通常の光景だった。この日は西海岸沿いの249号線から輪島市を目指して車で北上することにした。

## ■北部に行くにつれて被害の甚大さを実感

志賀町まで来て、海沿いに向かう道路を走って行くと、右手に発電所のような施設が見えてきた。地図で確認すると志賀原発だった。1日に地震があった時、原子力規制委員会から来たメールには、志賀原発内のモニタリングポストは異常なしと書かれてあったことを思い出しながら通り過ぎ、外観は津波の影響もないように見えた。ただ、東京に戻ってから数日後、志賀原発で実は被害があったことを知り、恐ろしさを感じた。志賀原発から志賀町役場までの距離は約10kmと近い。災害などの緊急時に状況を正確に把握することができないような施設は、やはり非常に危険なものではないだろうか。

能登半島を北上するにつれ、道路に亀裂や陥没、段差が増えてきた。土砂崩れはまだ何の処置もされていず、

余震もある中、車は自主的に気をつけながら走っていた。この時点で西海岸側を走る車は非常に少なく、交通渋滞は全くなかった。日本海の景色



古民家が多く、国の重要伝統的建造物群保存地区である黒島では、国の重要文化財の旧角海家の家屋も倒壊していた。1月3日撮影

はとても美しく、沿岸沿いにある観光スポットの標識をいくつも通り過ぎる度に、1日で変わってしまった現実には悲しさを感じた。

やがて、道

路沿いの家屋が多く倒壊している地域が目に入ってきた。黒い瓦屋根の古民家が並ぶ輪島市黒島地区だ。付近を歩くと、地面のアスファルトが割れて盛り上がり、古い木造の家があちこちで倒壊、瓦屋根やむき出しの木材が足元に散乱する状態だった。小雨で濡れているせいか、ヒノキのような木材の匂いがあたり一帯に立ち込めていた。観光名所だった国の重要文化財の家屋も完全に崩壊していた。住民は近くの公民館に避難していて、人気がなくシーンとした集落を歩きながら、ああ、やっぱり被害は甚大なのだと、初めてひしひしと実感した。また、この付近の海岸が地震で隆起したことを後で知り、撮影した写真の背景に偶然写っていた海岸の幅がたしかに異様に広がっていることに気がついた。

## ■現地の姿と生の声をオンタイムで伝える

イギリスのテレビ局は24時間放映のニュース専門チャンネルだ。今回、生中継も含め、一日に何度も現地からのビデオレポートを撮影し、編集もしてイギリスに送り、その日のうちに放映された。速報性のある番組ということもあり、基本的に私たちは、現地の人の生の声を伝えることを重視した。私がふだんの仕事で撮影する写真は、ニュース報道というよりも、土地の文化やそこに暮らす人々などだが、取材旅で出会う人にその場で声をかけて撮影させてもらうことも大変多く、今回の取材のスタイルに役立った気がする。

輪島市の中心部まで約10kmの地点に着いた時、その先の道が寸断されて進むことができなかった。能登北部ではあちこちの道で同様の状況になっていた。路肩に車を止めると、小雨の中、髪の毛がびしょり濡れた男性が歩いていた。声をかけると、通行止めの道の先にある縄又町から、5時間歩いてきたという。スニーカーは泥だらけだった。どこまで歩くつもりなのかと心配になったが、迎えに来たというご家族の車が近くに停



輪島市内には倒壊した家屋が多く、消防隊のレスキューチームが1軒ずつ回って生存者を探していた。1月4日撮影



まっぴいて安心した。

彼はテレビ局のインタビュー撮影を快諾してくれ、レポーターが握手をする時、「ああ、手が温かい!」と大きなため息のような声を上げた。



火災で全焼した輪島市河井町の朝市地区には民家もあり、地震で家に閉じ込められたまま火災で亡くなった人もいた。1月4日撮影

そして、お正月で祖母の家に行った時に地震が起き、付近の家が壊れ、電気もガスも水道も全部止まり、道路が寸断されたので、歩くしかなかったという経験を、少し感情的になりながら話してくれた。その映像をすぐにイギリスに送ると、数時間以内にテレビ番組とYouTubeの公式チャンネルなどで放映された。リアルな声から地震の状況が伝わったようで、海外の視聴者から「彼が5時間歩いたとはかわいそうに」「どんな支援ができるだろう」などのコメントがたくさんついた。

ある場所では、何十台もの車両で愛知県からレスキューの応援に来ていた消防隊を取材した。広報担当者によると、今まで東日本大震災や熊本など、数々の被災地に行ったが、こんなに多くの民家が倒壊したのを見るのは初めてで、これまでで最も悲惨な状況だと感じるとのことだった。実際、今回、亡くなった方の多くは圧死だ。

三重県、奈良県などからの消防隊も見かけ、迅速さに頼もしさを感じた一方、被害の範囲が広く分散しているため難しさも感じた。レポーターは、そこでのインタビューとともに、倒壊家屋の下敷きになった人々を救えるかどうか、一般的に生存のタイムリミットである72時間が迫っている、という現地レポートを送った。この日、自衛隊の車両も何度か見かけたが、給水車だった記憶がある。最初から自衛隊の大量のレスキュー応援があれば、もっと多くの命を救えた気もするがどうなのだろう。日本のニュースをチェックする時間がなかったが、その点について報道されていたのだろうか。

## ■被災者に寄り添う姿勢を大切に

翌日は、金沢から七尾、穴水を通して内陸から輪島市を目指し、かなりの渋滞を乗り越えることになった。ただ、当時、勝手に行くボランティアが渋滞を作るなどとX(旧ツイッター)で広まったが、警察が臨時に二方向道路を一方通行にするなどして、片方の車線が緊急車両用に確保されていたので、消防隊や自衛隊などはすいすい通っていた。SNS情報の無責任さ、広まると正すすべがない性質をつくづく実感した。

輪島市の中心部は、道路の両側の民家が倒れたり傾き、ビルや信号機が倒れていたりと、被害の深刻さが激しかった。観光地として有名な輪島朝市は火災で広範囲が全焼した後で、瓦礫から煙がまだくすぶっていた。そしてネットの電波も入らない状態だった。

ここには複数のメディアクルーが来ていた。日本のテレビ局は白いヘルメットを被り、腕に会社名の腕章をつけ、大型ビデオカメラを抱えているのですぐにわかる。きっと会社のルールだろうが、今、ヘルメットが必要な状況だろうか？また、自分が被災者だったらどう感じるだろう？そんなことを思った。

一方、こちらのビデオグラファーは、多くの機材と共に来日したけれど、外を歩いて撮影する時はLumixのミラーレス一眼のカメラを持ち、とても身軽だ。レポーターはアウトドア用の服装で化粧っ気もほとんどなく、しかも妊娠7か月のお腹を抱えて歩き回っていた。チームで共有していた感覚は、その場を歩いて何かを感じ取り、発見し、現地の人の話をまず聞き、声を伝えるという使命感だ。

輪島朝市地区内の自宅が全焼し、避難所から初めて自宅跡を見に来たという高齢の女性に会い、インタビューさせてもらった。家を失った大変な経験を話してくれる人に、こちらは何ができるのだろうか。避難所では食料がまだ十分に届かないとのことなので、急いで車から食べ物と水を取ってきて彼女に渡し、その小さな身体を思わずハグした。彼女は大きな笑顔で、このことを忘れないわと言ってくれたが、そのくらいしかできない無力感を感じた。それでも大切なのはきっと、その人の気持ちにできるだけ寄り添うことだろう。そして、世界に伝えること。そんなことを考え続けた。

今回、現地で会った人々は、みな心よくインタビューを受けてくれた。生の声を聞かせてほしいという姿勢に対し、聞いてほしい、伝えたいという心理もあるのかもしれない。取材は順調に行き、能登から何本もビデオを送って番組で放映された。レポーターによるとイギリスで評価が高かったようだ。こういう時はやはり写真に比べ、人が話す姿が映るビデオはパワーがあるのだろう。テレビ取材の仕事をサポートしながら、記録としての写真とビデオの役割の違いを考える数日間でもあった。テレビクルーは帰国し、1月5日に私も東京に戻ってきた。輪島市の知り合いの無事を確認することができたが、彼の家は破壊されてもう住めない状態だ。能登半島では珠洲市なども被害が大きく、被災者の人々は、1か月以上経つ現在も不自由な思いをしている。今後、復興の作業が始まり、様々なメディアや人が取材を続けていくことだろうが、全ての活動が被災地の人々のためになることを祈っている。(2024年2月10日記)

### 石井真弓(いしい・まゆみ)

一般企業勤務を経て、アメリカで写真を学ぶ。帰国後は新聞社などに勤務後、フリーの写真家として活動を開始。世界の多様性に美と重要性を感じ、極地への旅から、船旅、宗教美術、世を超える手仕事、中国陶磁の世界、ミャンマーの生活文化、ポートレートなど幅広く撮影。執筆も多数。そのかたわら海外テレビ局のコーディネイト、通訳をしている。ウェブサイト: mayumiishii.com



東日本大震災から13年、能登半島地震でも活動が期待される

## 写真救済活動を続ける「三陸アーカイブ減災センター」

柴田 誠(JPS 会員)

東日本大震災の津波被害を契機に写真の洗浄や「思い出の品」の回収・保管・返却など、「全国各地で災害時に保管されている思い出の写真・物品が希望する全ての人(将来を含む)に返却される社会の実現」を目指して、活動を続けている「(非営利型)一般社団法人三陸アーカイブ減災センター」。最近では、地震や台風、津波などの自然災害に見舞われた全国各地の被災地で「思い出の品」を救済するサポートも行っている。代表理事の秋山真理さんにこれまでの活動とこれからについてお話を伺った。

### ■被災者やご遺族の強い思いを受け、危機を乗り越えながら活動を継続

——「三陸アーカイブ減災センター」は、どういった経緯で設立されたのでしょうか

**秋山:** 東日本大震災(2011年3月11日)後のGWから、防災科学技術研究所の行政ボランティアとして被災地に入り、後に現地スタッフとして沿岸被災地の支援をしていたところ、釜石市の職員から復興には時間がかかる、会社を作って取り組んでもらえないかという要望が寄せられ、2013年に設立しました。私個人と「陸前高田市 思い出の品(震災拾得物返還促進事業)」の関わりは、2011年のGWに開催された返却会におけるボランティアから始まり、同年8月から事業全体の代表として陸前高田市と市社会福祉協議会への支援活動を開始しました。

——2017年の「終了」宣言の経緯はどんなことでしたか?

**秋山:** 2016年度で国の「震災等緊急雇用対応事業」が終わり、復興庁の「被災者支援総合交付金」に切り替えましたが残念ながら採択されなかったことから、市単独の予算で2017年4月～11月「陸前高田市 思い出の品(写真と物品)」を返還する事業の「最後の年」として、また写真や物の行く末についても検討することなども求められました。「予算の範囲なら何をやってもよい」とのことで、震災後初めて東京や仙台等で出張返却会を開催しました。思い出の品の危機的状況を伝える報道のおかげで、思い出の品を「探したい」「取り戻したい」という被災者やご遺族の強い気持ちがあることがわかり、市の理解のもと、取り組みの継続が決まりました。

——予算が計上されたということですか?

**秋山:** いいえ、サポートは金銭面以外ということでしたので、一般から寄付を募るなど自主財源でつないできましたが、2018年度に入り、復興庁の「心の復興」事業に申請し採択



被災した写真の洗浄作業

されたことから、陸前高田市が補正予算で2018年9月に再開することになり、結果2020年度まで復興庁の予算で継続することができました。その後は、自主財源で活動を軌道に乗せる努力を続けているところです。

——2017年度の返却会はどうな様子だったのでしょうか?

**秋山:** 陸前高田から離れて遠方避難している方やご家族とご遺族にとって、思い出の品の返却活動を「知る」機会がなく、またご遺体が見つからない、実家が全て流されて何か一つでも見つけたい、と話されるご家族のほか、お母様の写真を探すために7万枚以上の写真全てに目を通そうと何度も通われる方もいて、写真がいかにご自身やご遺族にとって大切にかけがえないものであるかがとてもよくわかりました。その一方で、「終わってしまうと聞いて後悔しないようにと来たが、本当はまだ受け取りたくなかった」「まだ見るのは辛い」と話されるご家族も多く、思い出の品を「早く返却する大切さ」とともに、「長期的に取り組む必要性」も同時に実感することになりました。

——「三陸アーカイブ減災センター」にはどのくらいの写真が保管されているのでしょうか?

**秋山:** プリクラを含めて約7万4千点の写真があります。全てデジタル化を済ませています。最近では、対面の返却会に加えて、遠方からでも探せるように、ご支援いただく企業・個人を募りながら、オンラインで閲覧できる取り組みも進めています。

——被災された人にとって、写真はどんな意味、価値をもつのでしょうか?

**秋山:** 津波で家族や親戚等身近な大切な人が亡くなり、また家も土台だけを残して全て無くした状況で、失った「何か」を取り戻すことは心の回復にとっても重要です。ほっかりあいた心の隙き間、喪失感を埋め、前を向く力となっていて、記憶を思い起こすトリガーにもなっています。写真は一度失うと二度と同じ写真が手に入らない「家族の大切な宝物」で「生きてきた証」にもなっています。



三陸アーカイブ減災センター代表理事の秋山真理氏



## ■想像以上に難しい全国の災害時の思い出の品の取り扱いと被災した写真の救済

—— 全国の災害における思い出の品の状況はどうなっていますか？

**秋山：**災害が起きると、被災自治体は、通常業務に加えて応急対応に追われ、職員は不眠不休の状態に追い



最初の返却会(2011年)の様子

込まれることがしばしばです。思い出の品の大切さを知る自治体職員が、持ち主に返す努力をしてくださるケースもありますが、平時から災害廃棄物処理計画等に思い出の品の位置づけや具体的な「取扱方法」の記載がない場合、担当部署も定まらないまま災害廃棄物(がれき)に混じって処分されてしまうこともしばしばです。また、泥出しの際に土砂災害や水害で水や泥にまみれたアルバムも、救済できることを知らずに捨ててしまい「とても後悔している」という声も数多く届いています。

—— どんな写真でも救済可能なのでしょうか？

**秋山：**水に濡れたり泥だらけになった写真は、できるだけ早く「乾燥」あるいは「冷凍」することが重要です。そうしておけば、生活が落ち着いてからゆっくり洗浄等の処置をすることが可能です。

—— 最近では、写真の救済を行う団体も増えているようですが。

**秋山：**これまでも災害のたびに、写真館や企業、ボランティア等が写真の洗浄等に取り組んできました。継続して活動している団体も増えてきており大変心強く思っています。ただその一方で、災害さえなければ、家族の大切な写真は他者の目に触れることはありません。個人情報取り扱い方等を含め、被災者、ご遺族の視点に立ったガイドラインを新たに作成する必要性も感じています。海外における活動例では、2023年1月のNew Zealandの豪雨災害において、富士フィルム株式会社 New Zealand、Australiaが被災した写真の洗浄等に率先して取り組みました。弊センターは、同社の要請・協力のもと「水に濡れた写真の応急処置」の英語版フライヤーと動画を作成、提供しました。現在ボランティアの協力も得て、フライヤーの多言語化も進めています。

## ■ノウハウを活かして被災した各地の写真の救済活動をサポート

—— 東日本大震災以外では、こういった活動をされているのでしょうか？

**秋山：**全国で起きた災害で被災した自治体のサポートのほ

か、写真の回収・洗浄等の活動をする個人・団体等に洗浄方法を伝えるとともに、状況にあわせて立ち上げのサポートや地域との調整等も行っています。また一部自治体に対しては、これまで培ってきた経験、ノウハウを伝え、ニーズにあわせてマニュアル等も提供してきました。

—— 能登半島地震でも協力されているのでしょうか？

**秋山：**はい、すでに地元の方で写真洗浄の拠点を立ち上げたいとご相談が寄せられています。気温が低い時期は写真の傷みは進みませんが、暖かくなると銀塩写真の表面を覆うゼラチンが緩みカビが発生するなど、画像が失われる速度が加速します。奥能登は今後高温多湿で十分な乾燥ができない可能性も出てきたため、その対応も検討中で、今後広く現地協力者、ボランティアのほか支援金等も募っていくことにしています。

—— 今後はどんな活動を予定されているのでしょうか？

**秋山：**自治体が実施する「思い出の品」の返却は、災害廃棄物処理終了後、どこかで「期限」を区切り廃棄等を検討することが必然です。一方、被災者やご遺族から「長期的に続けて欲しい」という声は後を絶ちません。万一現物写真が廃棄されることになったとしても、セーフティネットとしてデータを預かり、オンラインで全国どこからでも被災者等が閲覧できる仕組みがあれば、自治体の負担も減り、被災者等も安心できます。例えば東日本大震災における被災3県で自治体が保管する写真は少なくとも130万枚あります。費用面等の課題がありますがAI



三陸アーカイブ減災センターに保存されている「思い出の品」

による顔認証も活用できたら、こうした写真を探す被災者の負担をより抑えることもできます。また、特に広域災害では、市町村域、都道府県域も超えて写真等が流れ着くことから、東海・東南海・南海地震による巨大津波等にも対応できるよう、全国で仕組みを整える必要があり、ノウハウやマニュアル等も提供したいと考えています。写真の大切さと共に「水や泥にまみれた写真は救える」ことを広く伝え、災害時の写真等を1枚でも多く希望する人の手元に残す、戻すことができる仕組みづくりに、ぜひお力添えください。

(画像提供：三陸アーカイブ減災センター)



写真救済のチラシ

※三陸アーカイブ減災センター：<https://sanriku-archive.org/>

## フィルムカメラの復活を支える若者たち

鳥原 学 (写真評論家)

Toriyama Manabu

## ●写真学生に写真の「ワクワク感」を教えられる

筆者が専門学校や大学で教壇に立つようになってすでに20年ほどになる。振り返ってみるとこの間に学生の使っているカメラもずいぶん変わった。時代の流れに沿って、フィルムカメラからデジタルカメラに、一眼レフからミラーレスへと移行してきたのは当然だが、ここ数年はフィルムカメラを持っている学生がかなり目立つようになった。暗室作業が必修授業から外れてすでに久しいので、それらはたいていプライベートな記録や作品制作のために使われている。

その愛機もバラエティーがあって、見ているだけでも面白い。1万円程度で買える1980年代のコンパクトカメラから、ライカなどのクラシックカメラ、あるいはペンタックス67などの中判カメラまで様々だ。

これらカメラよりも、フィルムや現像代にかかるコストの方が負担は大きい。いまや36枚撮りのネガカラーフィルム1本が1,500円以上で、現像代は900円以上もする。スマホに転送するサービスを加えると、さらに1,000円ほどもかかる。だから簡単にシャッターを切っているわけではなく、「本当に大切なときに、思いを込めて撮っています」と口をそろえる。

さらに話を聞いてみるとフィルムカメラ特有の手間が、撮影行為に強い実感を与えているようだ。フィルムを装填したり巻き上げたりする、あの物理的な動作が“写真を撮っている”という実感をもたらしてくれる。また露出やピントに失敗するかもしれないという危うさ、思わぬものが写り込んでしまうという偶然

性、そうした結果が現像するまで分からないのが良いと言う。子どもの頃からスマホで写真を撮っていた、Z世代と呼ばれる完全なデジタルネイティブにとって、それは新鮮な写真体験なのだ。

そういえば、こんなことがあった。ある日、一人の学生が「チェキ」を手にしていて、よく見るとそれは初期型で、わざわざ中古カメラ店を探し回って買ったもの。そこで「写せば撮影できるだけの旧型より、撮影データも保存できる現行機の方が使いやすいんじゃないか」と尋ねてみると、「それだとワクワク感がないですよ!」と返されてしまった。そのとき私はハッとした。まったく虚を突かれた感じがしたのだ。

## ●写真表現にみる呪術性の復活

考えてみれば、写真メディアの技術的進化を促してきたのは、誰もが失敗もなくキレイな写真が撮れ、それをさらに完璧な画像へとブラッシュアップできるメカニズムへの欲求だった。2020年代の現時点で、その技術はすでに到達点に達しているといえるかもしれない。デジタル技術の急速な進化によってカメラという装置は完成したうえで、新たにAIとの連携を模索しながらさらなる進化を続けている。

ただし、このきわめて合目的で近代的といえる進化の歴史から見落とされてきたものがある。写真学生たちがフィルムカメラに求めた、身体的な実感や偶然性というものだ。つまり撮影から画像を確認するまでのタイムラグや、技術的な失敗や性能の限界からくる画像の不鮮明さなどで、考えてみるとそれらが写真文化の形成に果たしてきた役割も大きい。

例えば私たちは奇妙に光が写り込んでしまった画像を、出来事の前兆や亡くなった人の魂の顕現として解釈することがある。ゴーストやハレーションといった光学的な現象だと分かっている、なにか特別な意味を汲んでしまおうとする。写真に呪術的な意味を見いだそうとする志向も、写真という文化を重層的なものとしてきた大切な要素なのだ。

そのような志向は、横田大輔、小松浩子、多和田有希、小林健太など30～40歳代前半の写真作家の作品にも目立っている。彼らの作品はデジタルカメラや画



学生所有フィルムカメラの数々



撮影：鳥原 学



像ソフトのバグとエラーに注目したり、アナログ写真の物質性を様々な形で強調したりするものである。制作プロセスのなかで起きる「創造的アクシデント」をコンセプトとすることで、写真というメディアの一貫性やアイデンティティーというものを再考することを促そうとしているのだろう。

ただ、それらは一見すると何が写っているかの判別もつきにくい。従来の写真の美的な規範から逸脱しているため、難解に思えることも少なくない。表面的なイメージに目が向けられることを積極的に避けようとしているように見えたりもする。カメラ任せにする方がきれいな写真が“撮れてしまう”ことを疑問に思い、その自律的なメカニズムの間隙をつくことで、人間が写真に関わることを取り戻そうとしているのではないかと思う。

もしそうであるなら、それはやはり呪術的な性質をもう一度、獲得したいという願望の表れなのである。写真の不自由さから生まれる「ワクワク」する方法を見つけ、それを私たち鑑賞者に思い出すように促しているのだ。

その作家たちよりさらに若いZ世代の写真学生たちには、そもそもその思い出自体が欠けている。そのため一層強くフィルム写真に魅入られることになる。それはもちろん、日本だけではなく世界的な傾向であり、彼らの関心の高まりが、いまフィルム写真を復活させつつある。海外の写真関連のサイトをチェックすると、2、3年前からフィルム需要の回復というニュースがずいぶん目立ってきているのである。

## ●フィルム写真ブームは加速するか

世界的なフィルムカメラ人気の象徴的な出来事は、2022年に発表されたライカM6の復刻だろう。じっさい、その売り上げはライツ社の予想を超えたものとなっている。

アメリカの写真専門サイト「Digital Camera World」の1月7日付けの記事「フィルムカメラの販売台数がわずか8年で900%増加！」によれば、M6の発売を機に2023年のライツ社のフィルムカメラの販売台数は年間5,000台に達したとある。それは2015年から比較すると約10倍の増加であり、デジタルMマウントボディの約11,000台と比べるとその多さが分かる。この記事では、同社の経営幹部は「アナログ回帰」の傾向が鮮明になったことを示していると語っている。

このアナログ回帰を加速したのがコロナによるパンデミックだといわれている。家で孤独に過ごす時間が長くなり、そのなかでスローなフィルムカメラの楽しさが再発見されることとなった。それを証明するのは世界最大手のネット通販のeBayで、「ニューヨークタイムズ」の記事によれば、2021年までのコロナ禍の2年間でフィルムカメラの売上が、メーカーごとにそれぞれ42～79%の増加率を記録したとのことだ。

すでにフィルムカメラの売り上げ増加に対して、写真フィルムの供給が追いつかないという事態が起きている。写真フィルムについて検索して見ると、各地のローカルなニュースサイトでカメラ店が困っているという記事を散見できるはずだ。いずれも商品を棚に並べるやいなや、新しく写真を始めた若者たちに買われるので、仕入れに苦労しているというレポートである。

コダック社はこうした声に積極的に対応している。2022年12月に同社は写真フィルムのための技術者や従業員を募集すると発表して注目されたが、じつはそれ以前の3年間ですでに100人単位で人員を増やしていた。こうした同社の製造能力の拡大は、最近になって明確な成果を見せている。

昨年11月に中判フィルムを値下げしたのに続き、今年1月下旬に、主力のモノクロフィルムであるトライXの価格を最大30%引き下げると発表したのだ。円安に悩む日本のユーザーにとってもこれはかなりのメリットがある。何より、写真学生たちにとっては朗報に違いない。

もちろんこうした復活の動きは、フィルム全盛期と比較すれば小さな現象に過ぎない。いったん最低にまで縮小したマーケットで起きた反動と見ることもできるだろう。実際ニッチ化したフィルム写真を支え、若者たちにその楽しさを示してきたのは、1994年にトイカメラから出発したオーストリアのロモグラフィーを始めとする比較的小規模な企業だった。そのロモグラフィーもフィルム製造を手掛け、そのラインアップを充実させてきている。今年はこうした小メーカーの新製品にも注目したいところだ。

海外を含めたフィルムカメラをめぐる動きのなかで、2023年5月に発表されたリコーイメージングによる「PENTAX」ブランドでの新フィルムカメラプロジェクトはかなり注目されている。これを書いている時点では「手巻き式」の試作機がされている、というくらいしか私は知らないのだが、文字通りワクワクしながらその登場を心待ちにしている。そして、いまの若い世代がフィルム写真に見いだした希望を、どうすれば守っていけるかを考えたいと思っている。



PENTAXの「フィルムカメラプロジェクト」に期待 撮影：山縣 勉

# あなた 著作者を殺すのは誰か！ — “著作者人格権” 軽視の重い影 —

棚井文雄 (写真家 / 一般社団法人 日本写真著作権協会 常務理事)

誰もが写真をインターネット上で発信できる時代になって、「著作者人格権」が大変なことになっています。「著作者人格権」とは著作者である写真家の人格を守る権利ですが、プロ写真家の契約からアマチュアのフォトコンテスト規約にまで「著作者人格権不行使特約」が広まりつつあります。この問題の解決には、写真家も自覚が必要です。(一社) 日本写真著作権協会常務理事の棚井文雄氏に現状を解説していただきます。(著作権委員会)

## ■写真家にとっての「作品」とは

私にとって、大学在学中より師事していた大倉舜二との3年間は、「写真家にとっての“作品”とは何か」「写真家とは“何者”なのか」を自身に問い続けた日々であったと言っても過言ではない。当時の大倉は、ファッション写真と料理写真の双方でその名を馳せる特異な存在だったが、商業目的ではない、私が考える本当の意味での写真家(写真作家)の取り組みを実践していた。それを私はすぐ側で見ていたのだ。無論、その後もその問いは続き、ロンドンやニューヨークにおいて世界の写真家の「作品」と彼らの生き様を目の当たりにして、一定の答えを見つけたと思っている。

だからなのだろうか、私にとって作品(著作物)とは、財産的な価値というよりも、まずは人格的な品位や品性、写真家とその作品との関係性へと意識が及ぶ。

私がロンドンへ活動拠点を移すちょうど1年前、田沼武能(日本写真著作権協会[以後JPCA]前会長)と瀬尾太一(同前常務理事)から呼び出しを受け、協会運営を手伝って欲しいとの話を受けた(『日本写真家協会会報』No.178「田沼武能氏を偲ぶ」P22参照)。実際にJPCAの運営に関わるのはそれから10年が経過してからののだが、このところ現代の写真家とその作品との関係性は、著作権、なかでも「著作者人格権」の捉え方に大きく影響を及ぼしているように感じている。

もっとも、私の「作品」創作の追求を、「著作者人格権」と結びつけて考える日が訪れようとは想像し得なかったが。

## ■写真家の「作品」と「権利」

私が写真家を目指したのは中学1年の春だったが、その頃、プロと呼ばれる写真家が写真雑誌や写真展で発表する写真の数々は、プロを目指す、あるいは熱心な愛好家が目標とする(撮りたいと思う)写真であったように記憶している。それらは、私の考える真の意味での「作品」だった。いま思えば、それが成立していた、そんな編集者がいた時代であった、ということなのかも知れない。

ある時、田沼氏から複数の写真家の作品が時代ごとにまとめられた1冊の写真集について、「あなたはと思うか?」と意見を求められたことがあった。私は、

ある時代を境に、突然、写真家たちの「作品」が変化しているのではないかと答えた。田沼氏は一瞬ニヤリとした後、「いまの奴らは、仕事の写真しか撮らねえんだよ、撮れねえんだよ」と現代の写真家たちへの嘆きを口にした。その嘆きは、写真家に留まらず、その周辺の人々についても及んだ。そして、そのような日本写真界のあり様は、写真家の作品のみならず、権利に対する意識にも大きな影を落としているのだろう。

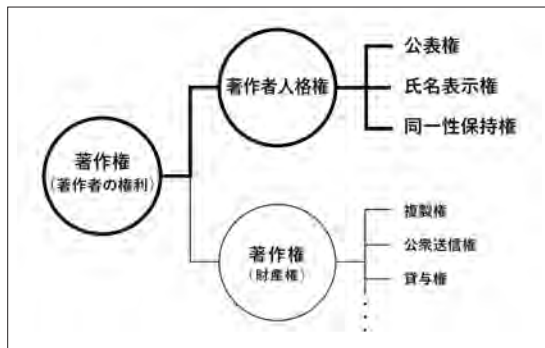
その影の一つが「著作者人格権」の軽視だ。

## ■「著作者人格権」とは

著作権法では、公表権、氏名表示権、同一性保持権の3つが「著作者人格権」として定められている。著作物には、土地など不動産のような財産的な権利がある一方で、人格に対する権利も有している。著作物とは、人格の発露というべき創作物であり、その作者(写真家)に与えられるのが「著作者人格権」であるのだ。この権利は、財産とは異なり譲渡や相続、そして、行使の放棄をすることもできない。そのくらい強い権利とも言える。しかし、この強い権利が軽視されている。その事例を次に挙げよう。

### 事例① フォトコンテスト応募作品の無断利用

近年、フォトコンテストの応募要項に「著作権は撮影者に帰属」とする一方で、「著作者人格権を行使しない」「著作者人格権に基づく権利の主張を一切行わない」といった表記が多数見受けられるようになってきた。しかし、注意してみると、これはコンテストの応募要項だけでなく、さまざまな利用規約、契約書にも及んでいることが分かる。



また、昨年ある鉄道会社のカレンダーフォトコンテストへ応募した作品が、応募者に無断で、撮影者の氏名の記載もなく、鉄道会社ではない他の会社のイベント告知に利用されていることが分かった。それどころか、写真の提供者として鉄道会社名が表記され、さらには、その作品を誰もが自由にダウンロード出来るような状態にされていた。

このコンテストの応募要項にも「応募者は、上記使用に対し著作権者の人格権を行使しないこと」といった条項が記載されている。今回のケースにおける侵害行為は、複製権、氏名表示権、公衆送信権など多岐にわたるが、そもそも、主催者の著作物（応募作品）に対する敬意のなさ、撮影者の人格（権）への配慮に欠ける行為であると言えるだろう。

私は、この応募者が自身の作品を無断で利用されたことについて、いったいどんな気持ちでいるのか、本人の言葉を聞きたいと思い連絡を取った。そして、JPCAの取材に対してこう語った。「純粋な気持ちが弄ばれた」と。

#### 事例② 弁護士が「著作権者人格権不行使特約」を推奨？

2021年、著作権制度の普及活動および調査研究などを行っている団体が発行する機関誌に、文化庁著作権課への出向経験がある弁護士による「著作権者人格権不行使特約」を推奨するかのよう記事が掲載された。

それは、「著作権者人格権不行使特約」は多くの場面で有効であり、権利の行使を受けることはないと考えられるので、著作物を利用する側は、契約の際に「著作権者人格権不行使特約」を付加しましょうというような、著作者にとって不利益な、著作者の権利を軽視した内容であった。

この記事に対し、JPCAが理事団体を務める「日本著作者団体協議会」は、機関誌の発行元である団体との話し合いの場を持ったのだが、「著作権者人格権不行使特約」についての見解は平行線であった。

その後も、この記事に対する協議会の意見記事を掲載して欲しいと依頼を続け、昨年末にも代表者による面談を行ったが、「著作権者人格権不行使特約」そのものを否定する立場の意見は掲載できないとし、未だ実現には至っていない。日本著作者団体協議会としては、「不行使特約」の存在を認めることは出来ず、今後もこの団体への抗議を続けていくとして協議会内での認識を共にしている。

### ■写真家、写真界の現状

フォトコンテストの応募要項と著作権関連機関誌の記事の例によって、「著作権者人格権」が軽視されている現状を記したが、我々、写真家、写真界の現状、対応を確認しておく必要もあるだろう。予てよりJPCAは、JPSを含む当会会員団体と協力し、応募要項に「著作権譲渡」「著作権者人格権不行使」の記載を含むフォトコンテストの主催者に対し、面談や書面による改訂のお願いを行っている。それにより、応募者（写真家・写真愛好家）に対する配慮、著作権への理解が不足していたとして改めてくれる主催者も多く、一定の成果が上がっている。

一方で、写真雑誌などに登場している写真家が、著作者の権利を軽視していると思われるフォトコンテストの審査に関わっていることも事実であり、これは数年前より写真家の権利を危惧する弁護士によっても指摘されている。

また、近年「著作権者人格権不行使特約」を掲げフォトコンテストの実質的な運営を請け負う団体と共に、コンテストを開催する自治体や大手企業が増えているようだ。

さらに、その運営団体の関係者をイベントにゲスト出演させている写真団体もあり、「それは『著作権者人格権不行使特約』を容認していることと同じではないか」と指摘する複数の声がJPCAにも届いている。

田沼氏、瀬尾氏が人生をかけて訴え続けてきた写真家の権利への意識が、今後の写真界をリードしていくと思われる関係者や写真家たちに受け継がれていないこの状況に、2人の悲痛な叫びが聞こえてくる。

### ■権利者団体との協力—問題解決のために—

昨年、「日本著作者団体協議会」のメンバーでもある（公社）日本グラフィックデザイン協会（以後JAGDA）が主催する知財権セミナーにおいて、写真家として写真を「使ってもらう」ことをテーマに著作権の話を見せていただいた。その際、JAGDA運営委員でデザイナーの味岡伸太郎氏に、私の作品を取って著作権者人格権を軽視した利用によるポスター2点を創作いただき、それを放映しながら「著作権者人格権不行使特約」とは何なのか、不行使に同意してしまうとどんなことが起きる可能性があるのかを解説した。

このセミナーを通じて改めて感じたことは、他のジャンルのクリエイターやアーティストの仕事や作品制作の相互理解と、著作権啓発活動における協力関係の必要性だ。

「著作権者人格権不行使特約」も、昨今話題の生成AIに関する著作権法改正も、著作者とその著作物に対する敬意の欠如そのものであろう。そして、これは写真界だけの問題ではなく、ジャンルを越えた協力が必要であると共に、著作者の立場からしっかりと主張をしていくことが重要だ。著作者の言葉がいかに大切であるかということは、瀬尾太一が常々語っていたことであつたし、田沼武能の遺言の一つとして私の脳裏に焼き付いている。



photo : Kohryu Matsuo / HJPI320610001191

#### 棚井文雄(たない・ふみお)

大倉舜二に師事。「家庭画報」「Wedge」（新幹線グリーン車搭載誌）の連載や「別冊太陽」などの仕事と並行し、中国、欧州での撮影を重ね、パリ、NYで個展開催。文化庁芸術インターンシップ研修員を経て、2005年に渡英。その後、NYを拠点に10年間活動。ストリートスナップを中心に作品制作を行い、フランス国立図書館、ニューヨーク近代美術館などに作品収蔵。日本大学芸術学部非常勤講師／文化庁文化審議会著作権分科会委員



## 第49回「日本写真家協会賞」贈呈式

受賞者：株式会社ワン・パブリッシング『CAPA』

## 第18回「名取洋之助写真賞」授賞式

受賞者：中条 望「GENEVA CAMP-取り残されたビハール人-」

齊藤小弥太（奨励賞）「土地の記憶」

小山幸佑（奨励賞）「私たちが正しい場所に、花は咲かない」

## 第6回「笹本恒子写真賞」授賞式

受賞者：高橋宣之

2023年12月13日（水） 於：アルカディア市ヶ谷「富士の間」

年末恒例の「贈呈式・授賞式・会員相互祝賀会」を2023年12月13日にアルカディア市ヶ谷「富士の間」で開催した。

定刻16時半に司会の木谷有里さんによる進行で始まった。始めに熊切大輔会長から「5月に会長に就任しましたが、改革などが山積みで非常に長い半年でした。私を含め理事がリフレッシュし、コロナで絆が薄れた会員・賛助会員・アマチュアの間を『つながるJPS』のアジェンダで理事や会員と共に行っていました。本日は各賞の式典と祝賀会で皆様方の交流を深めていただきたいと思います」と挨拶があった。

続いて来賓を代表して文化庁参事官付文化戦略官・芸術文化支援室長の林保太氏より「各賞を受賞された皆様おめでとうございます。ますますのご活躍をご期待申し上げます。JPS展はじめ、歴史的・文化的価値の高いフィルム写真の収集保存、表現・技術の調査研究、国際交流、人材育成などが国の写真文化の発展に努められ、関係者皆様に敬意を表します。文化庁におきましても写真文化関係資料のアーカイブ構築に取り組むなど、我が国の多様な文化の保存継承を図っておりますが、本日お集りの皆様にも写真を通じたそれら発展のためお力添えをお願い申し上げます」と祝辞をいただいた。

### 「日本写真家協会賞」贈呈式

2023年第49回「日本写真家協会賞」は、株式会社ワン・パブリッシング『CAPA』に贈呈した。贈呈理由は「月刊誌『CAPA』は1981年9月の創刊より数えて通算500号を超える、わが国有数のカメラ&写真情報誌である。常に写真関連情報の先端をいき、若者

からベテラン写真愛好家まで幅広い読者を豊富な内容の記事で長きにわたり楽しませてきた。今後さらなる奮闘を願い、激励の意味も込めて」。受賞された株式会社ワン・パブリッシング代表取締役社長の廣瀬有二氏へ熊切会長より表彰状を、山口規子副会長より『CAPA』編集長の菅原隆治氏へ盾を贈呈した。続いて廣瀬氏より「1981年からスタートの『CAPA』は通算500号四十数年ですが、良く続けてこれたなと思います。事業を引き継ぎワン・パブリッシングとして約三年半となります。先程の会長の言葉での『時代をうまくつなぐ』ことが出来ました。カメラ系の雑誌では数少ない一つとなりましたが、長年、順調ではなく存続危機もありました。今では過去形で言えるようになり、現在は部数アップに至っております。しっかり固定読者がいらっしやることに加え、広告系がここ一年程急激に復活しています。コロナ明けや景気もあります。プロのコンテンツに価値を見いだしてくれ



「日本写真家協会賞」贈呈式 記念撮影



熊切大輔会長の開会挨拶



文化庁の林保太氏の来賓挨拶



受賞者のワン・パブリッシング代表取締役社長廣瀬有二氏へ表彰状が贈られた



山口規子副会長より受賞者『CAPA』編集長の菅原隆治氏へ盾が贈られた





選考委員の専修大学教授・山田健太 「名取洋之助写真賞」受賞者・中条氏による講評



望氏の挨拶

るクライアントさんが増えています。写真家さん、デザイナーさん、編集者の方々が携わって評価される時代が戻ってきた状況です。読者、クライアントの皆様が満足いただけるよう励みます。厳しい状況を乗り切った『CAPA』編集の菅原を今後も皆様で支えてください」と受賞挨拶を述べ、壇上で記念撮影を行った。

### 「名取洋之助写真賞」授賞式

続いて「名取洋之助写真賞」授賞式を行った。新進写真家の発掘と活動を奨励することを目的に2005年に創設。現在は写真ジャーナリストの活躍が極めて激しいが、ドキュメンタリー写真は社会に欠かせない。この時代に新しい感性で表現に挑戦するフォトジャーナリストを40歳までの枠で公募し写真展を開催している。今年の「名取洋之助写真賞」は中条望氏の「GENEVA CAMP-取り残されたビハール人-」、同奨励賞は、齊藤小弥太氏の「土地の記憶」と、小山幸佑氏の「私たちが正しい場所に、花は咲かない」の2名に決定した。まず、選考委員の専修大学教授・山田健太氏、第1回名取賞受賞者・清水哲朗会員、熊切会長の3氏を紹介し、選考委員を代表して山田氏が講評を述べた。「中条さんはアジアを中心に難民をテーマに時には危険と隣り合わせで立派な写真をたくさん撮っています。最近の大きなテーマである難民を取り上げた作品で、バングラデシュで取り残されたビハール人のキャンプ生活を正面から捉えた過酷な現実にも力強く生きるさま、わずかな希望の光を感じさせる写真など30枚のなかで、強い社会的な関心、理解力、取材力、撮影者の立ち位置や着眼点、組写真としての構成力のいずれもが素晴らしかった。これらの写真に力を与える基本は2つの奨励賞にも共通しており、奨励賞の齊藤さんは成田空港の土地収用問題を追い、社会から忘れられた滑走路の増幅工事で生活が変わるさまを、モノクロプリントで静かに描写し好感が持てました。小山さんはイスラエル・パレスチナ問題を追い、ガザの戦闘で両者の憎しみが高まるなかで両者の壁を超えることに挑戦したユニークなプロジェクトを、平和への希望へとつなげていけると強く思っております。本来、奨励賞は1人ですが、まったく趣が違う手法、テーマ、強い熱意が伝わる2作品であったため今回は2人となりました。現在、ジャーナリズム、ドキュメンタリー写真、報道写真は大きな曲がり角にきており、



「名取洋之助写真賞」授賞式 記念撮影



「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞者・齊藤小弥太氏の挨拶



「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞者・小山幸佑氏の挨拶

事実を伝えることを社会は求めています。生成AIの技術進歩で写真概念が変わりオリジナルとは何か、写真を撮ることとはどういうことか問われています。現在、ニュースの問題として社会的な無関心、無接触など日本でニュースにつながっている人が2割におち込み、世界最悪の数字です。しかもアプリ経由の『ニュースまとめサイト』を見て満足している状況です。今回の応募者の35歳以下はわずか3人で、今後の社会状況が問題です。日本のジャーナリズムを再構築する必要があり、その核としてJPSになっていただきたい」

続いて熊切会長より「名取洋之助写真賞」の中条氏へ、同奨励賞の齊藤氏と小山氏へ、それぞれ表彰状と賞金を渡した。

中条氏からは「このたび名誉ある賞をいただき大変嬉しく思います。活動を続けるなかで目標としてきた賞で、これまで受賞された方々が撮影、活動されている姿に刺激を受けていました。この作品はバングラデシュの首都ダッカに存在する1972年から設立されて、今もそこに生活する人々の営みを描いたものです。バングラデシュ独立戦争の際にパキスタン軍へ協力を行った彼らは、多くの資産や権利を奪われ今に至ります。ビハール人の状況と尊厳を作品で発表でき、ようやく責任を果たせました。2012年に初めてキャンプを訪れてから今に至るまで、優しく受け入れてくれた彼らには感謝の気持ちしかありません。動物のようではなく人間のような暮らしがしたいと、彼らから何度も言われました。雨が降れば汚水にまみれ生活し、冬になればそこらじゅうでたき火で暖を取っている姿で、キャンプ住居であることで政府系銀行口座や



熊切会長より高橋宣之氏へ表彰状と賞金を「笹本恒子写真賞」受賞者の贈呈  
高橋宣之氏の挨拶

パスポートが持てない状況に追い込まれ、こうした暮らしは我々世代で終わせたいと言われました。厳しいなかにも、祈りの時間を知らせる美しい調べに接したり、足場の悪いなか手を取り合って歩いてあげる子どもたちや、私の熱中症時に看病してくれたり、私の訪問を歓迎してくれる姉妹もいました。彼らの力になりたいと思ひ10年活動してきました。彼らの尊厳をつかみ捉えて、そういった環境から救い上げられるような写真が、私にとってのいい写真だと思います。この受賞で終了ではなく、彼らが望む場所へたどり着けるまで撮影を続けます」と受賞の言葉を述べた。

続いて同奨励賞の齊藤氏からは「二十代から応募し落選するたびに多くの方からアドバイスをいただき、少しずつ良くなってきました。作品は成田空港に新滑走路建設で集団移転する集落を撮影しています。始めた頃はコロナ前でしたが農村や人々が美しく、数年後に無くなるのが信じられず写真家として何とか記録をしたいと思った次第です。現時点でも移転していない人は多く、集落や先祖に対する思いなどニュースとなりにくいものをまだ撮影できていないので、受賞を励みにこれからも続けます」と受賞の言葉を述べた。

同奨励賞の小山氏からは「2018年より制作しているイスラエル／パレスチナについてのプロジェクトで、イスラエルのユダヤ人地区とパレスチナのアラブ人地区の間には大きな壁があり、お互い顔も見えず交流もない状況です。私は日本人観光客のためお互いを行き来できます。お互いに壁の向こうに向けて手紙を書いてもらったのですが、いつか仲良くできることを願う内容もあれば、自己の土地であることを主張する内容もありました。彼らのポートレートと壁を撮り、元の手紙の複写と和訳を添えたものをセットとして作品となります。ニュースのように表面だけではなく、人々の暮らす内面を捉え家族や平和を愛す視点を忘れずに今後も伝えたいと思います」と受賞の挨拶を述べた。壇上で記念撮影を行い授賞式を終えた。

### 「笹本恒子写真賞」授賞式

「笹本恒子写真賞」は、わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する目的で2016年に創設。今年の受賞者は高橋宣之氏。選考は編集者の佐伯剛氏、野町和嘉前会長、熊切会長によ



「笹本恒子写真賞」授賞式 記念撮影

って行った。野町氏からは「今回19人の推薦があった。高橋さんはコロナ禍の2022年にキヤノンギャラリー品川で『神々の水系』の仁淀川水系を追った写真展を開催した。高橋さんも私も高知の出身。高橋さんはスペインに三年程留学し、帰国後は高知で集中、徹底して作品を創られています。高橋さんは数十年にわたって水系に関わり大作にまとめています。高知でも目撃されたという絶滅危惧種の日本カワソに例えて、人知れず土佐湾から仁淀川の源流まで右往左往しながら、人間の生きざまでも捉えていらっしゃるような思いです。今後もさらに仁淀川ブルーを捉えていただきたいです」と選考理由を述べた。続いて熊切会長より高橋氏へ表彰状と賞金を贈呈した。高橋氏からは「プロ写真家になって50年になります。長い間末席で生き延びてきました。最初の20年は海の写真を、あとの30年は仁淀川を撮ってまいりました。最近有名になったライトブルーの透明度が高い川です。海も川も水系で、いわば水商売をしてきたといえます。海では波形を撮りましたが、ある日、河口を見て川もよいのではと思ったのがきっかけです。普通、一つのエリアだけの撮影では飽きますが、日本最高峰透明度の仁淀川の美しい水を求めて、山をさかのぼれば美しい森に入り、不思議なものがたくさんあり、数か月に一度は心震わせます。いかに写真を撮ったかより、いかに不思議さに出会ったかが私の心の宝物です。一番大事なのは感動すること、森羅万象に出会う喜びがあって長くやってこられたと思います」と受賞の言葉を述べた。続いて記念撮影を行い、授賞式を終えた。



「笹本恒子写真賞」選考委員・野町和嘉前会長の講評

東京都知事・小池百合子氏からの祝電が披露され、最後に井田宗秀会員による恒例の集合記念写真の撮影を行い次の祝賀会へ移った。



## 2023 年度会員相互祝賀会

2023 年 12 月 13 日 (水) 於：アルカディア市ヶ谷「富士の間」

写真関係者が一堂にそろう「受賞・出版・写真展」などで活躍された会員を相互祝福

同会場にて会員相互祝賀会が始まった。始めに山口副会長から「今年は生成 AI や性的姿勢等撮影罪など写真界に影響を及ぼす事柄が登場しました。写真にどう向き合うべきか、原点を見つめ直す岐路にきています。当協会の設立が 1950 年で、1968 年にこの写真の忘年会が始まり、1971 年に会員相互祝賀会へととなりました。今回は 330 人超の出席です。今年の活躍を褒めたたえましょう」と挨拶があった。続いて来賓を代表して東京工芸大学学長の吉野弘章氏より「各賞受賞の皆様おめでとうございます。今年は本学が創立 100 周年となり、東京都写真美術館で記念写真展『写真から 100 年』を開催しました。本学は日本最初の写真専門の高等教育機関で、振り返ると JPS と深い関わりがあり、卒業生の渡辺義雄元会長は 23 年間、田沼武能元会長は 20 年間、現在は熊切大輔会長が、JPS73 年の半分以上を本校卒業生が会長をされていることとなります。今後も JPS や写真界に対して本校が役に立たなければならないと思う次第です。山口副会長の挨拶にあった写真界の岐路を皆様一丸となって乗り越

え盛り上げていきましょう」と挨拶があった。

続いて新名誉会員となった野町和嘉氏、山口勝廣氏へ、熊切会長より名誉会員証、山口副会長と高村達副会長より金バッチを贈呈した。続いて出席の会員外理事、監事、名誉会員を紹介した。さらに写真展事業委員会からは JPS 展、企画委員会からは名取洋之助写真賞、写真保存センター委員会からは百円募金と新任の山下博センター長の紹介などがあった。

乾杯の発声を賛助会員のキャノンマーケティングジャパン株式会社カメラ統括本部 統括本部長の吉田雅彦氏よりいただいた。歓談ののち 2023 年度受賞・出版・写真展開催で活躍の会員と、今年の新入会員の紹介、土屋勝義理事と水咲奈々会員の司会で恒例の福引抽選会を行った。

最後に全理事が壇上に上がり、高村副会長より「振り返った理事で JPS 改革を進めます」との挨拶のあと、三本締めで祝賀会が終了し、散会した。

(贈呈式・授賞式共に記／出版広報委員・小野吉彦、撮影／出版広報委員・桃井一至)



会員相互祝賀会記念撮影 (撮影／井田宗秀会員)



東京工芸大学学長の吉野弘章氏による来賓挨拶



キャノンマーケティングジャパン吉田雅彦氏による乾杯発声



新名誉会員の野町和嘉氏と山口勝廣氏を囲んで 2023 年度新入会員の皆さん



2023 年に受賞、出版、写真展等で活躍された会員の皆さん



恒例の福引抽選会



写真保存センターから百円募金のお願い



2024 JPS 展のアピール



三本締めで祝賀会を終了した



# 「日本写真保存センター」調査活動報告(40)

2023 年度活動のまとめ

理事・寺師太郎（日本写真保存センター担当）

## 1. 2023 年度の原板調査収蔵実績

### (1) 写真原板の収集

本年度も、過去に収集した原板調査作業を重点的に進めるため新規の原板収集は、前半期に収集対象作家の調査、ヒアリングを行い、後半期に作家のご遺族の元へ同い原板の選定を行い調査作業時の負荷が最小限になるよう収集数量に抑えた。収集作業の負荷が軽減されたことにより、国立映画アーカイブ相模原分館への原板の年間入庫数は、昨年同様となった。調査写真家は4名で、収集は3名の写真家と1団体からの原板の収集を行った。写真家は津田洋甫、勝山泰佑、川西正幸の3名で、いずれも代理人もしくは遺族から寄贈申し出があった。また、広島平和記念資料館から昨年度に引き続き追加での保存の依頼を受けた。

### (2) 写真原板の調査状況

写真原板の調査は、写真原板や資料を受け取った時の整理状態や数量など全体を記録する「初期調査」と、その後原板1点ずつの詳細な状態や公開するコマの撮影日時・場所などを記録する作業およびデジタル画像を作成する「本調査」の2つがある。本年度調査を行った内容は以下のとおりである。

○初期調査：大東元、杉本恒

○本調査：写真協会、若目田幸平、広島平和記念資料館本調査が完了した写真原板は、国立映画アーカイブ相模原分館に入庫を行った。

### (3) 写真原板のデジタル化

昨年度より写真原板のデジタル化は、高画素のデジタルカメラを使用して複写する方式に変更したことにより、公開データベースから申請フォームを経由しての活用申請、データの貸し出しまでがシームレス行える高精細な画像が4300点増加した。

### (4) 写真原板の活用と広報活動

保存センターに収蔵された写真原板画像や撮影情報は、調査や権利処理が完了したコマより順次閲覧データベース(写真原板データベース)で公開している。本年度は1,004点を追加し、2024年2月末現在では23,746点となった。掲載写真として追加したコマは『岩波写真文庫』が中心である。活用の状況を把握する指標の一つとして、データベースの閲覧件数(PV数)・閲覧者数(UU数)を調査しているPV数は14,545件、UU数は2,263人であり(2023,4.1～2024,1.31)、月平均PV数1,455件、UU数226人であった。昨年度の月平均PV数

1,828件、UU数219人(2022,4.1～2023,3.31)と比較して、月平均PV数は79.6%と減少したものの、UU数は103.2%と微増した。本年度は、公開データベースの更新とジャパンサーチ「ギャラリー」公開が後半になったころから数字を落としたのではないかと推察する。しかしながら保存センターのホームページについては協会ホームページ委員会と連携してアクセシビリティの更新をしていくこととなった。

画像データ利用に関しては、以前と同様に出版社からの出版物掲載やイベント、写真展での展示、テレビ番組での放送など多岐に渡る13件となった。利活用促進のための対外広報活動は、日本写真保存センター、日本カメラ財団共催で写真展「日本の断面1938-1944 -内閣情報部の宣伝写真-」(2023年6月6日～7月2日JCIIFォトサロン)を、保存センター委員会セミナー『「一歩進んだ画像保存術、プロが勧めるNAS活用法」～日本写真保存センターNAS導入事例から～』(2024年1月24日JCIビル6階会議室)を行った。

## 2. 新たな収集作家について

本年度、寄贈の相談を受けて調査を行った勝山泰佑氏は、その写業を2冊の写真集にまとめている、『できごと』『ひとびと』である。1963年から2014年の50年間にわたる記録をまとめた写真集は戦後50年間の日本史といっても差し支えない。勝山氏自身もそれを強く意識していたようで『できごと』の巻頭、巻末と章立てに

1983年から勝山氏が取り組んでいる最長12時間に及ぶ長時間露光による太陽の軌跡をその時代を象徴する場所で捉えた写真が収められている。

戦後の日本はその矛先がどちらを向いているか、だれがそれを握っているのかの違いだけで、やはり銃後に国民



ナンバリングされて整理されたプリント



プリント裏にはネガ番号を記載



「4.28沖繩デー。学生街の神田駿河台は日本のカルチェラタンに。  
東京・神田」(1969.4.28) 撮影：勝山泰佑

がいることに変わりなかった。そんな社会で人々がそれに気づいたときに沸き起こった運動も多く記録されている。「フランス式デモ」「連帯」、世代によってはすぐに意味の分からない言葉もあるが、「オキュパイ運動」「雨傘運動」と置き換えれば理解できるかもしれない。ベトナム反戦、東大紛争、駿河台カルチェラタン、安保、抗議する側、される側両方を捉え、反戦の機運がたかまる傍ら基地のある町の活況、特に反戦のチラシを受け取る米兵の写った1コマは、国家の思惑とそれぞれの暮らしの交錯した様ともいえよう。経済成長によって変わっていく都市、社会の記録も多く残しており、大都市から離島まで広く撮影を行っている。

所得倍増を目指す日本にとって貴重なエネルギー、その救世主とされたのが原子力発電であり、発電所設置においては様々な摩擦が起こった。伊方原発控訴や柏崎原発の住民集会での住民の不安げな表情、成立しない市場の競りやそれでも漁に出る漁師の虚無感、勝山氏のカメラには常に被写体への思いが向けられていることがよく伝わってくる。原子力と人々の生活、そこにはこれまでの職に影響を受ける者もいれば、それによって潤う町もある。ここでも勝山氏は社会の表裏を捉えていた。その様子を見ると現在の福島と重ねずにはいられない。原子力の平和利用は、世代を跨いで考え続けるテーマであることを眼前に突き付けられる。

勝山氏は早稲田大学在学中からドキュメント撮影を始め濱谷浩氏が師匠であった。大学を卒業後は『アサヒグラフ』『週刊朝日』『朝日ジャーナル』『太陽』『中央公論』など雑誌社での撮影を行っており日本のグラフィックナリズムを体現した世代である。また、1978年にはボブ・ディラン日本公演全記録、アメリカ最終ツアーを撮影。そのほか多くのアーティストを撮影している。音楽と思想が非常に密接であった時代、ボブ・ディランが象徴するように時代を濃厚に表したフォークの流れが1970年代の日本に多くの影響を与えていたことが勝山氏の原板に多くのフォークシンガーが写っていることから見て取れる。80年代になると経済発展の成熟期を見つめるかのように様々撮影の幅が広がっていく。そ



毎日のように反安保を訴えるフランス式デモが続いた。アンボ自動延長の翌日、田町から新橋へ」(1970.6.24) 撮影：勝山泰佑

のなかでも日本を代表するパーカッショニスト高田みどりが秋芳洞の鍾乳石を使って録音を行った場面は、経済発展と共に文化にも注目が集まり様々な挑戦がなされていたことの表れではないか。こういった記録は、事実のみならず人々に興味関心の移り変わりを写しているともいえよう。

勝山氏の人物を通して時代を捉える作業は、作家、演劇人、研究者、俳優、政治家、など多岐にわたっていく。それらの作品は『ひとびと』にまとめられているが、その中でもとくに瀬戸内寂聴氏を長期にわたって取材している。出家前からの記録も含め多くの原板が残されており、原板には掲載された画像の前後の画像も含まれ、まだ公表されていない貴重な記録である。原板収集によって記憶が記録として後世に遺される、好事例であると考えている。

### 3. NAS セミナー開催について

コロナの影響で実施できていなかった公開セミナーを令和6年1月24日にJCIビル6階で開催した。日本写真保存センターでフィルム原板をデジタルカメラやスキャナでデジタル化した画像を保存しているNAS(ネットワークストレージ)について、「外付けハードディスクから一歩進んだデジタル画像保存術、プロが勧めるNAS活用法」と銘打ったセミナーで、NAS機器導入で協力頂いたSynology社から2名の講師を招き、委員2名と合わせてフィルム原板デジタル化の方法、NASの活用方法などをレクチャーした。カメラ関連メディアなどを使って告知を行ったこともあり、会員21名、一般38名の来場と、会員限定オンライン参加は29名で計88名の参加となった。事後アンケートの結果では、セミナー満足度については4.3点(5点満点中)の結果を得た。

### 4. 今後の活動について

日本写真保存センターでは、今後も広報活動を積極的に行うことで周知をはかり、公開データベースだけでなく収益の伴う利用も促進していきたい。引き続き会員の皆様のご支援、ご協力をお願いしたい。

## キヤノンマーケティング ジャパン

映像表現のあらゆるシーンで。  
遂に完成、F2.8 通し「24-105mm」

RF24-105mm F2.8 L IS USM Z は、EOS R システムの特長である大口径マウントとショートバックフォーカスを活かし、解放 F 値 2.8 通しでありながら、広角 24mm から中望遠 105mm までを 1 本でカバーした大口径標準ズームレンズです。ズ

ーム時の全長固定、アイリスリング搭載、パワーズームアダプター対応により、静止画だけでなく動画撮影に配慮した設計で幅広いジャンルで活躍。ポートレート撮影にて多用す



る焦点距離 24mm から 105mm までをレンズ交換無しで連続的に撮影が可能。さらに UD レンズを 4 枚効果的に配置し、ズーム全域で高画質な描写性能と、2 基のナノ USM ユニットの高速 AF を実現しています。

### 【問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社  
フォトカルチャー推進課 日下部  
TEL:03-3542-1831  
URL : <https://canon.jp/>

## TOPPAN

「グラフィックトライアル 2024 - あそび」展 2024 年 4 月 27 日(土)～7 月 7 日(日)まで開催。

本展は、グラフィックデザインと印刷表現の関係を深く追求し、新しい表現を模索、獲得するための試みです。第一線で活躍するクリエイターと TOPPAN が協力して、多様な印刷方式と製版手法を掛け合わせ、さらに加工技術や多彩なメディア表現を取り入

れた次世代の印刷表現に挑戦します。18 回目を迎える今回のテーマは「あそび」です。世の中は SDGs を中心に、多様化や個性の尊重、縛られない、優しい世界へと変化を続けています。決めすぎない、常に新しいことを生み出すために必要な「あそび」の要素も取り入れた、これまでに見たことのない作品づくりを目指します。



参加クリエイターは、日比野克彦、岡崎智弘、津田淳子×大島依提亜、生島大輔の 4 組です。会場では、印刷実験を活かしてつくりあげたポスター作品とともに、完成に至るまでの試行錯誤した印刷実験のプロセスを展示し、思考の軌跡とともに作品に盛り込まれた印刷技法を紹介します。

会場：印刷博物館 P&P ギャラリー

### 【問い合わせ先】

印刷博物館 東京都文京区水道 1 丁目 3 番 3 号 TOPPAN 小石川本社ビル  
TEL:03-5840-2300 (代表)  
URL : <https://www.printing-museum.org/>

## OM デジタル ソリューションズ

ハーフ ND フィルターの効果をカメラ内で再現した「ライブ GND」搭載「OM SYSTEM OM-1 Mark II」発売

2024 年 2 月 23 日に発売となったミラーレス一眼カメラ「OM SYSTEM OM-1 Mark II」は、明暗部をコントロールして印象的な作品に仕上げるハーフ ND フィルターの効果を、カメラ内で再現する世界初※「ライブ GND (グラデーション ND)」機能を搭載。フィルター

段数 (GND2、4、8)、フィルタータイプ (Soft、Medium、Hard)、効果がかかる位置や角度の調整を、EVF もしくは背面モニターを見ながらリアルタイムに確認でき、意図に合った撮影がスムーズに行えます。強力なボディ内 5 軸手ぶれ補正を備え、補正効果は最大 8.5 段、高い防塵・防滴設計 (防塵・



防水保護等級 IP53)。さらにメモリー増設により、連続撮影可能枚数の大幅アップ、高速撮影能力の向上を実現、アウトドアなどフットワークを活かしながらの撮影領域をさらに広がります。

また、発売に合わせキャンペーンも開催しています。『OM-1 Mark II 発売記念キャンペーン』(～2024 年 4 月 10 日まで) 詳細 : <https://jp.omsystem.com/campaign/c240130a/index.html>

### 【問い合わせ先】

OM デジタルソリューションズ株式会社  
OM SYSTEM PRO SERVICE 鳥居  
TEL: 03-3466-2951 (10:00-18:00 火・水定休)

## ロカデザイン

KANI フィルター 新型フレーム付き HT IV Holder 販売開始。

KANI フィルターは、角型フィルターのリフレーム付き仕様を販売開始しました。力の無い女性、高齢の方、フィルターに指紋がつくことを極力避けたい方向けとなります。フレーム無しも引き続き販売を継続し、お客様の要望に合わせて対応できるようにします。

KANI フィルター、低反射コーティングにより、ゴースト、フレアが出

づらく、色被りが非常に少ないのが特徴です。またシステムも充実していることから、色々なレンズに、またフィルターの種類も多数あることから、自分にあったフィルターを選ぶことができます。

KANI フィルターは、毎年フォトコン、フォトコン入賞作品の写真展を全国巡回で行っています。また、撮影会、セミナーも行っており、



購入後のサポートの充実を図っています。フィルター専門ブランドとして、円形フィルターもしっかりラインナップを揃え、お客様のフィルターの御相談にいつでも対応できるようにしております。

フィルター購入を検討される際には、ダイレクト販売のみで価格を抑えて対応している KANI フィルターを選択肢に入れて頂けたら幸いです。

### 【問い合わせ先】

ロカデザイン企画株式会社  
会社 伊藤公彦  
TEL: 03-6339-1284  
E-mail : [info@locauniversaldesign.com](mailto:info@locauniversaldesign.com)





## ライカカメラ ジャパン

ライカ M11-P：写真の真正性を撮影から公開までの過程においてシームレスに担保できる機能を初めて搭載したカメラ

「ライカ M11-P」には、コンテンツ認証イニシアチブ (CAI) が提供するオープンソース規格に基づき、画像に安全なメタデータを付与する機能が搭載されています。これにより、画像データの生成と編集の透明性を高めることが可能になり、撮影者や

撮影日、カメラの機種や編集の履歴などを記録できるため、画像の出所と来歴を把握できます。この機能は「Leica Content Credentials」と呼ばれ、メニューから設定することで、モニター上にロゴが表示され、署名が画像に付与されます。これらの情報は後から変更できない一方で、CAI が提供するツ



ルで確認できるため、画像の真正性を担保する証明として利用できます。主な特徴：

- 「Leica Content Credentials」機能搭載
- トリプルレゾリューション技術採用の6000万画素裏面照射型 CMOS センサー
- 正面の赤い Leica ロゴの代わりにトップカバーに筆記体の「Leica」を刻印
- 液晶モニターにサファイアガラスを採用
- 内蔵メモリーは大容量の 256GB

### 【問い合わせ先】

ライカ カスタマーケア  
TEL: 0570-055-844 (ナビダイヤル)  
E-mail: info@leica-camera.co.jp

## ウエスタンデジタル

新登場！ SanDisk® PRO-CINEMA CFexpress™ Type B カード

SanDisk® PRO-CINEMA CFexpress™ Type B カード (320GB/640GB) は、動画撮影においてシネマクオリティの映像を実現するのに必要な超高速パフォーマンスを提供し、最低継続書き込み速度 1400MB/秒で 8K ビデオを収録で

きます。また、名称に CINEMA (シネマ) とありますが、写真撮影においても最大 1500MB/秒の書き込み速度と最大 1700MB/秒の読み出し速度の性能を活かし、高画素モデルでの高速連続撮影、PC への高速転送にも最適で



す。最大 1メートルの高さからの落下と最大 50 ニュートンの圧力に耐える耐久性も備え、貴重な映像や写真を保護。あらゆる場面で優れたパフォーマンスを発揮できるプロ向けに設計されたカードで、各主要カメラメーカーにて互換性検証済みです。

### 【問い合わせ先】

ウエスタンデジタル合同会社  
製品広報 鈴木・北嶋  
E-mail: japan.pr@wdc.com  
URL: https://sandisk.co.jp/

## パナソニック

撮って出しで得られる美しい描写力。新たな中望遠単焦点マクロレンズで表現の幅がさらに広がる。LUMIX S5II & S-E100

LUMIX S5II は、小型・軽量ボディに高い解像力・豊かな色調表現力を備えた新世代ミラーレス一眼です。見たままの自然な色合いで撮って出しから得られる美しい描写性能に加え、像面位相差 AF 搭載により、高精度・

高速な AF を実現。加えて、手持ち撮影にも強い手ブレ補正機能では「アクティブ I.S.」の搭載により、歩き撮り時や望遠時のフィックス撮影に発生する手ブレも強力に抑えます。新た



な写真の楽しみ方「リアルタイム LUT」では、自分好みの色表現を撮影データに反映できると大変好評です。さらに、小型・軽量な中望遠単焦点マクロレンズ「S-E100」の組み合わせにより、マクロレンズ特有の美しいボケ表現と奥行き感ある撮影他、ポートレートやスナップ撮影など多彩なシーンで活躍します。

### 【問い合わせ先】

パナソニック株式会社 コミュニケーションデザインセンター 柴田  
E-Mail: cdc\_pr@ml.jp.panasonic.com  
URL: https://panasonic.jp/dc/

## 一般社団法人 日本学生写真部連盟

新賛助会員入会のご挨拶

日本学生写真部連盟 (Federation of Japan University Photo Club 略称: FUPC) は、大学の写真部や映像系サークル活動の活性化と大学間の交流促進を目的とする団体です。

単独の部活では実現が難しいイベントを開催し、知識や経験の共有を促進しています。具体的にはプロ写真家や映像作家を講師に招いた撮

影・表現技法セミナー、撮影会や春・夏の合宿、機材メーカーの方々の交流会、そして写真や動画が好きな大学生どうしの交流を深めるさまざまなイベントを写真業界の協力のも



と実現しています。

現在は全国に 58 校を擁し、学生の専攻分野は文系から理系まで広くにわたり、しかし「カメラが好き」「撮るのが大好き」という共通の思いで活動を続けております。

写真好きな大学生たちとのチャンネルに興味あるかたのコンタクトを求めています。

### 【問い合わせ先】

一般社団法人 日本学生写真部連盟  
事務局: 水島 章広  
E-mail: info@fupc.photo  
URL: https://fupc.photo/  
(構成/出版広報委員・桃井一至)

# 2023 年第 18 回「名取洋之助写真賞」報告

公益社団法人日本写真家協会は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している 40 歳（第 17 回まで 35 歳）までの写真家を対象とした「名取洋之助写真賞」の第 18 回選考会を、過日、山田健太（専修大学教授）、清水哲朗（写真家・JPS 会員）、熊切大輔（写真家・JPS 会長）の 3 氏によって行った。応募はプロ写真家から在学中の大学生までの 13 名 14 作品。男性 8 人、女性 5 人。カラー 11 作品、モノクロ 3 作品。1 組 30 枚の組写真を厳正に選考し、最終協議の結果「名取洋之助写真賞」は中条望「GENEVA CAMP- 取り残されたビハール人 -」、「名取洋之助写真賞奨励賞」には 2 作品、齊藤小弥太「土地の記憶」と小山幸佑「私たちが正しい場所に、花は咲かない」の受賞が決定した。



選考風景 写真左から清水哲朗、熊切大輔、山田健太の各氏

## ○最終選考候補者

- ・中条 望「ロヒンギャ・帰るべき故郷を求めて」
- ・May「帰れない人々～ミャンマー避難民の村～」
- ・児玉 浩宜「ウクライナ 自由を求める少年たちの心のシェルター」
- ・齊藤 小弥太「土地の記憶」
- ・中山 優瞳「さくら写真館」
- ・小山 幸佑「私たちが正しい場所に、花は咲かない」
- ・中条 望「GENEVA CAMP- 取り残されたビハール人 -」

## ■ 2023 年 第 18 回「名取洋之助写真賞」受賞



**中条 望**（ちゅうじょう・のぞむ）1984 年 三重県生まれ。39 歳。

同志社大学卒業。大学在学中より活動を始め、フリーランスフォトグラファーとして難民キャンプ・スラム・辺境に生きる人々の撮影と発表を続けている。  
2019 年「サゴッタ 11 歳の女の子が過ごす難民キャンプ」オリンパスギャラリー東京・大阪  
2021 年「今ここで生きる：ロヒンギャ難民キャンプ」オリンパスギャラリー東京、など個展開催。他グループ展出展。  
毎日新聞夕刊 写真特集「eye」に「共に故郷守り、生き抜く ネパール地震 8 年（2023 年 4 月 1 日付）」、「ロヒンギャ光を求めて（2023 年 1 月 14 日付）」掲載、他雑誌への寄稿。公益社団法人日本写真家協会会員。三重県在住。

**受賞作品** 「GENEVA CAMP- 取り残されたビハール人 -」（カラー 30 枚）

**作品について** バングラデシュ国内に存在するビハールキャンプの中で最大の「GENEVA CAMP」を取材した作品。1971 年バングラデシュ独立戦争の際にパキスタン軍への協力を行ったビハール人はパキスタン軍降伏後に弾圧の対象となり難民化。今も約 20 万人がキャンプに暮らし社会から取り残されバングラデシュへの完全な帰属を求め続けている。「社会から取り残された共同体から抜け出し、ただ一人のバングラデシュ人として暮らす姿を見届けるまで私は撮影を続ける。1 日も早く彼らが望む場所にたどり着くことを願って」

**受賞者のことば** 目標としていた名取洋之助写真賞を受賞することができ大変光栄に存じます。バングラデシュ独立の翌年 1972 年に設立された GENEVA CAMP、今もそこで暮らし続けるビハール人の窮状と尊厳をこのような場で伝えられることで、ようやく私の義務の一つ果たせたと感じています。2012 年に初めて訪れてから今日に至るまで、私を優しく受け入れ続けてくれた彼らに心より感謝いたします。彼らが望む場所に辿り着くその日まで、私は撮影を続けたいと思います。

## ■ 2023 年 第 18 回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



**齊藤 小弥太**（さいとう・こやた）1986 年 神奈川県生まれ。37 歳。

2008 年 日本写真芸術専門学校海外フィールドワーク科卒業。2009 年 ファッションスタジオ勤務を経て、フリーランスフォトグラファーとして活動中。2013 年「永遠の園」新宿、大阪ニコンサロン。  
2019 年「サンディマンディラム - 終の家 -」CANON ギャラリー銀座、大阪。2022 年「Physis」エプサイトギャラリー丸の内。2022 年 TOKYO BRIGHT GALLERY 所属。千葉県在住。

**受賞作品** 「土地の記憶」（モノクロ 30 枚）

**作品について** 2029 年 3 月 31 日に新設予定の成田空港第 3 滑走路の工事を取材した作品。集落では高齢化が進み、昔のような大きな反対運動はなく淡々と移転が進んでいる。2019 年から先祖代々の土地に生きる人々の暮らしと、昔から続く素朴な風景に心を惹かれ、取材を始めた作者。失われゆく景色と人々の営みを記録した。

**受賞者のことば** この度は奨励賞を受賞させていただき、誠に嬉しく思います。成田国際空港の第 3 滑走路新設に伴い、移転対象の地域では徐々に住民が集落を離れており、昔から続く営みは時間の経過と共に失われています。淡々と移転へと進む中で住民の方々が抱える様々な想いや、土地の風景を記録してきました。今では存在しない風景も多くなり、いずれ記憶も風化してしまいますが、確かに存在した土地の記憶を展示を通じて感じていただけたら幸いです。

## 2023年 第18回「名取洋之助写真賞」総評

熊切 大輔(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会長)

しっかりと取材された素晴らしい作品が集まり、我々選考委員を大いに悩ませてくれた。結果昨年とは対照的に、奨励賞に2作品を選出するという結論になったわけだが、選考委員の意見は早い段階で一致する形となった。



名取洋之助写真賞は中条望さん「GENEVA CAMP- 取り残されたビハール人-」。そのテーマはバングラデシュで取り残された民族ビハール人の姿だ。抑圧されたキャンプ生活の現実をしっかりと捉えながらも、活き活きとした力強い表情を色濃く写し出している。後半に向かって希望の光が見えるような作品構成も印象的だった。

奨励賞一人目は齊藤小弥太さん「土地の記憶」。一見収束したように見える昭和から続く成田空港土地収用問題。今も翻弄される人々とその土地の風景を淡々と切り撮った作品だ。撮影者が被写体に静かに寄り添うような距離感がそれぞれの思いを表現している。

奨励賞二人目は小山幸佑さん「私たちが正しい場所に、花は咲かない」。イスラエル・パレスチナを分断する壁。互いの人々の交流をその手紙とポートレートで構成された表現が面白い。一見和やかに見えるが両者の根深い問題、感情がさらけ出されている。

いずれも撮影者の個性あふれる作品で、甲乙つけがたいものであった。受賞をきっかけに更にそれぞれのテーマを掘り下げたいと思う。

清水 哲朗(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会員)

第18回名取洋之助写真賞受賞の中条望さん、奨励賞の小山幸佑さん、齊藤小弥太さんの作品はどれも「取材力・写真力・構成力」に優れ、テーマや被写体と丁寧に向き合い、弱者の声を代弁する甲乙つけ難い力作だった。中条さんはビハールキャンプに暮らす人々に寄り添い、日常から垣間見える窮状を写真とキャプション



ンで情報量たっぷりに訴えた。制限される取材環境でカメラを取り出すことの難しさ、撮影・発表することで抱える困難も予想されるが、テーマに本気で向き合う覚悟が伝わってきた。小山さんは前回最終選考まで残った作品と追加取材作品を織り交ぜブラッシュアップしたことで、ポートレートと手紙、風景のバランスが良くなり、見やすさと作品の質が増した。齊藤さんは、静かに淡々と進む成田空港第3滑走路の増設工事と限界集落到暮らす人々の日常、風景を美しいモノクロプリントで丁寧に伝えている。本作を序章とし、滑走路が運用される2029年3月末まで継続的に取材、発表されることで作品の深みがより出るだろう。

今回は13名14作品からの選考だったが、コロナ禍に見舞われたここ数年とは違い、少数精鋭の印象を受けた。ただ、35歳以下の応募3名はあまりにも寂しい。

山田 健太(専修大学教授)



写真は瞬間を切り取ったものであるが、そこに至る歴史的経緯や背景があったり、その後の未来を映し出すものもある。ジャーナリストとしての眼が、そうした過去・現在・未来の時代性を見据えているか、あるいは30枚の組み合わせで表しているかに着目すると、中条さんはバングラデシュ少数民族の苦悩を住民の視点からきちんと伝える作品に仕上げている。また奨励賞の齊藤さんも、成田という特異な歴史を背負う土地をめぐる、社会から忘れかけられたテーマにしっかりと向き合う注目の作品だった。あえて地名を隠すことで一般化しているように思えたが、こうした具体と抽象、固有と全体の往復作業によって、作品により深みを持たせる試みを、進化させることを期待したい。また、小山さんは昨年の作品をさらに洗練させ、ポートレートや手紙との組み合わせという新しい手法で、どこまで何を描けるかの挑戦を引き続き期待したい。

今回、応募年齢の引上げ枠に該当する方の応募が増えたが、それでもまだ絶対数が伸び悩んでいる。ドキュメンタリーフォトを志す、あるいは実践する者の減少は、日本社会の衰退、知力の低下と正比例しているようで強い危機感を感じざるを得ない。来年を期待したい。

## ■ 2023年 第18回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



小山 幸佑(こやま・こうすけ) 1988年 東京都生まれ。34歳

2017年 日本写真芸術専門学校卒業。出版社カメラマンを経て2020年よりフリーランスフォトグラファー。  
2021年 写真家の共同運営による自主ギャラリー「Koma gallery(東京都恵比寿)」設立。東京都在住。

受賞作品 「私たちが正しい場所に、花は咲かない」(カラー 30枚)

作品について 2018年より制作しているイスラエル/パレスチナについてのプロジェクト。作者はひとりの外国人の立場を利用して対立する双方の地域に暮らす人々の写真を撮り、両地域を隔てる700Kmのコンクリートの壁の「向こう側に暮らす人々への手紙」を現地の人に書いてもらった。言語が違うため「伝わらない手紙」だが、それぞれに異なる正義の形と、似通った平和への願いが込められている。

**受賞者のことば** 名取洋之助写真賞奨励賞に選んでいただき、とても光栄です。コロナ禍での取材を含め、遠い日本から来た私を受け入れてくださったイスラエル/パレスチナの人々に心から感謝すると共に、彼らから託されたものをこの機会に多くの方々にご覧いただくことができれば嬉しく思います。いずれきちんとした形として残せるよう、今回の受賞を励みにして引き続き取材を継続していきたいと思っています。



# 2023年第18回名取洋之助写真賞

中条 望「GENEVA CAMP- 取り残されたビハール人 -」(カラー 30点)



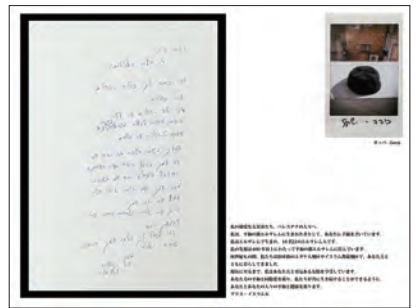


# 2023年第18回名取洋之助写真賞奨励賞

## 齊藤 小弥太「土地の記憶」(モノクローム 30点)



## 小山 幸佑「私たちが正しい場所に、花は咲かない」(カラー 30点)



ゲリス氏(イスラエル人)

ゲリス氏の手紙



アブード氏(パレスチナ人)

アブード氏の手紙

# 第17回 JPS フォトフォーラム

(2023年11月3日(金))：東京都写真美術館 1階ホール

主催：公益社団法人 日本写真家協会

今回のテーマ：

## 「旅を撮る」

JPS フォトフォーラムを、11月3日に東京・恵比寿の東京都写真美術館 1階ホールで開催した。このイベントは当協会が主催し、第一線で活躍している写真家を招き、講演、ディスカッションを行っているもので、今回が17回目の開催となる。プログラムは午前と午後の2回行い、午前の部は10時30分から、午後の部は14時から開始し、午前の部と午後の部でパネルディスカッションに使用する写真の内容を変えて、講演、ディスカッションを行った。

今回のテーマは「旅を撮る」。世界を舞台にして撮影を続けている写真家が、旅先で出会った風景、自然、そして人間をテーマにして、人間の生き方とはどうあるべきか、写真の使命とは何なのかを語った。紙面では午前の部の様子を紹介する。

### 開会挨拶：会長 熊切大輔

今年のフォトフォーラムは「旅」をテーマとして開催します。私ども JPS には様々な会員がいて、色々な写真を撮っているのですが、そのなかには旅のスペシャリストもおります。今日はその方々にお話を頂き、皆さんに旅の魅力、旅に出て写真を撮ることの素晴らしさを存分に感じ取って頂ければと思います。

現代の社会情勢は混迷を極めています。コロナ禍の問題もあります。旅に出たいと考えても、なかなか思うに任せないのが実情で、だからこそ、旅での出会い、一期一会は大切なものとなるのではないのでしょうか。それでは JPS 会員の旅のスペシャリストたちが、どういう風にして旅の写真を楽しんでいるのか。それをたくさんお話頂こうと考えておりますので、どうか皆さん、楽しんで頂ければと思います。



### 講演：「旅は新しい世界への入口」 小澤太一

写真家の小澤太一です。今日ここにおいでになっている皆さんは、アマチュアとして写真を撮っている方も、プロのカメラマンも、色々な形での旅をされていると思うのですが、私にとって、旅というものは、知らない世界を知るきっかけとなっています。人が旅に出る理由というのはいくつかあると思うのですが、私は自分がまだ知らない国に行って、そこで何を感じ、何を考えるのか、それを確かめることがとても好きなのです。

私がナウルという島国に初めて行ったのは2011年のことでした。太平洋南西部の赤道直下にあるこの島は、約1万人の人が住む世界で3番目に小さな国です。今こそ SNS で情報が拡散されて有名になっていますが、

当時はまだまったくの無名で、私が「次はナウルに行く」と言っても、聞いた人が「それどこ？」という具合で、その存在を知っている人は、ほとんどいませんでした。実際、私自身も行き方や、ビザが必要であるかも分からず、いざ現地に着いても、空港からホテルまで、地元の人で送ってもらうという有様でした。ホテルに荷物を置いた後は、すぐにホテルの前を歩いている人に片っ端から声をかけて、移動手段としてバイクを借りられなかったか、相談をしなければなりません。

ナウルは面積でいえば品川区と同じくらいの、周囲19kmの島です。ということは、どこに行っても水平線が見えて、朝日や夕日を見ることができるのです。借りたバ





赤道が通っている国の1つ、ガボンでの偶然の出会い。家に招待してもらい、僕のためにウェディングドレスに着替えてくれたお母さんと、その子どもたち。 撮影：小澤太一

イクで、1日に島を何周もして撮影を続けました。ナウルでとても魅力的に感じたのが、子どもたちの姿でした。子どもたちは自然を相手にして遊んでいる。私は子ども目線での撮影を心がけ、カメラを低い位置にしての撮影を続けました。もう一つ心がけたのは、1枚写真を撮ったら、それでその場を去るのではなく、長くそこにいられるような、相手をリスペクトする環境作りです。そうすることで、良い写真を撮れる瞬間に多く出会うことができるようになる。私のナウルの旅は、そのようなことを勉強する機会にもなりました。

2015年にはサントメ・プリンシペという国に出かけました。アフリカといっても大陸にあるわけではなく、海にある島国です。島国の雰囲気はナウルで知っていたから、船のヒッチハイクなどして撮影を続けました。そうしているうちに、ここを赤道が通っていることに気が付きました。それでは世界で、赤道が通っている国はいくつあるのだろう。これを調べてみると11か国しかないのですね。それであれば、これを全部まわることはできるのではないかと。それは面白いテーマになるのではないかと。そう考えるようになりました。

南米大陸の、国の名前がまさに「赤道」を意味するエクアドルでは、赤道のテーマパークがある。実際には200mほどずれているそうなのですが(笑)、盛り上がっています。ブラジルには赤道直下にサッカーのフィールドがあって、そのセンターラインが赤道なのです。こういう施設はガイドブックには載っていません。実際に自分の足で現地を訪ね、時間をかけてまわることで、発見できるのです。もちろん、記念碑だけを撮るために旅をしているのではない。そこに住む人の暮らしぶりを撮影するために、旅をしているのです。

赤道の直下には記念碑がある国もあれば、ない国もあ

ります。ケニアでは小学校を訪れ、旧ザイルではコンゴ川を大量のペットボトルが流れているのを見ました。ゴミです。ガボンでは訪れた家のお母さんが、ウェディングドレスに着替えて、写真を撮らせてくれました。褐色の肌の人を着る白いドレスは、本当に魅力的です。何枚も写真を撮り、「これで完璧だ」と思っていたら、彼女が子どもたちを呼んで、ドレスの上に乗せた。その姿が魅力的で、つい先ほど撮ったたくさんの写真が、すべて無駄になりました(笑)。写真家といっても、実際に現地の人に教えられることも多いのです。この写真は、街に出て、メモリーカードからプリントできる機械を見つけて、無事プリントを彼女に渡すことができました。機械を見つけることができなければ、いまだに彼女に写真を渡すことはできなかったかもしれません。

海外で撮影を続けていると、アクシデントに出会うこともあります。ケニアでは、留置場に入れられたことがあります。ソマリランドでは、現金やパスポートを盗まれました。この時は、盗まれたものを取り戻すために裁判を起こす必要があり、その様子は現地の新聞に、トランプ大統領よりも大きく報じられました(笑)。

そんなアフリカではありますけれど、私の好きなアフリカのことわざに、「道に迷うことこそ、道を知ることだ」というものがあります。目的地に向かって真っすぐに進むことだけでなく、迷っている過程のなかでこそ得られるものがあるという意を持ちつつ、街を闊歩する。 私にとっては、旅に出て、カメラを通して現地の風景と向かい合い、たくさんの時間を過ごすことが、何よりも大切なものとなっています。



コンゴ共和国のサブール。〈コーディネートに使う色は3色まで〉という独特のファッション美学を味です。私に 撮影：小澤太一

#### 小澤太一 (こざわ・たいち)

1975年名古屋生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、アシスタントを経て独立。雑誌や広告などで幅広い人物撮影をメインに活動。ライフワークは「世界中の子どもたちの撮影」。年に数回は海外まで撮影旅行に出かけ、写真展も多数開催。主な写真集として「ナウル日和」「SAHARA」「赤道白書」など。身長156cm 体重39kgの小さな写真家。キヤノンEOS学園東京校講師。JPS会員。



## 講演：「未知と写真、旅と表現」 竹沢うるま

写真家の竹沢うるまです。私がこれまで訪れた国を数えてみますと、145を超える国と地域を訪れていることが分かりました。自分としては数を意識して旅に出ている

たわけではなくて、結果として、それだけの数になったということです。小澤さんのお話を聞いていて、私と共通するなと感じたのは、「未知と触れたい」という思い

です。

未知というのは、写真を撮るうえでとても大切な要素だと思います。この未知というのは、写真の表現法としての未知でも構わないし、撮影をする者が未知の場所であること、あるいは感覚的な未知に触れた時に、人の心が反応するのだと思っています。旅というのは、未知にあふれています。私たちが日ごろ暮らしている環境、あるいは日常というのは既知です。既に知っている世界である。けれども、そこから一歩外に出ると、そこにはたくさんさんの未知が広がっているわけです。そういった時に、撮影者、あるいは旅をする人といっても良いのでしょうか、その人の手元にカメラがあると、シャッターを切るということになる。その撮影者の心の震えが写真に写し出されて、それを見た人がまた未知に触れて、心が震える。それが旅の写真の魅力ではないかなと思います。

私は21歳の時から写真を撮る仕事を始めたのですが、出版社に在籍していた時代があり、その時には年に20回から24回くらい海外に出かけていました。海外で10日間撮影をして、日本に帰ってきて1日過ぎたら、また出かけるという具合です。そうしているうちに30歳になり、「自分の写真とは何なのだろう？」と振り返って見たのです。それが煮詰まり続けて32歳になった時に、旅に出てみようと考えました。それまでは依頼を受けて写真を撮る仕事を続けてきたのですが、今度は自発的に旅をしようと考えたのです。最初は1年で日本に帰るつもりでいたのですが、結果的には3年くらい旅を続けることになりました。

その旅では、北米と南米を周るだけで1年を要しました。旅の2か国目に訪れたのがキューバで、この国が持つ熱量のようなものに震えを感じ、またいつかここに帰ってこようと感じたものです。3年間の旅から帰った後にも、まず手掛けたのはキューバに関する写真をまとめることでした。

ボリビアでお祭りの写真を撮った時は、現地の村で1週間を過ごし、村の人から誘われてお祭りに出かけました。対外的にPRをして行うお祭りではありませんから、やはりある程度の時間を過ごさないと知りえない行事だったのだと思います。このあたりのアプローチは小澤さんと同じであるかもしれません。ただ、小澤さんがどこか特定の場所に留まることが多い人であるとするならば、私は移動を続ける人間です。一定の所に居続けると、自分の心の中に「もっと違う所に



Santa Clara, Cuba / 2015.04

撮影：竹沢うるま

自分が訪れるべき場所、あるいは自分を待っている場所があるのではないだろうか」という思いが湧いてくる



Kolata, India / 2019.01

撮影：竹沢うるま

のです。移動には陸路を使います。列車、バス、ヒッチハイク、馬、ラクダ、そういったものを組み合わせます。バスが3日に1回しか来ないような場所もありました。これまで旅してきたなかで、好きな場所の一つがアフリカです。その理由はシンプルであるということです。自分が生きてゆくためにはどうすれば良いのかということからすべての行動が生まれる。人間の感情もシンプルで、やり取りが楽なのです。

そうしているうちにコロナ禍となり、非常事態宣言の下で、私は鎌倉の自宅にこもり、それまでの20年間に撮影した写真を一つひとつ見返しました。それまでは、ずっと非日常を追い求めて旅を続けていたわけですが、コロナ禍で日常と非日常が逆転すると、そこに写っているのは非日常ではなく、日常であったことに気が付いたのです。私の視点は大きく変わりました。人々の何気ない表情や、名前をつけることができないような当たり前の風景、そういったありふれた日常に強く惹かれ、そこに差し込む美しい光を見つけてはシャッターを切るようになったのです。いまは以前よりも遥かに、旅の世界が輝いて見えます。旅という行為そのものが表現行為であると考えています。その人の思想や視点が、旅の軌跡に反映され、オリジナリティーを創出する。旅を撮るためには、その人だけにしかできない旅をする必要があるのだと思います。

#### 竹沢うるま (たけざわ・うるま)

1977年生まれ。2010年から2012年にかけて1021日103か国を巡る旅を敢行し、写真集『Walkabout』と旅行記『The Songlines』(小学館)を発表。2014年日経ナショナルジオグラフィック写真賞グランプリ。最新作は『BOUNDARY|境界』(青幻舎)。大阪芸術大学客員教授。JPS会員。



#### 〈第17回 JPS フォトフォーラム協賛〉

エブソン販売株式会社  
OM デジタルソリューションズ株式会社  
キャンボンマーケティングジャパン株式会社  
株式会社シグマ  
株式会社タムロン  
株式会社ニコンイメージングジャパン  
富士フイルムイメージングシステムズ株式会社



# パネルディスカッション

パネリスト

小澤 太一  
竹沢 うるま  
山口 勝廣

司会進行：飯田裕子（JPS 会員）

## ■撮影手法は、伝えたいという思いから生まれる

**飯田** 写真家の飯田裕子です。このディスカッションでは、お三方が撮られた1枚の写真を選び、ほかの2名の方の「この写真が気になる」という感想を述べていただくという形で進めたいと思います。みなさん地球的に旅を続けておられますので、とても期待のできるお話になるのではないかと思います。よろしくお祈りします。最初にご覧頂く1枚は、山口勝廣さんが撮られた花の写真で、これは竹沢さんのお選びになりました。（写真・右上）

**山口** この写真は南アフリカで撮影したジャカランダという木が花を咲かせているところで、日本でいえば桜のようなものです。南アフリカの首都はプレトリアですが、このプレトリアにジャカランダの並木があり、素晴らしい大木に育っています。日本には少ない紫色の花が、抜けるような青空に映えている風景は、この国を象徴しているのではないかと感じました。

**竹沢** ジャカランダの紫の花の手前に咲いているピンクの花はブーゲンビリアだと思うのですが、私がこの写真を選ばせて頂いたのは、植物の生命力があふれていると感じたからです。私は今年の3月から2か月間北極に行っていたのですが、そこには植物が存在しないのです。北極の滞在を終えて日本に帰ってきた時に、最初に感じたのは、なんて緑は美しいのだろう、ということでした。植物ってすごいなと。その植物が内包している生命力が写ってる写真です。ジャカランダとブーゲンビリアと、青い空がそろう瞬間というのは、なかなか



「クルーガー国立公園の野生の縞馬にビックリ仰天！」国立公園を貫く1本の車道、迫るトラックに縞馬の群れがドライバーを見つめ、意思が通じたのか、停止したトラックの前を一斉に渡り終えた。荒野での出来事だ。撮影：山口勝廣



っていますか。

**山口** 植物の生命力というのは人間の生命と同じで、盛りの時もあれば枯れる時もあります。私のこの写真は、プレトリアで撮ることができたというところに運があったのかなと思います。

**飯田** 2種類の花が同時に咲いているところに、生命力を感じます。それでは、竹沢さんの作品で、小澤さんが「気になった」という写真ですね。

**小澤** うるまさんの写真で、私が気になったのが、インド・カルカッタの街を撮った1枚、スローシャッターを使ってなのでしょうか、残像をイメージさせてくれるこのような撮り方を、うるまさんが始められたきっかけというのは、どのようなものなのでしょうか。（写真・34頁右上）

**竹沢** 私が写真というものの限界を感じているというべきなのか、写真表現というものは、今は非常に多岐になり、多くの方が色々な撮影方法を試している。その中で、新しい表現方法を編み出したいという思いは常にあります。写真を撮っていると、そこに自分が見ている世界が写るのですが、自分が感じている世界が写っていないことが多いのです。そこに苦しみを感じています。目に見えないものを表現したいと思う時に、写真の限界を感じます。半分投げやりになって撮った写真を見た時に、「あれ？これ行けるんじゃない？」と（笑）、そうやって生まれた手法です。

**小澤** 『Walkabout』の時もそうだったけれども、一般の方のスローシャッターに対する概念と、根本的に何が違う気がします。

**竹沢** この撮り方は、難しいのか、簡単なのか、分からないのですが、撮影方法を知っても、同じような写真は撮れないと思います。考え方としては1枚の写真の中に、止まっている時間と、動いている時間があるということですが、こういう写真表現は、自身が限界を



海を渡って行った人々は人類最後の移動を海洋に試みたポリネシア人だった。日の出を待ち海上で撮影したカヌーを漕ぐタヒチアの戦士。撮影地：クック諸島 撮影：飯田裕子



感じた時でないと成立しないと思うのです。そこに何かがあるのに撮れない。そのモヤモヤがないと撮れない。

小澤 手法ありきではないのですね。

竹沢 手法ありきではないです。まず最初に伝えたいことがあって、それをどうやったら伝えられるかというところから手法が生まれるものだと、私はそう考えています。

## ■人物撮影は、どのようにしてアプローチするのか

飯田 旅をされていると、視覚だけではなく、五感、六感まで感じるものがありますからね。こちらの写真からは、喧噪だったり、凝縮されたエッセンスが感じられました。次の作品は、小澤さんがコンゴ共和国で撮影されたものです。ちょっと目にはいかつい印象の人たちですが、「サプール」と呼ばれる人たちで、おしゃれをすることで、もうこれ以上争いごとはしないと、平和を訴えている人たちです。(写真・33頁右)

小澤 この写真を写真展で展示した時も、「よくカメラを向けられたね」と言われたのですけれども、何もそのような勇気がなくても撮れる写真なのです。ただ、この写真はフェスティバルの会場で撮った写真なのですが、最初にフェスティバルのチーフの方の所に行って挨拶をすることはしました。「写真を撮りたい」と言ったら、「全部撮りなさい」と言って頂けた。「わざわざ日本から来ているのだから、どこでも撮って良い。自由だよ」ということになって、とても多くの観客がいる中で、あたかも自分がオフィシャルのカメラマンであるかのような、そんな不思議な環境のなかで撮った写真です。彼らは午後から暗くなるまで、そうやってパレードを続けている。私は1万近いカットを撮影しました。

飯田 竹沢さんが、気になったと仰っていた1枚ですね。

竹沢 まさしく、そこのところをお聞きしたかったのです。人物を撮るうえで、どうやってアプローチしているのかなと。この時に限らず、「撮りたいのだけれど、どうなのだろう？いいのかな？」という時があると思うのです。そのような時は、どうされていますか。

小澤 旅で外国に出ている時は、自分が外国人であるという立場に甘えて、現地の人に助けを求めよう。それは撮影だけでなく、生活をするうえでのすべてのことに当てはまるのですが、自分が何をやりたいのかということについて意思是示。そのうえで駄目と言われたのな

ら、それは仕方ない。相手の人が、「ああ、外国人に協力してあげようかな」と思うように、その部分は頑張っています。図々しさは大事かと(笑)。

竹沢 そうですよ。図々しさは大事です(笑)。私も同じで、「どうかな。撮影させてもらえるかな。断られるかな」という迷いは、実は自分の内面だけの問題であって、すごく怖そうな人に、絶対に断られるだろうなと思いつつ話をしてみたら、「撮ってくれ、撮ってくれ」とウェルカムだったという経験が私にもあります。撮れるか撮れないかを自分で決めてしまうのではなく、まずは聞いてみるというのは、とても大切なことですよ。嫌なら嫌と言いますから。

飯田 山口先生はいかがですか。百戦錬磨で、色々な国で、色々な人に会われていると思うのですが。

山口 私は、もともと人を撮るのは好きなものですから、旅をしていても、人が絡んでくるような写真を撮りたいと思いつつしています。何を見て心が震えるかということが大切なのだと思います。

飯田 その姿勢は、被写体となっている人にも伝わりますよね。

## ■人の心に入るために十分な時間をかける

飯田 次の写真は山口さんが撮影された写真です。

山口 これも南アフリカの、ドラケンスバーグという所で撮った写真です。ご覧のように子どもが頭に物を乗せて運んでいるのですが、この場所も本来は人がいるような場所ではないのです。人がいない場所であるはずなのに、人が現れる。それも、音もなくスッと現れるのです。それではこの写真に写した子どもたちと会話ができるのかというと、最初はできていないのです。こちらからは話かけるのだけれども、言葉が通じているわけではない。ただ、写真を撮りたいという気持ちは伝わっているのだと思います。

飯田 小澤さんが、この写真を気になる1枚にしました。小澤 子どもたちに迫って撮影をする時に、山口さんは、どのようなアプローチをされているのでしょうか。それから、実際にこの時は、何を運んでいたのかなということも気になりました。この写真では、頭にさせているのは、洗濯物を運ぶための桶のようにも見えます。もしかしたら、日本にはない様式なのかもしれない。そういう日本にはないものに出会うことが、私の撮影の動機に

### 山口勝廣 (やまぐち・かつひろ)

1940年名古屋生まれ。(株)グラフ社写真部チーフカメラマンを経て1967年フォトオフィス・アルプ設立。旅をテーマとする出版・雑誌にて活躍。ライフワークとして、「木曾路」の風俗、風物、山岳宗教等、木曾谷の人々の暮らしを半世紀にわたり撮影記録。木曾街道400年記念祭企画「木曾路の祭」を始め、写真展多数開催。日本旅行写真家協会会長。JPS名誉会員。



### 飯田裕子 (いいた・ゆうこ)

1960年東京生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒。在学中に三木淳氏に師事。1990年代より北米や南太平洋島嶼へ旅を重ね雑誌への寄稿のほか考古学、人類学者のフィールドに参加し撮影。写真展「海からの便り」1983年新宿ニコンサロン、「海からの便りII」2022年ニコンプラザ THE GALLERY ほか。現在は房総半島在住。JPS会員。





なることもあります。  
**山口** 頭に物を乗せるというのであれば、大原女のように、日本にもそういう習慣はあると思います。ただ、この子どもたちにとっては、このやり方が、人に見せるといふ要素は何もない、毎日の暮らしのなかにあるごく当たり前のものである。それでも子どもたちの表情には優しさがあふれている。そのことが、私にシャッターを切らせるきっかけになりました。

**飯田** アフリカのような場所では、子どもたちが小さい頃から働いていることが多い。けれども彼らは、そのことを苦にしていらないように見えます。

**竹沢** そこに日常が存在していると感じます。旅をしていると、私たちが会おうのは非日常的な瞬間なのです。山口さんが撮られた光景も、私たち日本人には非日常的な風景である。けれども、彼らにとっては、これが日常である。その反転性のようなものが、この写真に出ていると思います。

**飯田** 次は竹沢さんが撮影された写真です。

**山口** これは何かの儀式ですか？自然光だけで撮られているのですが、女の子たちの目がキラッと輝いている。表情が柔らかく、この人たちの暮らしぶりも、なんとなく分かる。

**竹沢** グアテマラのカソリック教会のミサです。私が入る写真の撮る時に、一つだけ気をつけていることがあって、それは自分の心をなるべくない状態にするということなのです。そして自分の心に生じた波紋を表現する。最初から自分の心が波立っていると、その波紋が現れないように感じるのです。自分の心をなえた状態にすることで、相手の心が正確に自分の心に伝わってくるのだと、そういうふうにつまえています。



**飯田** 写っている少女の視線も印象的ですし、人々の衣装の色合いにも、日本にはない異文化を感じます。  
**小澤** 宗教というのは国ごとに様式がまるで違いますから、日本にいる時の気持ちでいると、まるで歯が立たないことがあります。私は宗教の場の撮影については、かなり神経を使っているのですが、うるまさんは、どのようにお考えですか。

**竹沢** 気をつけています。気をつけていないと、とんでもないことになる場合があります。けれども逆パターンもあります。気を使って撮っていたら、壇上から手招きされたり。それでもやはり、信仰というものは、人々にとってもっともセンシティブな瞬間ですから、そこにならずかと踏み入ることはしません。

**飯田** 山口さんはいかがですか。

**山口** 信仰の場を撮るといふことは、その人の心のなかに入るということです。それには、理解を得るために十分な時間をかける必要があると思います。

**竹沢** もう1枚、気になる写真があるのです。さきほど、今壇上にいる4人が並んでいる写真が撮影されましたけれど、このうち真ん中の写真家2名が、どちらも白い動物を抱いている。別に示し合わせたわけではないのですが、偶然なのか、それともこれ、白い最新式のカメラなのでしょうか。

**小澤** 北極で生まれた子犬と、砂漠にいるデザートフォックス。2人がいる場所の気温差って、凄いですよね。

**竹沢** 80度くらいあるのではないのでしょうか（笑）。

**飯田** 本日はありがとうございました。

（記／出版広報委員・池口英司、  
 撮影／出版広報委員・桃井一至）

**JPS 公式 YouTube チャンネル**

「フォトフォーラムオンライン」など、  
 動画コンテンツがご覧いただけます。

<https://youtu.be/j-tpwI7sWwQ?si=jTgT3CIPD1BGXCJJ>





# 第6回「笹本恒子写真賞」受賞記念展

高橋宣之写真展「神々の水系」

2023年12月21日(木)～27日(水)  
アイデムフォトギャラリー「シリウス」

第6回「笹本恒子写真賞」の受賞を記念した、公益社団法人日本写真家協会主催・高橋宣之写真展「神々の水系」を2023年12月21日(木)から27日(水)まで、アイデムフォトギャラリー「シリウス」(東京都新宿区)で開催した。

笹本恒子写真賞は、日本写真家協会が報道写真家として活躍した笹本恒子氏の業績を顕彰し、その精神を受け継ぐ写真家の活動をたたえ、助成することを目的として創設し、今年度が6回目となる。

今回の受賞者は高橋宣之氏で、高知県の仁淀川水系という限定的なテーマを、数十年にわたって深く掘り下げること、ネイチャーフォトの枠を超えて、地域文化や生きものの生態までもを表現し、ハイクオリティな写真の世界が凝縮された作品群に対して贈られた。

「この写真群のテーマは『水』ということになるのですが、私の被写体となっているものは、水そのものだけではなく、一定の時間を周期にして、次々に変わっているのです。川の流れに沿って遡って行けば、そこには森があって、キノコなどの様々な植物が生えていて、鳥などの様々な生き物がある。それも私の被写体になります。水を中心にした巨大な世界がそこにあるのです。そういった具合ですから奥が深く、それでもそれが良かったのかもしれませんが、何しろ、撮っていて飽きることがありませんから」と、高橋氏はこのテーマを撮り始めたきっかけを語る。

「私は風景写真家ではありません。それでは自分が求めているものは何なのだろう?と考えることがあるのですが、単なる美しさではない、小さな生き物、水滴などはかないもの、そのようなものを撮り続けているうちに、私が撮っているのは『不思議さ』なのか、と思うようになりました。森の不思議さであるとか、あるいは変貌する水の不思議さであるとか、ということです」——それは生命体が対象ということですか。それとも生命体に限らないのか……。

「限ってはいません。無機質なものもあります。水の結晶も被写体になります。その水が溶けて大気の中に戻ってゆく、すると今度は大気にレンズを向けることになります。この写真群を、私は『神々の水系』と名



受賞記念展の案内状 DM

付けましたが、それでは神々とは何なのか。地方の集落に行くと、祠があって神様がいらっしゃる。けれどもそこに住まう人が歳を取って、やがていなくなると祠が朽ち果ててしまうことがあるのかもしれない。そうすると、祠にいらっしゃった神様はどこに行くのか。水が蒸発して水蒸気になり、それが雲を作って、再び雨を降らせる。その輪廻には膨大な時間が必要されています。それと同じように、人々の暮らし、輪廻にも膨大な時間が必要されているのだと思います」——そう考えてゆくと、水を始まりとして、すべてのものが被写体になるのかなと感じます。

「そうなのかもしれません。私の撮影は海から始まって、川を遡り、人々の暮らしを撮るようになった。この数年間、私は人々の暮らしを撮っていましたが、写真を撮る対象はまた変わってゆくのだと思います。人間の暮らしにしても水の存在を切り離して考えることはできないわけです。そうして考えると、私は面白いテーマを見つけたものだなと思います」——きりが無い……。

「ありません(笑)。私が写真を撮っているのは、地元の仁淀川の流域だけなのですが、それでも写真を撮り終わることはできないと感じています」

高橋氏は穏やかな口調で、自身の仕事をそう語る。高橋さんが地元の「水」を撮り始めてもう40年という時が流れたというが、まだこれからも変わることなく、撮影が続けられそうな気配だ。

(記・撮影/出版広報委員:池口英司)



会場、展示作品前の受賞者・高橋氏 2023.12.25



写真展は新宿区の「シリウス」で7日間にわたり開催



# 第18回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展

【東京展】2024年1月26日(金)～2月1日(木)

富士フィルムフォトサロン東京

【大阪展】2024年3月1日(金)～3月7日(木)

富士フィルムフォトサロン大阪

第18回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展が、公益社団法人日本写真家協会の主催により、富士フィルムフォトサロンで開催した。

## ◆名取洋之助写真賞：中条 望

### 「GENEVA CAMP -取り残されたビハール人-」

『深夜特急』（沢木耕太郎著）に影響を受け、世界を旅しながら難民キャンプや辺境に生きる人々取材してきた中条望氏。会場に展示された30枚の写真からは、人々の遅しさと同時に強い不安感が伝わってきた。

2012年、初めて「GENEVA CAMP」を訪ねた時の印象を「時間から置き去りにされた場所、カラーの世界に突然現れたモノクロームの区画」と表現された。

「キャンプは小さな集団なのでよそ者は好まれません、何度も通い『あなた達を知りたい、状況を伝えたい』と繰り返し伝え、少しずつ受け入れてもらいました」。居住環境はコロナ以降、さらに悪化した。「武装警察の巡回が増え取材が難しくなるなかで、モスクの中で祈る人々に心を慰められました。その姿は震えるほど美しく、許可を頂き撮影出来たことがとても嬉しかった」

今後の抱負を伺うと、『人間として暮らせる場所が欲しい。私たちの現状を伝えてほしい』と訴える彼らの言葉がずっと胸に響いています。窮状だけではなく、彼らの尊厳も伝えたい。ビハールの人々が、バングラデシュ人として暮らす姿を見届けるまで撮影を続けるつもりです」と力強い言葉が返ってきた。

## ◆名取洋之助写真賞奨励賞：齊藤小弥太

### 「土地の記憶」

移転の進む一畝田集落（成田）の日々取材した齊藤小弥太氏のモノクロームの作品には、諦観を暗示する静かな時間が流れていた。

「各地の山城の撮影をしていた時に、一畝田集落の住民が成田国際空港拡張工事のため、移転していると知りました。暮らしが息づく家や田畑が数年後には失われてしまう。写真家として記録しなければと思いました」「土地の人々の話を聞くことを優先したため、3時間話を聞いて、1枚も写真を撮らずに帰ったことも

ありました」「そんな時、忘れられない言葉を聞きました。

陽が傾き帰ろうとしている私に、『心が貧しくなってしまう』とある人がポツリと呟きました。

先祖が植えた木々や家族の記憶、幼馴染の友人など、金銭に代え難い存在を失ってしまう悲しみを表現したのです」「今では写真の中にしか存在しない風景も多くなりましたが、故郷を想う気持ちを尊重して、最後の1人まで取材を続けます」と今後の決意を語ってくれた。

## ◆名取洋之助写真賞奨励賞：小山幸佑

### 「私たちが正しい場所に、花は咲かない」

小山幸佑氏のイスラエルとパレスチナの作品構成はユニークだ。ポートレートや壁の写真、隣国の人々にあてた手紙の写真で構成されている。応募の時の心境は、手紙の複写写真があるのでどう評価されるか不安が少しあったという。

「最初は単なる旅行で訪れたのですが、現地の人々と交流を重ねるうちに、『イスラエルとパレスチナ問題』を写真で考えようと思い、2018年からこのプロジェクトを始めました」。取材を拒否されても根気よく声をかけ続けると、取材協力者が現れ、その方が次の人を紹介してくれるなど、好循環が生まれたという。

「偶然出会った老女と話をしている時、彼女はこう私に告げたのです。『この場であなた自身が見て感じたことこそが真実』。その言葉は取材を続ける糧となり、今も私の中で生きています」

「イスラエルとパレスチナの大規模な衝突が起き、心を痛めています。どちらが正しいかよりも、まずは今苦しんでいる人々に目を向けることが最優先です。今後も両国の市井の人々の想いを聞き続け、きちんとした形で残せるようにしたいと思います」

静かな語り口の奥に芯の強さを感じた。



展示写真を前に、来場者と生き生きと会話する受賞者3名の姿に、写真展の魅力を再認識した。

会場で行ったトークイベントでは、多くの聴衆が熱心に耳を傾けた。「受賞者の話を聞いて、展示写真がさらに身近になった」と聴衆の一人が呟いた。現地の人々と真摯に向き合い、そこから生まれた彼らの言葉には、受賞写真と同様の強い説得力があった。

（記・撮影／出版広報委員：飯塚明夫）



展示会場での受賞者、左から齊藤小弥太、中条望、小山幸佑の3氏



受賞作品を見る来場者（2024.1.27 富士フィルムフォトサロン東京）

# 第5回「おやこ写真教室」開催

2023年10月22日(日) LUMIX BASE TOKYO

教育推進委員会

2020年に始まった「おやこ写真教室」の第5回目は、賛助会員パナソニック エンターテインメント&コミュニケーション株式の協力のもと、6組12名の親子が、東京・青山にあるLUMIX BASE TOKYOで写真を楽しんだ。

今回は、パナソニック エンターテインメント&コミュニケーション株式の協力で小型ミラーレス一眼「LUMIX G100」を保護者に、「LUMIX LX9」を子どもに貸し出し、撮影を体験してもらった。また開催場所もLUMIX BASE TOKYOをお借りして行った。

席に着いた瞬間から子どもたちはカメラに興味津々。スマートフォン以外では本格的なカメラを触るのも初めてという子どもも多かった。はじめは撮り方や操作で慣れない部分もあったようだが、使い方の説明を受けるとすぐに扱いにも慣れ、どんどん撮影にのめり込んでいった。講師の今浦友喜委員の座学ではカメラの使い方の他にも、被写体のカッコいい捉え方や、印象的な写真に仕上げる方法など、より写真を楽しむためのコツも紹介した。次に場所を都立青山公園に移動して野外撮影実習を行った。天気にも恵まれ、良い光が差し込んだ。参加者は座学で学んだ光の方向性を意識して色々な角度から被写体を捉えていた。地面に寝そべて超ローアングルで小さな昆虫を撮影する参加者、木の幹にへばりついてダイナミックな視覚効果を狙った参加者、親子でお互いを撮りあう参加者、逆光で印象的になるポジションを探したり、走り回る子どもの流し撮りにチャレンジするなど、撮影に創意工夫が見られた。委員会メンバーがシャボン玉を飛ば

すと、前ボケや後ボケを利用してドラマチックな写真に仕上げている。記録メディアはNextorage株式からお借りした128GBの大容量SDカードを使用しているため、思う存分シャッターを切ってもらえた。公園での撮影は約1時間ではあったが、参加者からは笑顔が絶えず、本当に楽しそうに撮影している姿に、写真の本質的な部分が見えたひとときだった。

その後は講評会。数百枚撮った写真から参加者自身でセレクトした珠玉の1枚は、公園で撮ったとは思えないほど魅力的で、幸せな時間を詰め込んだ作品ばかりだった。講評会後にはエプソンのプリンター「EW-M873T」で作品をプリント。普段、スマホなどの画面で写真を見ている子どもたちには、形あるプリントというスタイルで見ると写真の良さも感じてもらった。写真には多く接する機会はあるが、カメラやプリントといった写真の本質的な部分からは遠くなってしまった昨今、本格的なカメラに触れ、写真の撮影に集中した参加者の瞳からは、楽しさと感動があふれ出ている。やはり実際に見て知っていること、自身で体験することがどれだけ大切かを改めて感じることができたイベントとなった。

(記／教育推進委員・今浦友喜、  
撮影／教育推進委員・坂井田富三)



光の見つけ方を教える講師の今浦友喜委員



お互いの写真を見せ合う親子



最後は参加者全員の作品を並べてプリント鑑賞会



公園では、各自の視点で見つけた被写体に夢中



小さな虫を狙って、ローアングルに挑戦!



集合写真に誘導する水咲奈々委員



## メディアを元気にしてくれた時代のプロデューサー 篠山紀信さんを回想して

勝又ひろし(元『アサヒカメラ』編集長)

2024年1月4日、篠山紀信さんが逝去されました。83歳でした。「篠山紀信とはどのような写真家か」という位置づけは立場によって、また時代によって変わってきます。没後すでに多くの方面から、この不世出の写真家についての論評が寄せられました。私がまたそれを繰り返すのも屋上屋を架すことになるので、ここでは篠山さんと『週刊朝日』、『アサヒカメラ』の話をさせてください。それは篠山さんの普段の活動とは違う意味合いを持っていました。『週刊朝日』では素人さん相手の仕事をし、『アサヒカメラ』では「ギャラは度外視」でやったということです。

### ◆『週刊朝日』と篠山さん

1978年4月から97年10月まで、同誌の表紙を担当し、竹下景子で始まり佐藤藍子で終わるまで、延べ800人を超える俳優など著名人が登場しました。今、雑誌の表紙に旬の人を登場させる場合、出演番組や映画などの宣伝と絡めたタイアップがほとんどだと思います。当時はまだ雑誌メディアに勢いがあり「あの篠山紀信に撮ってもらえる」となれば、表紙担当者は人選に困らなかったはずです。

女子大生表紙シリーズは「女子大生が今は旬」という篠山さんの提案で1980年に宮崎美子さんから始まりました。ここから多くのシンデレラストーリーが生まれたことは言うまでもありません。素人モデルでは短時間で済ませる撮影ですが、数枚で終わることも。宮崎さんの応募写真は彼氏が撮ったもので、「それを超えることはできなかった」という言葉も残っています。

篠山さんは『週刊朝日』の表紙を50年は続けるつもりでいました。97年に当時の編集長が安野光雅さんの絵に変えたいので来年春まででお願いします、と切り出したところ、その場で「すぐに辞める」と断りました。篠山さんはその理由を私に「誰か若い写真家に交代する、というなら納得したけどね」。週刊誌は出る人も出す人も「旬」という気概、プライドでやっていたので、すでに巨匠、老大家と言われている人が後を継ぐのは理解しがたかったのです。

### ◆『アサヒカメラ』と篠山さん

私は編集長、副編集長として10年ほど『アサヒカメラ』に在籍しました。篠山さんとは副編集長時代は木村伊兵衛写真賞選考会で、編集長時代はグラビア掲載でお付き合いさせてもらいました。

2024年で第48回を迎える同賞の選考委員を通算17

回務めています。第19回でいったん辞めたのですが、その理由が篠山さんらしいです。その年は森村泰昌さんの作品が狙上に載り、「絶対森村さん」と一推しました。しかし大勢が「写真でなく現代美術」ということで選ばれず、嫌気がさして選考委員を降ります。テレビ番組などで新進写真家を取材していた篠山さんは、常に新しい写真の潮流を模索していました。

復帰した第26回でその力が炸裂します。長嶋有里枝、蜷川実花、HIROMIXの3人同時受賞という前代未聞、これからも起こりえない選考は、篠山さんの「3人いっぺんにいきましょう！」というノリで起こったものです。編集長が慌てていたのをよく覚えています。

『アサヒカメラ』のグラビアは篠山さんにとって遊び場、自由に活動できるプレグラウンドでした。普段は様々なクライアントから被写体を指定される仕事が本分で、篠山さんもそれを完璧にこなすことを矜持にしていたと思います。『アサヒカメラ』では「面白いことをやるならギャラはいらない」(実際は払ってます!)という姿勢で、色々誌面を飾ってくれました。オリンピック、バレエ、歌舞伎など。3.11被災地の作品は、「こんなのは『アサヒカメラ』しか載せてくれないからね」と語っていました。

言葉のセンスも抜群で自分の表現活動を的確に言語化できるため、インタビューは本当に楽でした。こちらがまとめた原稿が気に入らない時は、自分で書くこともありました。そしてなによりも篠山さんと仕事をすると、こちらが元気になるのです。『アサヒカメラ』を励ましてくれただけでなく、写真界のことも常に心配していました。単に写真を撮る人ではなく、時代のプロデューサー、メディアという御輿の担ぎ手だったのだと思います。ご冥福をお祈りします。



第26回木村伊兵衛写真賞授賞式で、3人の受賞者(長嶋有里枝、蜷川実花、HIROMIX)、荒木経惟さんと。2001年4月24日 写真提供:朝日新聞社

# 2023年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告

共催事業：専修大学、公益社団法人日本写真家協会

2010年専修大学が開講した「フォト・ジャーナリズム論」(旧：報道写真論、山田健太教授担当)は、公益社団法人日本写真家協会との共催事業であり、当協会は、2011年から講師を派遣してきた。この講座は「学生たちの真実を見抜く目を育て批評力と行動力を養うことを目的とし、メディアの第一線で活躍する写真家や実務者の実作と体験談をもとに、いまメディアの現場で何が起きているかを理解してもらうこと」を方針としている。

2023年度は小松由佳と竹田武史両氏を派遣した。会場は、川崎市多摩区の専修大学生田キャンパス。

## ●小松 由佳

2023年4月11日～5月23日(6回)

メディア志望者が多いという学生たちを前に、「フォト・ジャーナリズム論」の講義を担当させていただくという僥倖。恐縮しつつ、叩き上げのフリーランスフォトグラファーとして、ほぼ独学で学んできたあれこれを、惜しみなく話した。また一方的な話だけでなく、学生からの議論や思考の熟成が行われるような、自由闊達な場を目指した。

### ①「私とフォト・ジャーナリズム ～シリア難民を見つめて～」

どのようにこの道に出会い、取材してきたか。また6年前から恒例の「子連れパニック取材」について。

### ②「写真で伝えるということ ～フォト・ジャーナリズムの意義と課題～」

写真で何かを伝えるとはどういうことなのか。伝え手や、受け取る側には何が求められるのかを考えた。

### ③「撮れない、を、いかに撮るか① ～2022年のシリア取材から～」

政治や宗教文化、被写体の意思などによっては、容易に撮れないものがある。それらをどのように受け止め、伝えるためにどう打開点を探れるか。2022年に行ったシリア取材の経験を交えて考えた。

### ④「撮れない、を、いかに撮るか② ～取材における事件、葛藤、課題～」

取材中に起こった数々の事件や葛藤について紹介し、伝えることの意義と報道倫理、自身の視点を養うことについて考えた。

### ⑤「フォト・ジャーナリズムは、世界をどう変えることができるか ～報道とその可能性～」

ジャーナリズムが果たしてきた役割を紹



キャンパスで講義中の小松由佳氏



介。その上で、写真で伝えることが、どのように何を伝えていくのか、自分の経験も交えて考えた。

### ⑥「フォト・ジャーナリズムと私の経済論 ～それでも続けていく理由～」

フリーランスのドキュメンタリー・フォトグラファーとして、私は現在どのような仕事をし、どのように収入を得ているのか。経済的不安定さのなか、それでも取材や発表を続ける背景や覚悟について、先輩たちからいただいた印象的な言葉と共に紹介した。

講義中は、学生からのその場の声として言葉が出ないものの、講義後に提出してもらうリアクションペーパーには、それぞれの熱意がびっしりと書かれていた。最後の講義では、人物を捉えた写真集をそれぞれ選んでもらい、ストーリーや構成から写真を読み解くという課題も出した。

学生たちに伝えたかった最たることは、時代の変化に学び、自身で哲学せよ、ということだ。自分の足で歩

#### 小松 由佳(こまつ・ゆか)

1982年秋田県生まれ。幼少時より山に魅せられ、2006年、世界第二の高峰K2(8611m / パキスタン)登頂など。植村直己冒険賞受賞。次第に風土に根ざした人間の営みに惹かれ、写真家に転向。シリアの紛争によって多くの難民が生まれる光景を目にし、2012年からシリア内戦・難民を取材。著書に『人間の土地へ』(集英社インターナショナル)。第8回山本美香記念国際ジャーナリスト賞受賞。シリア人の夫と2人の子供と東京都在住。JPS会員。



き、自分の目で世界を見て、自分の頭で考えること。それに尽きる。「伝える」という価値と葛藤。その両側面を、学生と真剣に考え、共有した講義だった。

## ●竹田 武史

2023年6月6日～7月18日(6回+1)

約160名の受講者は、ジャーナリズム学科の学生の他、スポーツ、歴史、地理など様々な領域を専攻する学生たちである。したがって専門的な知識というよりは、写真を通してこの世界を理解するための幅広い視野、視点を提供したいと考えた。またコロナ禍中に内向きになったマインドを解放して、広い世界に興味を持ってもらえるような講義内容にしたいと考えた。6回を教室での講義に、1回を指定した写真展の見学に当

てた。  
第1回目は、「旅の魅力」と題して、私が写真家を志す直接的なきっかけとなった、学生時代に1年間休学して旅したオーストラリアの体験を話した。日本を一步外へ出ると、国や地域、信仰や信条によって自己を定義する世界が驚くほど多様であること、世界の多様さそのものへの理解を促した。



キャンパスで講義中の竹田武史氏

第2回目は、「写真の魅力」と題して、私のライフワーク作品『長江六千三百公里をゆく』から写真を紹介した。写真が本質的に「記録する」メディアであること、写真を保存して、伝え続けることの意義を問うた。

第3回目、第4回目は、この世界を点ではなく、点と点とを結ぶ線で理解することの大切さを伝えた。中国をテーマにした取材作品を紹介しながら、「地理的な線」と「時間的な線」をそれぞれ体感してもらった。

第5回目は「写真で描く心象風景」と題して、私の作品『シッタータの旅』を紹介した。この作品は底本となる物語の世界を、旅と写真で再現したものである。まず写真だけを、次に物語の言葉を添えて、さらには解説を加えて3度見返してもらった。3つのステップを踏むことで、写真がいかに内面と現実とを結ぶ像であるかということ、心象風景ではあっても記録性に拠ること、写真ならではの表現に繋がることを感じてもらうことができたと思う。

第6回目は「この世界をどう生きるかQ & A」と題して、学生が事前に提出した質問事項に答えさせてもらった。旅に関する質問が最も多く、次に写真、人生や進路、お金と続いた。これまでの講義の消化不良を解消



### 竹田 武史(たけだ・たけし)

1974年京都市生まれ。東京在住。同志社大学神学部卒業。大学在学中に1年間休学し、オーストラリア大陸を放浪一周する。帰国後は写真家・井上隆雄氏のアシスタントを務める傍ら、1997年から5年間、日中共同研究プロジェクト「長江文明の探求」の記録カメラマンとして中国各地に取材を行う。雑誌、広告、プライダル等を中心に活動を行う一方で、ライフワークとして中国、アジアへの旅を続ける。主な著書に『長江六千三百公里をゆく』『桃源郷の記～中国パーシャ村の人々との10年』『茶馬古道の旅～中国のティーロードを訪ねて』など。2010年コニカミノルタFOTOPREMIO 大賞、2014年京都府文化奨励賞を受賞。JPS会員。

し、写真への理解がより深まったのではないと思う。

第7回は写真展見学だったが、写真展に行くこと自体が初めてという学生が多かった。スマホでサムネイル画像を流し見して日常を送る彼らにとって、魂を揺さぶられる貴重な体験となったようだ。

コロナ明けのためか、やや消極的な印象を受けたが、リアクションペーパーにはしっかりと意見が述べられ、熱が感じられた。メディア関係、公務員、スポーツ関係への就職を希望する学生が多くみられる一方で、「卒業後、ワーキングホリデービザでオーストラリアへ行く決心がつききました！」と決意表明してくれた学生もいた。それぞれの前途にエールを送りたい。

最後に、160人もの学生の前で話す貴重な機会を用意してくださった山田先生、講義を担当してくださった植村先生、助手の宮崎さんに心から感謝申し上げます。

(写真提供/専修大学 構成/小池良幸専務理事)

講師派遣歴	
2011年度：桑原史成	
2012年度：長倉洋海・英 伸三	2013年度：宮嶋茂樹・樋口健二
2014年度：大石芳野・山本皓一	2015年度：清水哲朗・石川文洋
2016年度：桃井和馬・石川 梵	2017年度：宇井眞紀子・広河隆一
2018年度：公文健太郎・竹沢うるま	2019年度：小松健一・前川貴行
2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため休講	
2021年度：渋谷敦志・小澤太一	2022年度：高橋智史、米田堅持

(敬称略)

# セミナー研究会レポート

## ◆写真展事業委員会報告◆

### ポर्टフォリオレビュー

#### ～ JPS 会員写真家が丁寧にアドバイス～

2023年10月28日(土) 14:00～16:00

(株)ケンコー・トキナー本社7階セミナールーム

参加数：16名

講師：写真展事業委員会・飯田、加藤、川村、斎藤、奈良岡、本間、松井  
理事・著作権担当 吉川信之

JPS 展会期中に開催して好評であった「ポर्टフォリオレビュー」を JPS 展作品募集の前に開催した。また吉川信之理事のミニセミナー「知っておきたい!著作権と被写体の権利」も行った。これまでは募集開始日前のイベントは行っていなかったが、応募者増に向けて JPS 展の告知宣伝、写真愛好家の声を聴くことを目的とした。なお今回のレビューは、審査とは一切関係ないことを参加者に周知させている。



レビューは前回を踏襲して、4テーブルを用意し講師2名で1テーブルを担当、参加者4名が作品を並べていく。決められた時間内で参加者は3組の講師からレビューを受ける。講師が変わるので参加者は多様なアドバイスが受けられる。参加者からは「もっと詳しく指導してほしい」、「熱心に指導してもらった」、「多様な講師から多様なアドバイスもらった」、「組み方の姿勢や考え方の勉強になった」などのアンケート回答があり、講師からは「力ある作品が多くて活発に発言してくれた」、「お互いの作品を語り合いたいようだ」、「後押ししてあげたい」という感想があった。

著作権担当の吉川信之理事によるミニセミナーでは写真著作権をわかりやすく説明し、被写体との問題も事例をプロジェクトで映して話を進めた。また質疑応答ではデジタル加工や画像生成 AI についての質問が複数寄せられ、アマチュア写真家の間でも新技術に関心が広がっていることに驚かされた。

今回は1人10枚という枚数と時間割振りに課題が残った。また60歳以上の年代がほとんどだったので若年層にも参加してもらえるようにしていきたい。会場提供の(株)ケンコー・トキナー様とお手伝いくださった田原栄一会員には感謝したい。

(記/川村容一、撮影/斎藤大地)

## ◆関西地区委員会オンラインセミナー報告◆

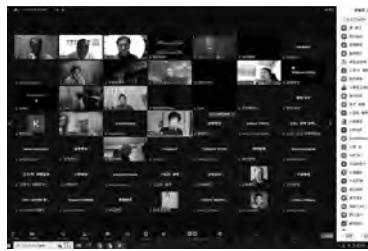
### 写真家のための「電子帳簿保存法」セミナー

2023年10月30日(月) 18:00～20:00

オンライン開催(Zoom) 参加数：56名

講師：上西 知 (税理士/Team 創愛・上西会計事務所 所長)

2023年10月30日、関西地区委員会主催による「写真家のための『電子帳簿保存法』セミナー」をオンラインで開催した。



オンラインの特性を生かし前日まで申し込みを受けることで71名の参加申し込みがあり当日ログインした会員は56名だった。

講師は前回、インボイス制度についてお話していただいた上西 知先生に依頼。

上西先生は言葉が分かりやすく専門的なこともかみ砕いて説明して下さった。制度自体税務に携わっている人間でないとなかなか理解しにくいものではあるが、ポイントとしては税理士と契約していない会員でも、時間をかけて使い慣れた Excel や単にファイル名に日付、金額、取引先の名前を付け、保存するだけでも対応は可能ではないかということを示していただいた。

ただし2年前の売り上げが5,000万円以下の事業者には即時の対応が求められていないという側面もあり、すぐに影響のある会員は多くはないのかもしれない。

しかしファイル名など工夫しフォルダにまとめて保存し提出を求められれば対応できるようにしておいた方が良いと判断する。

また、この制度自体の運営がはじまってから軌道修正も行われる可能性があるようで、管轄の税務署でどう運用されるのか、今後に含みを持たせた。質疑応答では運用の解釈や会員も直面しているインボイス制度についていくつかの質問に上西先生は積極的に応えられていた。関西地区委員会で行う「写真家のための経営学」のシリーズは今回で3回目であったが、会員の有益なセミナーにつながると思うので続けていきたい。

(記/植村耕司、写真/オンライン画面)

## ◆第1回写真保存センター委員会セミナー報告◆

### 「一歩進んだ画像保存術、 プロが勧める NAS 活用法」

#### ～写真保存センター NAS 導入事例から～

2024年1月24日(水) 14:00～16:00

JCII ビル6階会議室及びオンライン 参加数：88名

講師：Synology 社担当者

写真保存センター委員会・高村 達、井上六郎

日本写真保存センター(以下、センター)は、収集したフィルム原板をデジタルカメラやスキャナーで複写し、デジタル化した画像をNAS(ネットワーク接続型記録装置)機器に保管している。今回のセミナーでは、このNAS機器センター導入にあたり協力頂いたSynology社から2名を招き、委員2名も交えて、センターで行うフィルム原板デジタ



ル化の方法や、デジタルデータの保管機器としてのNAS  
利用法を、初心者向けの解説をした。

2か月前より協会 HP やメール、WEB 媒体を通じた告知  
を行い、会員 21 名、一般 38 名の来場者と会員限定オンラ  
イン 29 名で、計 88 名の参加となった。来場者アンケート  
46 名分の結果から、セミナー情報は、JPS の HP やメール  
43%・WEB 媒体 39%・他団体等 15%で、セミナー満足度  
については 4.3 点（5 点中満点）の結果を得た。

開催告知の段階で、センターが「令和5年度文化関係資  
料のアーカイブの構築に関する調査  
研究」を文化庁の  
委託事業として行  
っていることを説  
明しており、アン  
ケート記述回答に  
は「写真家たち自  
らがアーカイブを  
していく時代、こ  
れだけの参加者が  
集まるほど関心  
が高いことに感銘  
を受けました」や  
「フィルムのデジ  
タル化に関しては  
高性能スキャナー  
やデュープリケー  
ターを持たない  
JPS の会員の皆  
さんが一番困って  
いるのではない  
かと思う」など、  
フィルム原板から  
デジタル化、アー  
カイブ化に対する  
課題を抱え、そ  
の対策を考える  
来場者が多数いた  
ことが分った。写  
真保存センター  
委員会では、同  
じ課題に直面す  
る写真家や団体  
に対し、原板の  
デジタル化や保  
管方法など技術  
面の情報を発信  
し続けることで、  
参加者、他団体  
のみならず、社  
会的貢献にもつ  
ながることが、  
今回のセミナー  
開催で明らかにな  
った。



（記／井上六郎、撮影／西村 広）

### ◆国際交流委員会ウェブサイト企画◆ 「表現者たち」

JPS ホームページの記事から抜粋して紹介する。

Vol.14

#### 「Only after we run, can we know the joy of wind.」

Sails Chong（セルス チャン）庄 揚帆

子どもの頃から弁護士を目指した私は、大学受験に見事  
に敗戦してしまい、思いもよらない日本語学科に配属されま  
した。しかし負けず嫌いな性格もあり、自慢できる成績で大  
学を卒業、伊藤忠商事に就職し一営業マンになりました。  
ピカピカの新人でありながら接待や出張に励み、そこそこの  
実績も残しましたが、先輩の背中を見ながら何か違う気が  
して、これは私の望む生涯事業ではないと、周りの猛反対  
を完全無視して退社しました。

進路を考え直し大胆な決断をしました。適正露出さえも  
知らなかった私が、趣味である撮影を仕事にする事に踏み  
切ったのです。社員を雇い、全財産を賭けてスタジオまで  
立ち上げました。なんとかなるでしょう、いや、なんとかす

るしかない、売  
り上げに頭を悩ま  
せながら、撮影の  
基本を勉強する  
日々を送りました。

友人から結婚式  
前撮り撮影の依頼  
があった事をきっ  
かけに、ウェディ



© Sails Chong

ング撮影の業界に目を向けました。特に写真が上手い訳で  
もなかったのですが、中国における 40 年ほど前のベビーブ  
ーム時代の追い風に乗って、殺到した結婚前撮り撮影の依  
頼にいやになるほど忙しくなりました。毎日他社の行う撮影  
と同じロケーション、同じ流れ、同じポーズ、同じレタッチ  
をくりかえし、まさにシャッターロボットでありました。再び  
私は違うと思いました。これは大手商社を辞めてまでやりたい  
仕事ではない、こんな撮影なんかちっとも楽しくない何  
にもならないと思いました。変わりたい、いや、変わるのだ！  
と。でも何を、どうやって？（中略）

今年で 41 歳となります。もう、プレも妥協もしない。他  
人から撮って欲しいものでもない、自分が撮りたいものでも  
ない、自分が撮影という手段を持って何を表現しようとする  
のが切り札だという事に気づきました。フォトグラファーと  
してベテランかもしれませんが、アーティストとしてはまだ  
子どもです。結局、今まで自分は何も分っていませんでした  
が、これからです。AI 撮影や動画が活発化している今、  
逆に撮影やアートを考え直すチャンスかもしれません。機械  
でなく人間がシャッターを切っているからこそ、間違いもす  
るし、人間臭さがある面白い。これからも、人間として、  
何か世の中に残したいと思うのです。

次の目標があります。人間の器は、夢の大きさに決まるみ  
たいですが、監督として映画業界にデビューするのもありか  
もしれません。なんか楽しくなってきました！もっと好きにな  
りたい、撮影を、撮影をする自分も。

#### 【プロフィール】

Hasselblad グローバル・アン  
バサダー（2014～2019）

broncolor グローバル・アン  
バサダー（2015～）

HUAWEI カメラソリュー  
ション顧問（2017～2019）

Phase One グローバル・アン  
バサダー（2019～）

Aputure グローバル・アンバ  
サダー（2021～）

ニューヨークファッションショー・オフィシャルフォ  
トグラファー（2018）

カンヌ映画祭・オフィシャルフォトグラファー（2023 & 2016）  
作品集（Sails Chong, The Best Collection）日本で出版（2017）



Sails Chong 庄 揚帆



協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載いたします。  
(2023年7月～2024年1月)

- ①発行所
  - ②発行年月
  - ③サイズ  
(タテ×ヨコ)、頁数
  - ④定価
  - ⑤寄贈者
  - ⑥電子書籍ストア
- 本紹介／出版広報委員・池口英司



鉄道写真 ここで撮ってもいいですか

渡部史絵、結解 学

- ①オーム社 ②2023年7月
- ③18.9×12.8cm、184頁
- ④1,800円 ⑤結解氏

「撮り鉄」のマナーがマスコミに採りあげられることが多い昨今、駅や線路際での撮影のどの行為が罰則の対象になるかを検証したガイド。行為の禁止理由が明記されており、一読しておけば、以後の撮影を不安なく続けられそうだ。



うつろふ

安念余志子

- ①風景写真出版 ②2023年8月
- ③18.2×25.6cm、64頁
- ④2,800円 ⑤安念氏

水漏れ日、散りゆく花、水紋など、著者が「二度と同じ光景には出合わない」と語る情景には出合わない」と語る情景を集めた風景写真集。日本の風景の艶やかさ、懐かしさを実感できる。何気ないワンカットにも、撮影には膨大な時間が費やされていていそうな気配だ。



1970年代～80年代の鉄道 第2巻 国鉄列車の記録 [北海道編]

写真・諸河 久、解説・寺本光昭

- ①フォト・パブリッシング
- ②2023年9月 ③25.7×18.2cm、176頁
- ④2,700円 ⑤諸河氏

国鉄（日本国有鉄道＝現在のJRの前身）がもっとも活力にあふれていた時代に、北海道で撮影された写真を集める。オーソドックスな写真にこそ、後世に伝えるべき情報は多い。本書に登場する車両も、今はほとんどが姿を消している。



日本舞台写真家協会 創立 35 周年記念写真展 1988-2023 私の一枚

会員 17 名、他 29 名

- ①日本舞台写真家協会 ②2023年8月 ③27×21cm、96頁
- ④—円 ⑤池上直哉氏

日本舞台写真家協会の創立 35 周年を記念して開催された写真展の図録。写真家それぞれが自選した掲載作品はどれも迫力に満ちている。人間の表情も芸術作品と同様の、高い価値が備えられた創造物であるに違いない。



秘境駅への旅

吉永陽一

- ①交通新聞社 ②2023年9月
- ③17.3×10.8cm、272頁
- ④1,000円 ⑤吉永氏

急速な過疎化によって全国に生まれた「秘境駅」、すなわち、極端に利用者数が少ない駅ばかりを巡った旅の記録。一つの駅に降りるために丸一日が必要になるという修行のような旅が続けられた結果、本書が誕生した。



元気？世界の子どもたちへ

長倉洋海

- ①朝日新聞出版 ②2023年9月
- ③29.2×21.5cm、112頁
- ④3,000円 ⑤長倉氏

アフリカ、中央アジアなどで撮影された子どもたちの姿を集める。高山、草原など背景はさまざまだが、子どもたちの笑顔は共通だ。ルビを入れた文章は子ども向けのスタイルだが、大人にこそ読んで欲しいメッセージが秘められている。



水辺の記憶  
— 1950年代を中心に —

菌部 澄

- ①JCI フォトサロン ②2023年10月 ③24×25cm、31頁
- ④1,200円 ⑤発行所

隅田川流域、潮来などで、主に1950年代に撮影されたドキュメンタリー写真集。2023年10月に開催された写真展の図録で、各写真に強いメッセージ性が備わる。1950年代の暮らしが、川や運河と深く結びついていたことを理解できる。





### Hakone Pirate Ship 箱根海賊船

高橋 渉

- ①旅行読売出版社 ②2023年10月 ③26.4 × 18.8cm、48頁  
④2,000円 ⑤高橋氏

芦ノ湖に浮かぶ「海賊船」の写真集。この湖で海賊船をかたどった遊覧船の運航が始められたのは1964年7月。今日では箱根のシンボルになった感がある。本書では現役で働く3隻の「海賊船」の内外を、四季の風景と共に紹介する。



### 東京都硫黄島・ 北海道国後島

宮嶋茂樹

- ①JCI フォトサロン ②2023年10月 ③24 × 25cm、31頁  
④1,200円 ⑤発行所

その立地ゆえに幾度も戦火に巻き込まれてきた2つの島の、1990年代、2000年代の情景を集める。2023年10月開催の写真展の図録だが、オールモノクロの写真には、ドキュメンタリー写真集と同様の、撮影者の鋭い視線が感じられる。



### つきをゆびさす

下瀬信雄

- ①東京印書館 ②2023年10月 ③19.5 × 26.5cm、208頁  
④6,000円 ⑤下瀬氏

被写体に花もあり、子どもたちの姿もあり、小動物の姿もあり、働く人の姿もありという写真集。とりとめのないようだが、「写真が『依代』となって」というあとのなごみの言葉に、著者の願いが込められているようだ。



### TOKYO JCT 東京ジャンクション

高橋康資

- ①日本写真企画 ②2023年9月 ③20 × 22.4cm、96頁  
④2,500円 ⑤高橋氏

首都高速道路のジャンクションの夜景を集める。コンクリートの塊、無機質の集合体の感もある空中の交差点は、オレンジ色の照明に照らされた時に、もう一つ別の表情を見せる。そここそが現代人が心を寄せる大伽藍なのだろう。



### 名列車編成表

はつかり・雷鳥・あずさ・しなの・踊り子  
結解 学

- ①天夢人 ②2023年12月 ③21 × 14.8cm、176頁  
④2,000円 ⑤発行所

昭和後期以降に運転された5本の国鉄・JRの特急列車について、その生い立ちと、時代ごとの編成の移り変わりを紹介するガイドブック。一見、無味乾燥にも思えるデータの集積体は、愛好家にとっては、かけがえのない宝の山となる。



### 住まいの建築史-近代日本編

文・内田青蔵、他、  
写真・小野吉彦

- ①創元社 ②2023年12月 ③21 × 14.8cm、363頁  
④3,200円 ⑤小野氏

現代に潮流が受け継がれている日本の住宅の建築様式について、近代以降の歩みを追った研究報告。360ページを超える「大作」だが、文章は平易で読みやすい。建築家、歴史研究家にとってのバイブルになるであろう1冊だ。



### 完全版・都電系統案内

諸河 久、江本廣一

- ①ネコ・パブリッシング ②2023年12月 ③25.7 × 18cm、146頁 ④2,400円 ⑤発行所

今は荒川線のみとなった都電だが、全盛期には41系統、総延長200kmを超える規模を誇った。本書ではその全系統の距離、経由地、運用された車両などを1系統ごとに解説。今日では謎も多くなりつつある都電の姿を解き明かす。



### 刻景

虫上 智

- ①虫上 智 ②2023年 ③14.7 × 20.8cm、48頁  
④-円 ⑤虫上氏

バス、鉄道の廃車体、用途廃止となった産業施設、空家となった古民家などを被写体を選び、人の営みはいかにあるべきかを問う。その姿ははかなくもあり、美しくもある。見る者それぞれが、それぞれの解釈を見つけて出したい。



平尾誠二 ラグビーを愛し、ラグビーに愛された男

岡村啓嗣

- ①神戸新聞総合出版センター
- ②2023年11月 ③30.3×21.7cm、216頁 ④4,500円 ⑤発行所

日本を代表するラグラーとして一時代を築いた平尾誠二氏の写真集。学生時代の姿あり、現役時代の試合風景あり、後年のポートレートありという盛りだくさんな内容。ファンは狂喜することだろう。もちろん、史料性も高い。

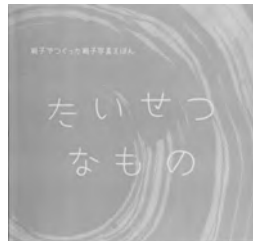


肖像の風景

奈良原一高

- ①JCII フォトサロン ②2024年1月 ③24×25cm、31頁 ④1,200円 ⑤発行所

音楽家、俳優など、各界の第一線で働く人々の肖像写真を集め、2024年1月から開催された写真展の図録。レンズの前に立つ人々の柔和な表情が印象的だ。シャッターが切られるまでに、長い時間が費やされているのかもしれない。



たいせつなもの

Photo・ブルース・オズボーン

- ①オゾン ②2023年11月 ③20×21cm、72頁 ④1,800円 ⑤発行所

家族全員で1枚に収まった楽しい写真が続々と登場する。人数・服装・ポーズさまざまといった具合で、次のページにどんな写真が登場するのか予測がつかないが、見る者を癒すことも、写真の大切な役割であることは間違いない。



第6回 JPS 会員有志関西展 作品集

JPS 会員 81 名

- ①第6回 JPS 会員有志関西展 実行委員会
- ②2024年1月 ③29.7×21cm、105頁 ④2,000円 ⑤四方伸季氏

第6回 JPS (日本写真家協会) 会員有志関西展の図録。ドキュメンタリー写真から、ファッション写真、風景写真という具合にジャンルは非常に多岐に分かれるが、いずれの写真も完成度は高い。自分だけの発見に出会おう。



散歩印象

馮 学敏

- ①在日華人攝影交流協会
- ②2024年4月 ③21×21cm、112頁 ④-円 ⑤馮氏

中国人写真家による日本の情景写真集。植物、門の構え、空などを被写体を選び、微妙な色使いの写真で、強い印象を与えてくれる。「散歩」というタイトルが与えられているが、撮影者の葛藤はいかばかりだったろう。



湖州印象

馮 学敏

- ①在日華人攝影交流協会
- ②2024年6月 ③21×21cm、112頁 ④-円 ⑤馮氏

『散歩印象』と同じ著者による、中国・江南地方の写真集。本書では「茶」をテーマに選び、茶摘みの情景、茶に関わる仕事に携わる人の姿などを収める。風景写真集としても、ドキュメンタリー写真集としても楽しむことができる。



1970年代～2000年代の鉄道 地方私鉄の記録 第1巻【南関東編】

写真・諸河 久、解説・寺本光照

- ①フォト・パブリッシング
- ②2024年2月 ③25.7×18.4cm、112頁 ④1,800円 ⑤諸河氏

1970年代以降に撮影された関東のローカル私鉄、および大手私鉄の支線の写真を収める。車両の標準化が進められたといわれる1970年代においても、今日の目にはずいぶんとバラエティーが豊かだ。今は姿を消してしまった車両も多い。



上田丸子電鉄

宮田道一、諸河 久

- ①ネコ・パブリッシング
- ②2024年2月 ③25.7×18.2cm、108頁 ④2,000円 ⑤諸河氏

長野県の上田市を中心にネットワークを築きながら、今は別所線1路線のみに規模が縮小された上田丸子電鉄の往年の記録。車両も、駅も、線路の配置も、今日からは想像が難しいような、バラエティー豊かな夢の国がそこにあった。

## 寄 贈 図 書

山田健太様…「くうき」が僕らを呑みこむ前に 脱サイレント・マジョリティー  
 黒田勝雄様……………浦安 汐風のまち 2003-2019  
 双葉社様……………監修・櫻井寛、作画・はやせ淳・新・駅弁ひとり旅 5  
 JAGDA 様……………JAGDA 国際学生ポスターアワード 2023 図録  
 JCI フォトサロン様……………田所美恵子・パリ ふたつの静物  
 ……井桜直美・ステレオ写真に浮かび上がる幕末・明治の日本 Part2  
 G.A.B. & 横山松三郎 & Others  
 ……吉田謙吉、名取洋之助、鈴木八郎、桑原甲子雄、林謙一、赤羽末吉・  
 写された外地  
 キヤノンマーケティングジャパン様……………キヤノンギャラリー 50 周年記念  
 写真、そして紡がれる物語

シュビーゲル写真家協会様…SPIEGEL 2023 70 周年シュビーゲル写真集  
 東京都写真美術館様……………風景論以後、ホンマタカシ・即興  
 ……TOP コレクション 何が見える？「覗き見る」まなごしの系譜  
 ……見るまえに跳べ 日本の新進写真家 vol.20  
 二科会写真部様……………第 71 回展二科会写真部作品集  
 日本写真作家協会様……………2023-2024 「JPA 作品集」  
 日本写真協会様……………日本写真年報 2023  
 日本風景写真協会様…四季のいろ 第 8 回日本風景写真協会選抜作品集  
 風景写真出版様……………古谷文俊・まためぐりくる春に  
 ……篠丸哲也・風薫る峰Ⅱ あちこち二人ある記  
 ぶんげん社様……………うつつゆみこ・WunderKammer  
 ……制作・PCT・写真 Sha Shin Magazine 5  
 日本肖像写真家協会様……………人像 2022  
 日本大学芸術学部写真学科様……………LOCUS2023

## 受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。



■第 44 回「巖谷小波文芸賞」受賞 2023年12月

受賞者：長倉洋海（1984 年入会）

写真絵本や著作で、世界各地の子どもの様子を日本の子どもに伝える活動に力を注いでこられた功績に対して。



■「令和5年度兵庫県文化賞」受賞 2023年11月3日

受賞者：森井禎紹（1994 年入会）

日本の伝統文化である「祭り」を題材とした数多くの作品を発表。独自の演出手法を著した「演出写真入門」は写真界において高く評価されている。兵庫県写真作家協会委員長等の要職を歴任するなど、後進の指導育成にも尽力したことに対して。



■2023 年度（第 11 回）「著作権貢献賞」受賞 2023年12月14日

受賞者：山口勝廣（1969 年入会）

日本の著作権界への貢献に対して。



■「令和5年度青森県文化賞」受賞 2023年11月3日

受賞者：和田光弘（1974 年入会）

ねぶた祭りを 60 年以上の長きにわたり撮影し続けており青森県の魅力を世界中に発信し、青森県文化の振興に大きく貢献していることに対して。

## 第 49 回 2024JPS 展 開催予定

東京展 5/18(土)～5/26(日)

東京都写真美術館 B1F 展示室 開館時間 10:00～18:00 (木・金は 20:00 まで) 月曜休館

### ■審査員による受賞作品講評会

日時：5月18日(土) 15:00～16:30 会場：東京都写真美術館 1F ホール

講師：熊切大輔／喜多規子／広田尚敬／前川貴行／村上仁一（雑誌『写真』編集長） 参加費：無料

関西展 6/18(火)～6/23(日)

京都市美術館別館 2F 開館時間 10:00～18:00

### ■作品講評会

日時：6月23日(日) 14:00～15:30 会場：京都市勤業館「みやこめっせ」B1F 大会議室

講師：熊切大輔／川村容一／柴田明蘭 参加費：無料

### ■講演会「100年の時を超える安井仲治の写真 その創作の秘密に迫る」

日時：6月23日(日) 15:45～16:45 会場：京都市勤業館「みやこめっせ」B1F 大会議室

講師：小林 公（兵庫県立美術館学芸員） 参加費：無料



タムロンがマナーの大切さと撮影の楽しさを知ってもらいたいと開催

## 「鉄道博物館ナイトミュージアム撮影会&鉄道撮影マナー講座」

文・写真/柴田 誠(JPS 会員)

株式会社タムロンは、「第16回 タムロン鉄道風景コンテスト」の特別イベントとして「鉄道博物館ナイトミュージアム撮影会&鉄道撮影マナー講座」を2023年8月5日に開催した。鉄道撮影マナー向上の啓発を目的にしたこのイベントは、「鉄道のまち大宮」に本社を置くタムロンが埼玉県さいたま市にある鉄道博物館を会場に、JR 東日本大宮支社の協力で行ったものだ。

### ■閉館後の鉄道博物館で撮影ができた「ナイトミュージアム撮影会」

「鉄道博物館ナイトミュージアム撮影会&鉄道撮影マナー講座」には、事前にタムロンのウェブサイトでも募集し、抽選で選ばれた313人が参加した。夏休み中の週末ということもあって、予定していた150組・300名様を大幅に超える応募があった。そのため抽選となったもの。小学生の親子連れやカップルでの参加も多く見られた。



タムロンは、2008年から開催している「タムロン鉄道風景コンテスト」を通じて、鉄道写真撮影時のマナー向上の啓蒙活動を行っている。しかし近年、鉄道写真撮影のマナーが多くのメディアに採り上げられるなどして、社会問題化している。「タムロン鉄道風景コンテスト」を主催するタムロンとしては、改めてマナーの大切さと撮影の楽しさを知ってもらいたいと考え、このイベントを企画したのだという。

イベントは「鉄道博物館ナイトミュージアム撮影会」と「鉄道撮影マナー講座」の2構成になっており、「鉄道撮影マナー講座」は3グループに分けて行われた。自分の受ける講座の時間以外は、博物館の中を自由に撮影することができた。閉館後の貸切で、参加人数が限定された「ナイトミュージアム」ということで、車両ステーション内をゆったりと見て回り、撮影することができるようになっていた。

### ■子どもから大人まで真剣に聞き入っていた「鉄道撮影マナー講座」

「鉄道撮影マナー講座」の講師は、鉄道写真家の広田尚敬氏と金盛正樹氏の2名に加えて、JR 東日本大宮支社の社員の方も加わって、10分の講義が行なわれた。広田氏が2回、金盛氏が1回講師を務めて行われた講義では、いずれの回も「鉄道撮影マナーのお手本になってください」というメッセージからスタート。「皆さんがマナー向上の核になって鉄道写真のマナー向上を全国に広めていこう」という呼びかけに

うなずく来場者も多かった。

広田氏、金森氏が語る鉄道写真の撮影マナーのポイントは7つ。

「列車運行と撮影者の安全を最優先させよう」

をはじめ、「撮影者は互いに譲り合おう」

「車体に向けての撮影はストロボをOFFに設定しよう」

「人物スナップを撮る場合は声をかけよう」

「撮影場所を考えてみよう」

「避けるために考えてみよう」

「撮影地を綺麗にすることを考えよう」

と提案するかたちで、自身の作品の撮影状況を解説しながらマナーの重要性を伝えた。どれも当たり前のことで難しいことではないものの、普段から意識していないとうっかりマナー違反をしてしまっているのかも、と思ってしまうようなことばかりだ。

広田氏は「列車運行と撮影者の安全を第一に考えてほしい」と語り、有名な撮影地では1か所に人が集中しやすいので、どうしてもトラブルの原因になりやすい。そのため「自分の目、自分の感覚で安全な撮影地を見つけてほしい」と安全を強調した。

また金盛氏は「安全な列車運行なくして鉄道写真は成り立たない」と話し、譲り合いの精神を持って撮影を楽しんでほしいと語った。2人からは「安全な場所で撮っても迫力ある鉄道写真は撮れる。列車から離れた場所で空間を活かした撮影を楽しもう」と、安全に撮影するよう提案された。

各講義の最後には、JR 東日本大宮支社の社員が列車を運行する立場として「鉄道写真を撮る際に気をつけてほしいこと」を解説して締めくくった。



講師の金盛正樹氏

各回10分の予定の講座だったが、どの回も予定の時間をオーバーして終了。しかし途中で席を立つ人もなく、真剣な面持ちで講義に聞き入っていた参加者ばかりだったのが印象的だった。鉄道写真を撮る人がすべて悪いわけではないが、鉄道撮影に関しては何かとトラブルが多いのが事実。「鉄道撮影マナー講座」は、この会場に来ていない人たちにこそ聞いて欲しいと思った。

## 2024年 第19回「名取洋之助写真賞」作品募集

社会の動向に鋭い視線を投げかけ、情熱を燃やす新進写真家へ！

公益社団法人日本写真家協会が公募する2024年 第19回「名取洋之助写真賞」

公益社団法人日本写真家協会は、“新進写真家の発掘と活動を奨励する”ために、40歳までの写真家を対象とした2024年 第19回「名取洋之助写真賞」の公募を行います。若い写真家を元気づける「名取洋之助写真賞」はプロ写真家への登竜門として創設しました。

時代を捉える鋭い眼差しと豊かな感性による、斬新な作品を期待します。  
お知り合いの若い写真家に是非、応募をお勧めください。



2023年 第18回名取洋之助写真賞 受賞：中条 望  
[GENEVA CAMP- 取り残されたビハール人-]

### 【第19回 応募要項】

- 応募期間：2024年7月1日（月）～8月20日（火）消印有効。  
持参の場合は午後5時まで。
- 応募資格：応募者は40歳まで（1984年1月1日以降生まれ）の方で、プロ、アマチュアは問いません。
- 提出作品：六ツ切またはA4サイズの同一テーマの作品30点。
- 応募要項：詳しい応募要項は2024年 第19回「名取洋之助写真賞」作品募集のホームページをご覧ください。
- 選考委員：山田健太（専修大学教授）、熊切大輔（写真家・日本写真家協会 会長）、清水哲朗（写真家・日本写真家協会 会員）。（予定）
- 表彰・賞金等：名取洋之助写真賞 1名・賞金 50万円、名取洋之助写真賞奨励賞 1名・賞金 10万円、東京、大阪で受賞作品写真展の開催、授賞式。
- 著作権・使用権の許諾：受賞作品の著作権は撮影者に帰属します。受賞作品は受賞後2年間、主催者（日本写真家協会）が名取洋之助写真賞の広報・宣伝活動に優先して使用します。ただし、その後も協会のPR活動や歴史展、沿革史等に掲載させていただくことがあります。データは上記目的以外には使用いたしません。
- 提出・送付先：書留郵便または宅配便（送料は応募者負担）または持参。  
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 番地 JCII ビル 303 公益社団法人日本写真家協会「名取洋之助写真賞」係  
TEL：03-3265-7451 FAX：03-3265-7460
- 応募用紙はJPSホームページ <https://www.jps.gr.jp/> から

### 第49回2024JPS展 関連イベント

#### 【東京】

#### ■「JPS 会員写真家といっしょ フィルムカメラ散歩撮影会&暗室体験ワークショップ」

開催日：2024年4月20日（土）・27日（土）

##### ・1日目：フィルムカメラ散歩撮影会

日時：4月20日（土）11：00～16：00 場所：株式会社 ケンコー・トキナー本社 7階セミナールーム

##### ・2日目：暗室体験ワークショップ

日時：4月27日（土）14：00～17：00 場所：JCII 貸し暗室

参加費：10,000円（税込）

協力：株式会社 ケンコー・トキナー、株式会社 写真弘社、一般財団法人 日本カメラ財団、  
富士フィルムイメージングシステムズ株式会社、リコーイメージング株式会社（五十音順）

#### ■「JPS 会員写真家による作品講評会」

日時：5月23日（木）18:30～20:30 会場：東京都写真美術館 1F スタジオ 参加費：2,000円（税込）

#### ■「プリントしてフィルム愛を分かちあおう」 ゲスト：荒谷良一

日時：5月25日（土）14:00～16:00 会場：東京都写真美術館 1F スタジオ 参加費：2,000円（税込）

#### ■講演会「第3回知っておきたい写真著作権&肖像権セミナー」

公益社団法人日本写真家協会／一般社団法人日本写真著作権協会 共催事業

講師：吉川信之（JPS 著作権委員会担当理事）／棚井文雄（JPCA 常務理事） 参加費：無料

【東京】日時：5月19日（日） 会場：東京都写真美術館 1F ホール

【関西】日時：6月15日（土） 会場：京都市勧業館「みやこめっせ」B1F 大会議室

## 【News】JUCC2023年度「著作権貢献賞」

### 山口勝廣（JPS 名誉会員）と 吉田大輔（元文化庁次長） 両氏が受賞！

知的所有権の総合コンサルタントである日本ユニ著作権センター（JUCC）は、2023年度の「著作権貢献賞」を、写真家で日本写真家協会の名誉会員である山口勝廣氏と元文化庁次長の吉田大輔氏に贈った。この賞は、著作権について長年尽力をされた方をたたえるもので、2002年までは日本著作権協議会が功労賞として贈呈していた賞を2010年度からは日本ユニ著作権センターが趣旨を引き継いでいる。

山口勝廣氏は1940年愛知県生まれ。日本写真専門学校フォトデザイン科卒業後、(株)グラフ社写真部に入社。1967年4月にフォトオフィス・アルプを設立。1969年に日本写真家協会（JPS）に入会し、副会長、総務、財務、著作権委員などを歴任し、2023年5月には、役員在任30年間の功績によって名誉会員に推挙された。

2004年から2021年には日本写真著作権協会理事を務めた。写真家の仕事として、1967年のグラフ社退社後には木曾地方の風土、風俗の取材を開始。これは氏のライフワークとして、今もなお継続されている。1994年には日本経済新聞に「庄川・光と影を求めて」を連載。2003年にはNHKハイビジョン「公園通りで会いましょう！木曾路幻影」、2010年にはBSジャパン「写真家たちの日本紀行・郡上八幡」などの制作に携わり、2013年には上松町功労表彰、木曾ふるさと大使を務めている。著作権活動にも積極的に関わり、日本写真家協会二代会長渡辺義雄の要請を受けて写真著作権の保護期間の改正に傾注。著作には共著として『スナップ写真のルールとマナー』（2006年、朝日新書）『SNS時代の写真ルールとマナー』（2016年、朝日新書）「写真著作権第2版」編集企画統括（2016年、太田出版）などがあり、著作権に関わる長年の活躍が評価された。

吉田大輔氏は1955年熊本県生まれ。京都大学法学部卒業後、文部省（現・文部科学省）に入省し、1995年4



吉田大輔氏（左）と山口勝廣氏（右） 2023年12月14日贈呈式にて  
写真提供：日本ユニ著作権センター

月から1998年3月までは横浜国立大学大学院で国際経済学研究科助教授として知的財産権の研究などを行い、1998年4月から2001年1月までは文化庁著作権課長を、2006年7月から2008年7月までは文化庁審議官を歴任。2010年7月から2012年1月までは文化庁次長を務め、2015年8月に文部科学省を退職後、現在は著作権情報センター附属著作権研究所副所長兼主幹研究員の職にある。

吉田氏はJPSとの関わりも深く、2009年2月にはJPS著作権委員会の要請によって研究会「ネット時代の著作権」の講師をされた。現代の著作権に関わる諸問題について、1「写真に関わる著作権制度」、2「著作権に関する最近の話題から」、3「写真の著作権を守るために」という3つの課題にわけて実例を交えながら講演を行い、出版社、新聞社の著作権関係者、大学教授、写真メーカー、写真団体の関係者などの出席者からの質疑応答も行き、写真を巡る著作権について、啓発を行っている。

吉田氏の著作には『著作権が明快になる10章』（2009年出版ニュース社）、『著作権を考える10の視点』（2015年出版ニュース社）などの単行本や、『ネット時代の著作権』（2002～2015年出版ニュース誌）などの連載記事があり、著作権研究という繊細で、可変性の強いフィールドでの長年にわたる活躍が今回評価された。

（記／出版広報委員・池口英司）



「身につけよう著作権の正しい知識」研究会での山口氏  
2015.2.28 於 JCI 6F 会議室 撮影：天神木健一郎



「ネット時代の著作権」研究会での吉田氏  
2009.2.19 於 JCI 6F 会議室 撮影：加藤雅昭



## 【声明】

### 生成 AI 画像についてその考え方の提言

現在、生成 AI 技術の進歩・普及や使用方法が、社会的に大きな関心を集めています。カメラで写した写真と見分けられないような生成 AI 画像が、専門的なスキルを必要とせず、安価に作成されるようになりました。フェイク画像の拡散や炎上も多く発生し、社会問題になっています。技術の進化のスピードがとても速く、社会のルール整備が追いついていないことも問題です。公益社団法人日本写真家協会はプロフェッショナル写真家集団の立場から、以下の問題について懸念しています。

#### ○写真と生成 AI 画像

写真を写すためには被写体が必要です。直接、被写体が必要としない、生成 AI 画像はイラストやコラージュと類似するものだといえましょう。写真と生成 AI 画像は、同じように見えてもまったく異なるものです。言語の指示だけで、自分の写真に他人の著作物を自動的に合成することができる写真レタッチソフトも登場しました。生成 AI 技術によるものです。これらの手段で生成・加工された写真の表現性や作家性を、どのように考えたらよいのでしょうか？

フォトコンテストの応募規約など様々な場面での扱い方の見直し、議論が必要な状況です。

#### ○生成 AI と著作権法

日本の著作権法は著作物を「思想又は感情を創作的に表現したもの」と定義しており、人間が創作したものだけに著作権が認められます。生成 AI で画像を作成することは、既存の著作物(原著作物)を元に新たな画像を作成する「翻案(二次的著作物の創作)」にあたります。二次的著作物の原著作物の著作者は、当該二次的著作物の著作者と同一の種類の特権を専有します。これが正しく行使されれば、原著作者にとっても市場の拡大が期待できるでしょう。

しかし、原著作者が知り得ないところで、他人が容易に生成 AI を手段として使用して、二次的著作物を安

価に作成し、経済的需要がそちらに傾いてしまうことが懸念されます。生成 AI 画像を見ただけでは原著作物が何であるのかを判断することができないことが大きな問題です。著作者にとって重大な危機だと考えます。

以上の理由から、生成 AI を利用して作成した二次的著作物に対して、原著作物の著作者名ないし出典(複数の可能性もあり)と、利用者(二次的著作者)名の明示義務を設けることも検討する必要があると考えます。

巨大プラットフォームによる著作物の記録・複製が一部合法化されている現在の制度(著作権法第 30 条の 4)を見直すか、そのようなプラットフォームに「作成した生成画像のオリジナル(原著作物)を探し、かつ表示するシステムを装備する義務を負わせる」などの改正も考えられるのではないのでしょうか。

生成 AI 技術の使用が適正にコントロールされなければ、写真家の著作権をはじめとする著作権や被写体の肖像権、その他の知的財産権などが損なわれ、その結果権利へのフリーライド(ただ乗り)の発生などが懸念されます。写真家は撮影した写真(著作物)からの収入で生計を立て、それをもとに新たな写真作品を創り出します。

あらゆるプロフェッショナルによるクリエイティブの再生産を維持するためにも、生成 AI 技術に対して著作者の権利を保護するルールづくりが重要だと考えています。

生成 AI 画像問題の議論は始まったばかりです。技術や問題点は早いスピードで変化しており、当協会においても生成 AI 画像の動向、取り扱いを注視しつつリアルタイムで対応してゆく必要があると考えています。現時点での問題提起としてこの声明を発表します。

2023 年 8 月 23 日

公益社団法人日本写真家協会

### 「性的姿態撮影罪」の呼称についてお願い

令和 5 年 7 月 13 日より、「性的な姿態を撮影する行為等の処罰及び押収物に記録された性的な姿態の影像に係る電磁的記録の消去等に関する法律」が施行されました。この法律は「正当な理由がなく性的な姿態を撮影したり、撮影した写真や動画の公表を処罰するもの」であり、通常の写真撮影を規制するものではありません。問題のある撮影行為を規制する法律の整備は大切なことだと考えます。

しかし、マスメディアなどでは長い名称を省略して「撮影罪」という呼称が多く使われています。この呼称は、あたかも通常の写真撮影が犯罪行為であるような誤解を招いてしまうことが懸念されます。写真家は被

写体に対してさまざまな配慮をしながら、創作活動を行っています。この呼称の使用は、通常の写真撮影に大きな支障を発生させてしまう恐れがあります。このような省略された「撮影罪」という呼称が社会の中で一人歩きしてしまう事態を防がなければならないと考えます。

以上の理由から、「撮影罪」ではなく「性的姿態撮影罪」という呼称をお使いいただけますよう、マスメディアをはじめ、すべての皆様にお問い合わせ申し上げます。

2023 年 10 月 17 日

公益社団法人日本写真家協会



## 富岡 畦草 名誉会員

2023年9月25日、老衰のため逝去。97歳。

1971年入会、日刊スポーツ写真部から人事院に転職、記録資料写真の整理を担当する傍ら、身近の雑事や社会現象を定点撮影し、変貌する社会を写真で記録する方法を確立する。娘の成長記録「母と子の千日間」や「東京は変わった定点撮影50年」などの著作がある。昭和33年日本写真協会新人賞を受賞された。こうした功績により2018年に名誉会員に推挙されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### 富岡畦草さんを偲んで

松本 徳彦

1926年三重県久居市（現・津市）生まれ、松阪工業高校卒業、中島飛行機（株）に就職。谷田部海軍航空隊に配属。特攻隊志願兵として終戦を迎える。運輸省東海開運局、日刊スポーツ新聞社を経て、人事院広報課写真室勤務となり、省庁関連の広報写真を撮る。

この頃から戦争で焼け野原となった都心の惨状に衝撃を受け現状を記録。復興し移り変わる街かどを、以前撮った写真と「今」を撮り分けて表現する、定点観測式撮影法を生み出し、高度成長期の都市や民衆の変貌する様相を撮り、次々とカメラ雑誌で発表する。同時に娘たちの成長記録にも障子の棧を活用したアイデアに、カメラ雑誌『アルス』の編集長桑原甲子雄、『岩波写真文庫』の名取洋之助、写真評論家の伊奈信男氏などから賛辞をいただき、1958年日本写真協会の第1回新人賞を受賞。これを契機

に今日までの70年間、家族とともに街歩きを続け、2018年『東京定点巡礼－我が写真回想記』（日本カメラ社）を上梓する。

「定点写真は撮りつないでこそ、その意味に価値あり」との写真の原点を考えさせる言葉を残して2023年9月25日老衰で逝去された。現在は娘の富岡三智子さんが二代目を、三代目を孫の碧美さんが襲名し定点撮影を継続している。

著作に『鎌倉の散歩みち』『湘南の散歩みち』『鎌倉歳時記』『石のかまくら』『かながわ花の旅』『鎌倉の四季』など地域に密着した活動。記録の目シリーズとして『消えた街角-東京』、岩波フォト絵本『東京は変わった-定点撮影50年-』などがある。テレビ出演も多く、NHKドキュメンタリー「人間列島」、テレビ大阪「和風絵本家」、テレビ朝日「マツコ&有吉の怒り新党」などがある。

ご冥福をお祈りします。



## 中川 邦昭 正会員

2023年8月14日、逝去。80歳。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(1973年入会)



## 川西 正幸 正会員

2023年10月16日、多臓器不全のため逝去。75歳。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(1978年入会)



## 林 喜代種 正会員

2023年9月7日、脳卒中のため逝去。80歳。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(1983年入会)



## 大橋 俊夫 正会員

2023年11月20日、左腎臓がんのため逝去。84歳。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(2006年入会)



## 坂田 薫 正会員

2023年9月7日、間質性肺炎のため逝去。74歳。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(1984年入会)



## 金瀬 胖 正会員

2024年2月7日、心不全のため逝去。79歳。  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(1994年入会)

## 造船記 (表紙写真)

野田雅也

津波に流されて炎上した船と船大工。2011年3月11日、東日本大震災に見舞われた岩手県大槌町。ひょうたん島のある大槌町は艇の定置網漁や養殖業で栄えてきた。漁師町の復興に「船」は欠かせない。「やんねばなんねえ」、船大工たちは声を合わせた。町に暮らしの明かりが灯る日を夢見て、途切れることなく復興の槌音を響かせ続けた。震災の日から11年間、新しい町ができるまでの復興の軌跡を記録した。(2011年11月2日撮影)

写真集「造船記」



## Boficca's Balance -ポフィーカの天秤(表4写真) - KAO'RU

アルベルト・マルキニによって書かれた旅行記。いわゆるマルキニ回想録の中に生き物と自然が調和して暮らす理想郷、「ポフィーカ」を訪れたという記述が残る。回想録より「ポフィーカの天秤」を制作。ポフィーカでは、「迷った時は天秤に諮れ。」と言い伝えがあり、迷いを心に思い浮かべながら天秤を作り静かな場所に置くとしばらくすると効果が表れ迷いは薄れていくという。(技法:アートペーパーに特殊加工のうえ、金沢金箔散らし)



写真展「KAO'RU Exhibition 18:ポフィーカ 執筆:ロドリゴ・カッジャーノのつぶやき」

## 経過報告 (2023年5月~2023年8月)

- ◎ 5月15日 写真学習プログラム講師向け説明会 PM2:00~4:00 JCII ビル会議室、オンライン 参加数5名、オンライン参加数12名
- ◎ 5月20日~28日 第48回2023JPS展(東京) 東京都写真美術館B1F 展示室 入場数3,125名 ◎ 5月20日表彰式、作品講評会、祝賀パーティー、5月26日イベント「会員写真家によるポートフォリオレビュー」、5月28日イベント「フィルム愛を分かち合おう」
- ◎ 5月21日 著作権セミナー 東京都写真美術館1Fホール 2回開催のべ参加数169名 ◎ 第2回知っておきたい写真著作権&肖像権セミナー
- ◎ 5月26日 2023(令和5)年度第24回定時会員総会 PM1:30~3:15 東京都写真美術館1Fホール 本人出席86名、代理委任2名、議決権行使書782名、計870名、外部理事4名、外部監事1名、関係者3名、名誉会員2名、賛助会員12社17名 ◎ 決議事項:第1号議案:2022(令和4)年度事業報告書及び決算報告書承認の件、第2号議案:「公益社団法人日本写真家協会定款」一部変更及び一部追加の件、第3号議案:理事の任期満了に伴う改選及び監事の死亡欠員に伴う補選の件、第4号議案:名誉会員推薦承認の件 ◎ 報告事項:1.「2023(令和5)年度事業計画書」の件、2.「2023(令和5)年度予算書」の件、3.第49回「日本写真家協会賞」の件、4.会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件、5.その他
- ◎ 5月26日 第58回公益社団法人日本写真家協会理事会 PM4:00~4:45 東京都写真美術館1Fスタジオ 19名、監事2名、欠席監事1名 ◎ 2023(令和5)年度代表理事及び業務執行理事の選定の件、他

- ◎ 5月27日 第2回技術研究会 PM2:00~4:00 東京都写真美術館1Fスタジオ 参加数31名 ◎ 組写真、テーマの見つけ方と表現~ドキュメンタリー・フォト、ポルタージェ・フォトのために~
- ◎ 6月20日~25日 第48回2023JPS展(関西) 京都市美術館別館2F 入場数1,289名 ◎ 6月24日作品講評会、講演会、6月18日イベント「スタジオポートレート撮影会」、6月25日イベント「京都市動物園撮影会」
- ◎ 6月24日 出版広報座談会 PM2:00~4:00 JCII ビル会議室 6名
- ◎ 6月25日 著作権セミナー 京都市勤業館「みやこめッセ」大会議室 PM1:00~4:00 参加数140名 ◎ 第2回知っておきたい写真著作権&肖像権セミナー
- ◎ 7月3日 出版広報座談会 PM5:30~7:00 JCII ビル会議室 8名
- ◎ 7月7日~ 国際交流委員会企画「表現者たち」vol.13 JPS ホームページ 「人生は不思議だ~まるで見えない糸に引かれるように展開する」内藤忠行
- ◎ 7月13日~19日 2023年新入会員展(東京) アイテムフォトギャラリー「シリウス」 出展者27名、作品数54点、入場数1,719名 ◎ 「私の仕事」
- ◎ 7月31日 「笹本恒子写真賞」選考会 PM2:00~3:15 JCII ビル会議室 8名 ◎ 選考・佐伯剛、野町和嘉、熊切大輔、推薦候補者・19名、第6回「笹本恒子写真賞」・高橋宣之
- ◎ 8月4日 JPS ビアパーティー PM6:00~8:00 「ブッフエ&貸切パーティー-Y's(ワイズ)新宿エステック情報ビル」パーティースペース 参加数77名
- ◎ 8月24日 2023年JPS 会員関西納涼親睦会 PM6:30~8:30 グラッチェ堂島本店 参加数22名
- ◎ 8月25日~31日 2023年新入会員展(大阪) 富士フイルムフォトサロン大阪 出展者27名、作品数54点、入場数3,043名 ◎ 「私の仕事」

## 編集後記

◎前号編集後記で、ちがったかたちで関わるということに書きましたが、会報、ニュース等を担当する公2の担当理事として関わることになりました。よろしく願います。さて、1月末に7年ぶりに写真展(詳しくはメッセージボードをご覧ください)を開催しました。新型コロナウイルスも静かになり、実際に人が集うのはいいものだと改めて感じました。(伏見)

◎JPSの広報活動を見直し、一元化して取り組む「広報実行委員会」が2月に発足しました。JPSの事業や活動内容を広く社会に伝える手段としては「JPS会報」の印刷・配布から、ホームページやSNSを活用した情報発信にシフトしていく必要性があり、手段や方法論も含めて検討・実行して参ります。また「JPS会報」は、JPS事業のアーカイブとして活動記録の保存という役割に注力していくこととなります。(小池)

◎昨年末、建築史家の先生の文章へ写真提供するかた

ちで「住まいの建築史/近代日本編(創元社刊)が出版されました。幕末から戦後に至る日本住宅百年の歴史を語る一冊となっています。今回は、新規撮影をすることなく、ストック写真だけで出版となりました。こういう依頼が常になれば老後の心配もありません。(小野)

◎私の出身高校はのどかな校風で、雪が降った翌日の数学の授業は雪合戦に替わっていました。昨夜、私が住む横浜に雪が降りました。出かけるのが億劫になります。東北に雪の写真を撮りに行こうと考えていたけれど、です。ただ、あのメンバーでもう一度雪合戦ができたらと思います。(池口)

◎第18回名取洋之助写真賞の受賞者3名の内、2名が写真学校の教え子たちだった。この20~30年で若い写真家たちの創作思考は大きく変化し、ドキュメンタリーやポルタージェに取り組み若い人たちが減ってしまった。彼らの受賞を誇らしく思うと同時に、名取賞の存在の大切さを実感した。(飯塚)

◎GW 翌週から、約2か月のロングランでヴォーリス

建築写真展「VORIES TIME」を兵庫県西宮市にある、関西学院大学博物館で開催する運びになりました。東京、大阪、滋賀での開催に続き、4か所目になります。「関西学院大学博物館 桃井」の検索で詳細確認頂けます。洋風建築の並ぶ広大なキャンパスも楽しみです。(桃井)

◎ステイホーム期間中、家に巻って作った写真カラージュ集。試行錯誤の上、出版した。これまで5冊の写真集を作ってきたが、編集やデザイン、印刷すべてにおいて完璧とはなかなかならない。どこかに「次こそは……」という宿題が残ることが、次回作へのモチベーションになると解釈したい。(山縣)

◎この文章を書いている時期は丁度新入会員の申込と重なっています。コロナの時は入会希望者も大幅に減って、どうなるか大いに心配もいたしました。昨年から今年にかけては少しずつですが回復しているような気がします。来年は40人、再来年は50人と増えていてもらいたいです。(事務局 杉山)

日本写真家協会会報 第181号 (年2回発行) 2024年3月10日 印刷・発行 ◎編集・発行人 熊切大輔

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email [info@jps.gr.jp](mailto:info@jps.gr.jp) 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

出版広報委員 伏見行介(常務理事)、小池良幸(担当理事)、小野吉彦(委員長)、池口英司(副委員長)、飯塚明夫、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会(JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCII ビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MK ビル 電話 03(3265)0611(代表)



# PENTAX



一眼レフの未来を創る。

日本で初めて一眼レフをつくったペンタックス。

その哲学、技術、情熱のすべてを注ぎ込んで、この一台は誕生しました。

APS-Cフラッグシップモデル、PENTAX K-3 Mark III。

写真を撮ろう。

# K-3 III

株式会社リコー / リコーイメージング株式会社  
お客様相談センター：0570-001313 (ナビダイヤル) [www.ricoh-imaging.co.jp](http://www.ricoh-imaging.co.jp)

**RICOH**  
imagine. change.

# SIGMA

最高峰の性能、信頼性、機動力  
全てはプロフェッショナルのために



## S Sports 70-200mm F2.8 DG DN OS

ミラーレス専用 | フルサイズ対応

価格：オープンプライス

付属品：ケース、レンズフード (LH860-01)、三脚座 (TS-151)、

フロントキャップ (LCF-77mm III)、リアキャップ (LCR II)

対応マウント：Lマウント用、ソニー Eマウント用

※製品の外形、仕様などは変更することがあります。

※ソニー Eマウント用は、ソニー株式会社とのライセンス契約の下でライセンスを受けた

Eマウント仕様書に基づき開発・製造・販売されています。

※Lマウントはライカカメラ社の登録商標です。

シグマのプロダクト・ラインについては、こちらへ。

[sigma-global.com](https://sigma-global.com)

# HCLファインアートプリントサービス



## ILFORD CERTIFIED PRINTER PARTNER

イルフォード 認定ラボ

作品を極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。  
ファインアートプリントの高い技術と知識を有する熟練のプリンティングディレクターが作品制作をサポートします。



### ハーネミュレ ファインアート バライタ

深い色合い、上質な光沢と質感、広い色再現域、高い最大濃度と滑らかなグレーの階調表現で、特にモノクロ写真に最適です。



### ハーネミュレ フォトラグ

精細で滑らかな面質により多目的に使え、モノクロとカラー写真のどちらにも適し、深みを感じる絵画的な作品に仕上がります。



### 伊勢和紙 芭蕉

滑面と粗面があり、制作意図に応じてどちらの面でもプリントが可能で違った風合いを表現できます。

〈写真は全てイメージです。〉

このほかにも条件により各種ファインアートペーパー出力の対応が可能ですのでご相談ください。

#### ■ フォトイメージングセンター

営業課 フォトアート担当  
東京都杉並区和田1-6-7  
☎(03)3384-9670

#### ■ 大阪営業部

営業課  
大阪府大阪市北区万歳町3-17  
☎(06)6313-2351



ホームページ



Facebook



## おめでとうございます

当協会会員の大石芳野さんが、「澄和 Futurist (とわフューチャリスト) 賞～平和、人・自然 なごむ世界へ～」(2023年10月27日)を受賞しました。この賞は、一般財団法人澄和が「より良い未来構築の為」に、地道に取り組んでいる個人または団体を顕彰するもので、今年で8回目の表彰。これまでに市民目線の平和関連活動、環境保護活動などに尽力された方々が選考の対象となり、音楽家の坂本龍一(特別賞)、演出家の宮本亜門さんたちとの同時受賞となりました。

大石さんは、日本のみならずベトナム、カンボジア、アフガニスタン、ウクライナなど、世界100か所以上の地域を訪れ、優れたドキュメンタリー作品を発表し続けてきました。

どのようなお考えからこれらの地域に出かけ、写真を撮り続けてきたのか。武蔵野市の事務所でお話を伺いました。

— このたびは受賞おめでとうございます。大石さんの長年にわたる活動が、また一つ、実を結びました。大石さんのお仕事を振り返ってみると、学生時代から海外に目を向けておられていたようでした。それも欧米ではなく、アジアが中心だった。この理由は何なのでしょう？

大石：ありがとうございます。

私がアジアに向かったのは、日本人もアジア人だからです。私が写真を撮り始めた1960年代という時代は、まだ中国や韓国に自由に旅行できる時代ではありませんでした。それで自然と、台湾や東南アジアに足が向いたのです。そうしているうちにベトナムで戦争が酷くなり1975年まで続きました。そして、それ以前の日本の太平洋戦争で東南アジアの多くの国々が戦場になり、1945年に戦争は終わっても人びとの気持ちには戦争が燻ぶっていることを聞いて衝撃を受けました。日本は戦争が終わったからそれでいいのだと、他人事になってしまう気にはなれませんでした。

— 彼の国では戦争は終わっていないと…

大石：仕事で出かけるのですから、色々な取材のパターンがあり

ます。現地の人から話を伺って、ニコニコと挨拶をして別れる、という仕事もありました。ただ、そうした中で、実際に自分の家族が戦争で亡くなった、あるいは傷ついたという人と出会った。つまり、その人たちにとっては、自分が死ぬまで、戦争は終わっていないということです。私は20代の時にそういう方たちと出会って、「戦争は終わっても終わらない」と痛感し、以降、写真活動のテーマの一つになりました。

— 日本が残した傷跡を追うことが、日本の平和に貢献すると思ったのですか。

大石：そのような大げさなことではないですね。ただ、私が知らなかったことは、きっと多くの人も知らないだろ

う、と考えたのです。だから、それを伝えたい。日本は高度経済成長の時代にあって平和かもしれないけれど、あちらの国々の人たちは日本が起こした戦争によってまだ苦しんでいると伝えなかったのです。それは今でも変わっていません。伝わらなければ私はまだ未熟なのだ、取材が足

りないのだと考えて、また出かけます。この仕事を始めたからには、伝える人であり続けたい。そう考えて仕事を続けているうちに、この年齢になってしまいましたね。(笑)

— 戦争をしている人ばかりを撮らず、そこにいる人たちの肉声を伝えたことが、大石さんの仕事であったと思います。

大石：色々なタイプの写真家がいっているのだと思います。戦場でも、血みどろになって戦っている人の写真を撮る写真家も、笑顔で戦争を伝える人も。こうした様々な写真によって見る側が幅広く、深く、戦争を捉えることができるのだと思います。私は戦禍に喘ぐ小さな存在の多くの人たちに焦点を合わせて撮影してきました。

— 見る側に選択肢を提供することは大切ですね。

大石：それは今でも強く意識しています。

— まだ、混迷の時代が続くようです。後進の写真家へのメッセージはありますか。

大石：とにかく、写真を撮り続けて欲しいということです。仕事で写真を撮るといことは、自分が本当に撮りたいものの以外の写真も撮らなければならない。けれども、それは仕方のないことです。そうやって写真を撮る仕事を続けながら、自分が本当に撮りたいものを見つけ出し、そして、撮り続けて欲しいと思います。

— 本日はどうもありがとうございました。

(2023年11月21日 聞き手/名誉会員・松本徳彦  
撮影・構成/出版広報委員・池口英司)

## 第8回「澄和Futurist 賞」受賞



大石 芳野さん

(写真家)



# Message Board



## ◆水本俊也 (2010年入会)

和紙の質感、表現の幅に魅せられて、ここ数十年、伝統工芸品である手漉き和紙を使用した作品制作を行っている。使用しているのは郷里である山陰・鳥取の因州和紙。追求したいのは日本海独特の雪雲と雪質の表現。写真出力のベースとなるグレー。そして紙自体が持つホワイト(白)の基準。重要なこの2点(黒の締まり具合も含めると3点)の追求はまだ見ぬ日本各地の和紙との出会いへの期待と渴望に重なる。他の表現者(アーティスト)との出会いは土佐や大洲、吉野など他の和紙との縁も紡いでくれた。デジタル社会の現代、海外展開も視野に入れた作品との対峙性に意味と

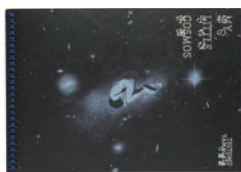


価値を見出すことは写真家が世に問うべき一つの役割だと考えている。掲載写真はOM SYSTEM PLAZAでの写真展、因州和紙×南極「ペンギン」(2024年1月開催)の展示風景。作品は余白なし、柔らかで温かみのある描写を直接伝えるよう試みた。多くの来場者に驚きと親しみを持って受け入れられたようである。

(神奈川県横浜市在住)

## ◆山縣 勉 (2012年入会)

このたび、写真集『私の小さな宇宙(My Little Cosmos)』を上梓しました。2020年からのコロナ禍で家に引き籠もって作り上げたフォトジャーナル集です。過去に撮影した写真や収集した古本、新聞等を切り貼りし、幼少期から夢の中にたびたび出現する光景を再現したものです。



(発行: 禅フォトギャラリー、B4変型、ソフトカバー、リング製本) 2024年3月1日～23日に、東京六本木の禅フォトギャラリーにて同名の個展を開催。http://www.tsutomuyamagata.com (東京都目黒区在住)

## ◆渡邊英昭 (1988年入会)

この十年あまり、硫黄島の元島民とその親族の方々の記録写真を撮り続けている。

最初は墓参だった。また住みたいと思うには、あまりにも生活インフラが

破壊されてしまいい、こうして墓参に来る以外に



は、故郷との直接的なつながりは失われている。ここ数年、それに遺骨収集が加わった。少年兵かと思われるような小さな遺骨を発見したときには、命に軽重はないと分かっている、やはり苦しい思いが込み上げてきた。

世界で起きている紛争のニュースを見るたびに、故郷を追われた人々、命を失って墓にも入れない人々のことが頭に浮かぶ。自分の記録がそんな紛争を少しでも躊躇わせるような意味を持ってくれればいいのだが。

(東京都渋谷区在住)

## ◆山口規子 (2001年入会)

2023年1月にソニーイメージングギャラリーで開催した山口規子作品展『I was there.』の写真集を上梓しました。写真家上田夫妻がオーナーであるモノグラフィーカーメラ&アーツさんが出版業務を開始し、モノグラフィックボックス、レーベル初の写真集です。この作品は、2002年私が一人旅した時に撮影したもので、フィルムで撮影し、暗室で自ら1枚1枚手焼きした作品です。2002年にフィルム現像までしていたのですが、なかなか暗室に入ってプリントする時間がなく、今まで引き延ばしており、2022年、約二十年後にプリントすることになります。私がどんな旅をしてきたか、写真集のページをめくりながら、一緒に旅した感覚になっていただけなら嬉しいです。



(千葉県船橋市在住)

## ◆結解学 (2004年入会)

デジタルカメラの普及やスマホのカメラ機能向上で、誰もが写真を楽しめる時代となった。多くの人が写真に興味を持つことは大変喜ばしいことだが、それに伴い弊害が生じているのは事実だ。鉄道写真においても、鉄道施設や私有地への無断立ち入り、車の違法駐車など、撮影者が増えれば多くの問題が発生してしまう。「このぐらいは許されるのか?」「この場合は違法になるのか?」など、意外と犯しやすい行為を例として、弁護士による

法的な見解や、それを防ぐための方法などを解説した『鉄道写真 ここで撮ってもいいですか』(オーム社)を2023年に発刊した。写真や原稿作成で取材を行ったが、自分自身も法律に抵触しそうな場面もあり、改めて撮影の難しさを感じた。

(神奈川県相模原市在住)

## ◆諸河 久 (1982年入会)

2023年8月、既刊の『1970年代～80年代の鉄道 国鉄列車の記録【東日本編】』に引き続き、『1970年代～80年代の鉄道 第2巻 国鉄列車の記録【北海道編】』を上梓した。

当時の北海道鉄道ロケは高解像度で退色に強い「コダック・コダクロム64(KR)フィルム」による撮影だったが、当該作品はキズやピンホールなど四十余年の経年汚損に晒されていた。編集選抜したコダクロム作品を、製版業者のドラムスキャナーで印刷用のCMYKデジタルデータに変換。スキャンデータにピンホールや汚損部を修正し、退変色した色彩を復元補正する作業に追われる日々を送った。

元来CMYK色空間のデータ補正は印刷所の仕事だったが、自身で色補正に着手してみると、撮影者が意図する色彩に近似した補正ができることなど、新たなマスター体験を取得した。

(東京都中央区在住)



## ◆南 佐和子 (2021年入会)

2024年1月から東京で始まった写真展「Obscure—風の記憶—」は2月名古屋展を終えて、3月15日(金)～21日(木)の大阪展、4月5日(金)～10日(水)の札幌展(ともに富士フォトサロン)と4月13日(土)～5月12日(日)の帯広展(マテックプロダ





クツストア2階ギャラリー)と巡回していきます。

同時出版した写真集は、冬が長い北海道、特に東部の鈍い光、風が作り出す自然のフォルム、そして儂い美しさの中に潜むあいまいな (obscure) な存在が教えてくれる大切なことを表現しています。また、手にとった時、そしてページをめくった時の感触を通じて内容が心地よく伝わる仕様になっています。できるなら、写真展会場で展示をご覧になって写真集にぜひ触れて頂きたいと思えます。

(東京都目黒区在住)

### ◆増田雄彦 (2012年入会)



#### 『LOST & FOUND - 二人展』

5/23 ~ 5/29 アイデム フォトギャラリー「シリウス」

石田研二・増田雄彦の2人がそれぞれに携わった仕事、発表してきた作品の傾向も異なったものとなっている。しかしながら撮影から作品に仕上げるまでのプロセスの中に多くの共通点があることが分かり、2人で撮影に出掛ける機会も多くなった。同行することによる相乗効果にも気づいたのだ。共通の被写体は「街」である。私たちは日常的に構図を探して「街」を歩く。「街」の発展に伴い消失してしまった被写体もあれば、新しく出現する被写体もある。もちろん旧くから変わらずに存在し続けている被写体もある。誰もが目にすることのできる「街」の中の LOST & FOUND。2人がそれぞれの視点で切り取った写真を一束にまとめることで、単なる記録には終わらない新たな成果物へと昇華することを期待している。(東京都目黒区在住)

### ◆内堀タケシ (1999年入会)

2023年7月、会員の小池汪さん(1974年入会、89歳)が亡くなった。私より入会は25年先輩でありJPS委員の経験も長く、私は総務委員会で多くの改革を進める姿を目にしていた。また、毎年JPS祝賀会の餅つきは、準備から仕上げ片づけまで汪さんの献身に支えられていた。また、モノクロフィルムでの撮影も好きで、7枚玉35mmレンズを付けたM型ライカを手にはシャッターを切っていた



た。ドキュメンタリーにも関心が高く、私がフクシマ原発事故やアフガニスタン取材から戻ると多くの質問をしてきた。私とライカもフォコマートも共通でフィルムや印画紙、暗室作業など、写真談義は楽しく、現代写真研究所の講師も務めていた。師走に開催された写真展と懇話会では写真関係者のもとより川崎市や市民ミュージアムなどの関係者も多く、別れを惜しんだ。

汪さんの写真の軌跡は、一般財団法人小池汪記念財団で問い合わせができる。(東京都三鷹市在住)

### ◆吉永陽一 (2017年入会)

私は空撮を生業とし、鉄道空撮「空鉄(そらてつ)」をライフワークにしています。が、この度の新刊は全く異なり、空ではなく地上。秘境駅を旅したルポです。秘境駅と一言でいっても、人里から離れている駅、本数が少ないためなかなかたどり着かない駅など様々です。2023年の3か月以上の秘境駅を訪ね歩き、またそれ以前に訪れた海外の秘境駅の出来事も加え、地域の方との語らいや駅周辺の撮影の中で見出した魅力を伝えました。初の新書となります。旅のお供に、日々の通勤に、ぜひ! 旅へ行きたくなる1冊です。(東京都渋谷区在住)



### ◆池口英司 (2016年入会)

山と渓谷社から『盲腸線データブック』という単行本を上梓しました。盲腸線とは何か? 鉄道、短い、行き止まりの路線のことで、マニアックな表現ですが、解る人には解り、タイトルにそういう暗号が使われていることも、コアな読者向けの本には肝要です。東京でいえば青梅線、大阪でいえば桜島線がそれに当たります。終点から鉄道に乗り継ぐことはできない。そういう路線を一同に集め、ひたすら、その距離であるとか、開業年月日を記していきました。抒情的な描写のある文章はナシです。

いざ執筆してみると、これはこれで面白く、色々な発見がありました。それではその発見とは何か? これがまたマニアックな切り口のもので、説明すると長くなるので割愛します。

(神奈川県横浜市在住)



### ◆飯塚明夫 (1994年入会)

#### 飯塚ゼミ展初開催

現代写真研究所でゼミを担当して、約二十年が過ぎた。ゼミ生たちは「写真表現は撮影者の数だけある」を旨として創作に取り組み、その成果を展覧や写真集にまとめて発表してきました。コロナ禍で少し内向きになったゼミの空気を換えようと、初の試みとして東京芸術劇場・アトリエウエストでゼミ展「交差」を開催した。(2024年1月15日~21日)

難しい展示作業も業者に頼らず、チームを組み皆で協力しながら進めた結果、約100枚の写真の展示が終わったときに得られた達成感に格別でした。初のゼミ展を開催して改めて、人と人を繋げる「写真の力」を実感しました。(写真は『交差』の作品集)

(東京都中央区在住)



### ◆伏見行介 (1997年入会)

7年ぶりに写真展を開催しました。これまでの写真展とは全く異なり演劇写真です。「コペルニクス的、演劇人たち! ~ 広告写真家伏見行介の視た劇団唐ゼミの12年」長い題名ですが、劇団の演出家中野氏の命名です。十数年前に、CAPAに連載をする事になり、モデルさんとして劇団唐ゼミの女優を選びました。劇団唐ゼミは、唐十郎氏が横浜国立大学教授だった時に、ゼミ生が立ち上げ、今も続いています。連載はとくに終了しましたが、気がつけば12年も取り続けています。

私の世代は、最盛期の唐十郎氏を知っています。政治状況も、社会も大きく変化した今、劇団唐ゼミは「何故」唐十郎氏の芝居を演技しつづけるのか? 謎です。写真展は通過点。これからも「謎」を解くために彼らの芝居を写し続けるつもりです。

(東京都新宿区在住)



### ◆会報「メッセージボード」原稿募集◆

出版広報委員会では、随時、メッセージボードの投稿を募集しております。近況報告、写真展開催・写真集出版の案内ほか、同好会の呼びかけなどでも構いません。300字程度で写真も掲載いたします。何回登場いただいても構いません。メール投稿は info@jps.gr.jp でお待ちしております。



# Canon

make it possible with canon

# 8

クリエイティブ  
フルサイズ

**NEW** EOS R8



もっと背伸びしていい。もっとよく張りでいい。  
もっと我がままでいい。このカメラが応えてくれる。  
スマートなのに、パワフルなフルサイズ。  
その名は8。「撮る」の先にある「創る」へ。  
好きな表現を、好きにやろう。



EOSは2023年3月に累計生産台数1億1,000万台<sup>\*1</sup>、交換レンズRF/EFレンズシリーズ<sup>\*2</sup>は2023年5月に累計生産本数1億6,000万本を達成しました。  
\*1 銀塩（フィルム）とデジタルの双方を合わせた累計生産台数。映像制作用のシネマカメラを含む。\*2 EFレンズ、EF-Sレンズ、RFレンズ、RF-Sレンズ、EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2023年6月29日時点。



© キヤノン EOS R8 ホームページ  
[canon.jp/eos-r8](https://canon.jp/eos-r8)

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

# ヨドバシ・ドット・コム 映像制作機材 専門ストア開設しました



プロ機材を豊富に品揃え  
ぜひご利用くださいませ



<https://www.yodobashi.com/store/300201/>



新規会員募集中 日本写真家協会会員様専用の  
ゴールドポイントカード

**12%ポイント還元**

※現金・テビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

**ヨドバシカメラ**

[www.yodobashi.com](http://www.yodobashi.com)

<b>新宿西口本店</b> 〒160-0023 新宿区西新宿1-11-1 ☎ 03(3346)1010	<b>マルチメディア 新宿東口</b> 〒160-0022 新宿区新宿3-2-6-7 ☎ 03(3356)1010	<b>マルチメディア Akiba</b> 〒101-0028 千代田区神田花岡町1-1 ☎ 03(5209)1010	<b>マルチメディア 錦糸町</b> 〒130-8580(駅ビルテルミナ1・2・3階) 墨田区江東橋3-14-5 ☎ 03(3632)1010	<b>マルチメディア 上野</b> 〒110-0005 台東区上野4-10-10 ☎ 03(3837)1010
<b>マルチメディア 町田</b> 〒194-0013 町田市原町田1-1-11 ☎ 042(721)1010	<b>八王子店</b> 〒192-0082 八王子市東町7-4 ☎ 042(643)1010	<b>マルチメディア 吉祥寺</b> 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町1-19-1 ☎ 0422(29)1010	<b>マルチメディア さいたま新都心駅前店</b> 〒330-0843 さいたま市大宮区吉敷町4-263-6 ☎ 048(645)1010	<b>マルチメディア 川崎ルコジ</b> 〒210-0024 川崎市川崎区日進町1-11 ☎ 044(223)1010
<b>アウトレット京急川崎</b> 〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町21-12 ☎ 044(221)1010	<b>マルチメディア 横浜</b> 〒220-0004 横浜市西区北幸1-2-7 ☎ 045(313)1010	<b>マルチメディア 京急上大岡</b> 〒233-0002(京急百貨店1・8・9階) 横浜市港南区上大岡西1-6-1 ☎ 045(845)1010	<b>千葉店</b> 〒260-0015 千葉市中央区富士見2-3-1 ☎ 043(224)1010	<b>マルチメディア 新潟駅前店</b> 〒950-0901 新潟市中央区弁天1-2-6 ☎ 025(249)1010
<b>マルチメディア 宇都宮</b> 〒321-0964(トナリエ6・7・8階) 栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6 ☎ 028(616)1010	<b>マルチメディア 甲府</b> 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-3-3 ☎ 055(230)1010	<b>マルチメディア 郡山</b> 〒963-8002 福島県郡山市駅前1-16-7 ☎ 024(931)1010	<b>マルチメディア 仙台</b> 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡1-3-1 ☎ 022(295)1010	<b>マルチメディア 札幌</b> 〒060-0806 北海道札幌市北区北六条西5-1-22 ☎ 011(707)1010
<b>マルチメディア 名古屋松坂屋店</b> 〒460-8430(松坂屋名古屋店南館4・5階) 愛知県名古屋市中区栄3-16-1 ☎ 052(265)1010	<b>マルチメディア 梅田</b> 〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町1-1 ☎ 06(4802)1010	<b>マルチメディア 京都</b> 〒600-8216 京都府京都市下京区東塩小路町590-2 ☎ 075(351)1010	<b>マルチメディア 博多</b> 〒812-0012 福岡県福岡市博多区博多駅中央街6-12 ☎ 092(471)1010	ヨドバシカメラの インターネットショッピング <a href="http://www.yodobashi.com">www.yodobashi.com</a>





## 風にふかれて ————— 今浦友喜

山形県の山寺にある山寺芭蕉記念館の屋根に、風で舞い散った桜の花びらが降り積もり、時折吹く強い風に花びらが舞い落ちていた。建物の影の部分に舞う花びらが入るように想像して、中望遠の単焦点レンズで丁寧な構図を決めてその瞬間をじっと待って撮影した。有名な一本桜や桜並木も好きだが、こうした何気ない、名前のない桜のふとした表情にも心が躍る。芭蕉のように詩を詠むことはできないが、詩を感じさせるような風景を捉えていきたい。

FUJIFILM X-T3 XF56mmF1.2 R APD







## 澳門の夜 ————— 柴田 誠

2023年11月、4年ぶりに訪れたマカオ（澳門）の街はコロナ禍前と変わらない賑わいを見せていた。カジノで名高いホテル・グランドリスボア（新葡京酒店）は、夜になるとまるで「亜細亜の夜の街」を象徴するかのようキラキラとした妖しく煌びやかな輝きを放つようになる。その前を大陸からの観光客が深夜まで途切れることなく行き交っていた。熱気を帯びたアジアの夜をフィルムシミュレーションのVelviaで捉えた。

FUJIFUIM X-S20 XC15-45mmF3.5-5.6 OIS PZ





## 青き疾走 ————— 小河俊哉

陽が沈んだ直後のわずかな時間に訪れるブルータイム。この時間を狙って撮影した一枚。日本発祥のモータースポーツ「ドリフト」。そのドリフトの年間選手権を争うD1GPの一幕である。ドリフトはその意味通り、車を意図的に横滑りさせる競技で、他のレースには無い躍動感あふれる動きを見せる。ドリフトが見せる躍動感あふれる動きを敢えて「青き時間」に撮影するため、青の発色が綺麗なXのカメラと200mmF2の明るいレンズを使い撮影した。

FUJIFILM X-T3 XF200mmF2 R LM OIS WR





# Photography First

原点への回帰。正統進化。



## X-T5

約 4020 万画素センサー・画像処理エンジンの最新デバイス搭載で高画質・高速 AF を実現  
小型軽量ボディに天面部 3 ダイヤル、3 方向チルト液晶モニターを備え、進化した " 写真機 " 登場

- 「X シリーズ」第五世代の裏面照射型約 4020 万画素「X-Trans™ CMOS 5 HR」センサー、高速画像処理エンジン「X-Processor 5」搭載
- 5 軸・最大約 7.0 段のボディ内手ブレ補正搭載
- 動物・鳥・車・バイク・自転車・飛行機・電車を AI で検出できる被写体検出 AI を搭載
- 6.2K/30P 4:2:2 10bit での映像記録に対応
- 質量約 557g のコンパクトボディ





*Photo KAO'RU*